関西大学『社会学部紀要』第34巻第1号，2002，pp. 285-388　　ISSN 0287-6817

研究ノート

17世紀末イングランドにおける二つの宗教論争 三位一体と義認

妹　尾　剛　光

Two Religious Controversies in the Late 17th Century England: Trinity and Justification

Goko SENO

Abstract

The controversy on Trinity. Unitarians asserted, based on the Scriptures and reason, that God is only one Person, that Christ is the Son of God, the Servant of God, the Holy Spirit the Power of God, so that neither is God. Against them Trinitarians contended that God is one, but that in God exist three Persons—the Scriptures testify to this and this does not contradict reason. Trinitarians, however, had various understandings of Trinity, and disputed with each other. Unitarians, taking advantage of this dissension, asserted the falsity of Trinitarianism. The controversy on Justification occurred among the dissenters. Strict Calvinists maintained that man can do nothing but commit sin, but that God does lead the elect to faith and, because of Christ's righteousness, makes them righteous and deserving of salvation. Against them, moderate Calvinists contended that man is a sinner, that no human virtues are perfect, that is, neither faith nor good works are meritorious righteousness duly bringing justification and salvation, but that faith and good works are indispensable conditions for salvation. Locke knew well about these controversies, but thought that the truth lay in the Scripture, searched it and set forth the results of this search in his books.

Keywords: Trinity, Justification, John Locke, Stephen Nye, William Sherlock, John Wallis, Arthur Bury, Robert South, John Howe, Tobias Crisp.

抄　録

三位一体論争においては、ユニテリアンは、聖書と理性を基にして、神は唯一つの位格である、キリストは神の子、神の僕、聖霊は神の力であって、どちらも神ではない、と主張した。これに対して三位一体論者は、神は一つである、しかし神には三つの位格がある、聖書はそのことを示し、理性はそれと矛盾しない、と主張した。しかし、三位一体論者の三位一体についての理解はさまざまであって、彼等の間でも論争が起こった。ユニテリアンはこの対立を利用して、三位一体論は誤りであると主張した。義認論争は、国教反対者の中での論争であった。厳格カルヴァン派は、人間は罪を行なうのみ、神は選ばれた者を信仰に導き、キリストの正しさの故に義として救いを与えられる、と主張した。穏健カルヴァン派は、人間は罪人であり、人間のどんな徳も完全ではない、信仰もよき業も義とされて救いを受けるに値する正しさではないけれども、信仰とよき業は救いの不可欠の条件である、と主張した。ロックは二つの論争をよく知っていたけれども、真理は聖書にあると考えて、聖書を探り、探究の結論を彼の著作で示した。

キーワード：三位一体、義認、ジョン・ロック、スティーヴン・ナイ、ウィリアム・シャーロック、ジョン・ウオリス、アーサー・ベリ、ロバート・サウス、ジョン・ハウ、トバイアス・クリスプ。

Ⅰ．三位一体論争

1．スティーヴン・ナイ（匿名）『ユニテリアン略史』1687.

17世紀末イングランドにおける三位一体論争、即ち、「ユニテリアン論争」の発端は、スティーヴン・ナイ Stephen Nye（c. 1648-1719. Cambridge の Magdalene College で学び、1679年 Hertfordshire の Little Hormead の教区司祭 Rector に叙任され、死ぬまでそうであった。Thomas Firmin の親友。）の著書（anon.), *A Brief History of the Unitarians, Called also Socinians. In Four Letters, Written to a Friend*（『ソッツィーニ派とも呼ばれているユニテリアン略史。友人に書いた四つの書簡。』), 1687（2版, 1691).（*N1* と略記する）である。初版は普通の組版であったけれども、2版は、ソッツィーニ派独特の縦二段組であり、特に第1、2書簡を中心に相当の個所において追加、修正、削除を行なっている。しかし、これは、新しく見出した事実や議論の提示、意味を明確にするための追加、修正、些細な誤りや言い過ぎの訂正、不適切な個所の削除であって、議論の要旨には何の変化もない。ナイはここで概略次のように論じた。

Ⅰ．第一書簡。「俗にソッツィーニ派と呼ばれているユニテリアンたち」の神に関する教えと歴史

「[ユニテリアンたちは] 神は唯一つの位格 Person であり、三つではない、と断言する。われわれの主キリストは、神の使者、代行者、僕、被造物である、と考える。彼等は、キリストは神の霊即ち力が聖マリアに生ませたものであるが故に、神の子でもあることを認める、ルカ伝1：35.。しかし、キリストあるいは父（上述のわれわれの主イエス・キリストの神、父）以外の誰か Person が全能、永遠の神であることを否定する。聖霊は、彼等によれば、神の力、霊気である、ルカ伝1：35.。」[1] この神に関する教えを除いては、レモンストラント派は公然とユニテリアンに同意している[2]。

小論は、2001年度関西大学学部共同研究費による研究成果である。

1）*N1*, pp. 3-4. Cf. *N1*, pp. 33-34.
　聖書からの引用の日本語訳は、引用されている表現に従う。小論で取り上げた書物、パンフレットの場合、そのほとんどは欽定訳聖書 Authorized Version からの引用である。

2）*N1*, p. 3.

キリストは神ではないことの、聖書による証明。

1．「父はキリストより上位であり、キリストの頭、神であり、彼が何を言い、何をすべきかの命令を彼に与えていた。」[3)]

2．キリストは神の被造物、所有物、僕、神に従う者である[4)]。

3．キリストは神の代行者、神と人との仲立である[5)]。

4．キリストは神から遣わされた者、自分のではなく神の意志を行なう者、神の教えを広める者であり、われわれの信仰、礼拝の主たる対象ではない[6)]。

5．キリストは知らないことがあり、自分の裁きの正しいことの根拠を父が自分と共にいることに置いている（ヨハネ伝8：16.）。また、誘惑により試みられている[7)]。

6．自分の一存では与えられないものがある（マタイ伝20：23.）。自分のために神の助けを請うている。死に、そして父によってよみがえらされ、復活後父から大きな力を与えられた[8)]。

7．キリストは「神の子」、「神の似姿」と言われており、神と明確に区別され、対照させられている（2版では、前段と後段が二つの項目に分けられている、従って、全体としては12項目あることになる）[9)]。

8．「非常に多くの章句が、父のみが神である、と明確に断言している。」[10)]

9．キリストが神であれば、キリストの人間の本性に聖霊を導き手として与える必要はなかったはずである[11)]。

10．キリストが神であれば、キリストが自分の奇蹟の業は神や聖霊の力によると言うのはおかしい[12)]。

11．キリストが神であれば、キリストを「女の子孫」（創世記3：15.）、「アブラハムの子孫」（創世記22：18.）、「モーセのような預言者」（申命記18：18.）、「神の僕」（イザヤ書42：1.）とは言わなかったはずである[13)]。

聖霊は神でないことの、聖書による証明。但し、4．5．及び2版追加の6．は、子にも当てはまる。

3）*N1*, pp. 4-5.
4）*N1*, pp. 5-6.
5）*N1*, pp. 6-7.
6）*N1*, pp. 7-8.
7）*N1*, pp. 8-10.
8）*N1*, pp. 10-11.
9）*N1*, pp. 11-13.
10）*N1*, pp. 13-14.
11）*N1*, p. 14.
12）*N1*, p. 15.
13）*N1*, pp. 15-16.

1．「聖霊」と「神の力」とは同じものとされている[14]。

2．神と神の力、霊気である聖霊とは明確に区別されている。神の霊は人間 Person であるように書かれているところがあるけれども、これは、愛(コリント前書 13：4-5.)、知恵(箴言 9：11. 2版, 箴言 1：2[2：2の誤]. 9：1.) などと同じく、比喩的表現である[15]。

3．聖霊は、聖霊とは別の Person である神に対するわれわれの祈りによって、神からわれわれに与えられる[16]。

4．神は、一つの Person として単数代名詞で示されている[17]。

5．使徒信条には、子や聖霊は神である、と言われているところはない。むしろ、二者は神とは区別されており、神の下にあると考えられている[18]。

(2版では、次に6として次のことが書き加えられている(従って、2版では、結論は7である)。世界の中の「無数の設計と仕掛」は、神がこの世の創造主であることを示している。しかも、唯一の神が居られることは、まず啓示が示している。その上、一つの神で十分であり、複数の神は不要、余計である[19]。)

6．結論。「三つの全能であり、[最も慈愛に溢れ(2版追加)]、最も賢明な Persons が居り、しかし唯一つの神が居る」という「三位一体論者の信仰は、不条理であり、理性に反し、かつ自己矛盾している、従って、間違いであるだけでなく、ありえないことである。」[20]

今ソッツィーニ派と呼ばれている人々は、キリスト教の最初の時代には、「ナザレ人の分派 Nazarens (使徒行伝 24：5.)」と呼ばれていた。また[その後(2版追加)] Ebionites, Mineans, Artemonites, Theodotians, Symmachians, Paulinists, Samosatenians, Photinians, Monarchians などと呼ばれていた。その中には Theodotian, Symmachus, Paulus of Samosatum, [Lucianus (2版追加)], Photinus など注目に値する人々がいた。

彼等の教えは使徒に由来し、最初教会に広く受け容れられていた。教皇ヴィクトル Victor[189-198]が194年この教えを迫害しようとしたけれども、成功しなかった。しかしやがて Justin Martyr, Origen らアリウス派の考え「父は子や聖霊よりも、時、威信、力において先にある。しかし、時満ちてわたしたちの本性を身につけられた言葉即ち子は、この世よりも前に生まれ、あるいは創られており、世界創造において父の僕、代行者であっ

14) *N1*, pp. 16-17.
15) *N1*, pp. 17-18.
16) *N1*, pp. 18-19.
17) *N1*, pp. 19-22.
18) *N1*, pp. 22-24.
19) *N1*, 2版, pp. 8-9.
20) *N1*, p. 24. 2版, p. 9. Cf. *N1*, pp. 158-159.

た。聖霊は、子により創造され、すべての物の創造において子に従った。」[21] が迫害の助けによって広く受け容れられるようになった。

しかし、ニケア公会議［325 年］でアリウス主義は断罪され、子の永遠、父との対等を主張する教えが皇帝の支持を得て支配的となった。更にその後、子と聖霊は父と同じ一つの実体と本性を持つ神である、という教えが現われ、ローマ皇帝や教皇の刑罰法規の助けを得て、キリスト教諸国で確立された。

こうしてナザレ派、アリウス派、ニケア派が今キリスト教国の中で公然と認められているのは、トランシルヴァニア Transilvania の少数の都市、［モスクワ大公国ツァーリ Czars of Moscovy の支配地域（2 版追加）］及び［黙認されているのであるが（2 版追加）］オランダの幾つかの教会［2 版では、「幾つかの教会」の代りに「一部」］でだけである。トルコやその他のイスラム教国にいるキリスト教徒はナザレ派、アリウス派が多い。ハンガリー Hungaria, スロヴェニア Sclavonia, イリュリクム Illyricum にもアリウス派は多くいる。また、最も有名で学識ある教会の著作者の中に、Erasmus（アリウス派）, Grotius（ソッツィーニ派）, Petavius（アリウス派やソッツィーニ派に近い）, Episcopius（アリウス派）, Sandius（アリウス派やソッツィーニ派に近い）など、アリウス派やソッツィーニ派また彼等に近い者がいる[22]。

第二-四書簡では、三位一体論者が「三位一体」や「子、聖霊は神であること」を示していると言う聖書の個所を検討して、この点での三位一体論者の聖書理解の誤りを指摘している。

II．第二書簡。旧約聖書。

三位一体論者が自説の証明として挙げている旧約聖書の章句は［大抵のものは（2 版追加）］何故それの証明であるのかは明確でない。［新約聖書では、旧約聖書で神やその他の人について書かれていることを、その文字通りの意味ではなくて、神秘、比喩と解してキリストに当てはめるということがよく行なわれている。（2 版追加）[23]］ 旧約聖書では、三位一体やキリスト、聖霊が神であることは言われていない、それは新約における啓示である、ということは、学識と思慮ある三位一体論者が認めている、否、カトリック Catholicks と改革派の極めて多くの人々［2 版では、これの代りに「あらゆる宗派、教派の神学者の

21) *N1*, p. 28. Cf. *N1*, pp. 33-34.
22) *N1*, pp. 26-36. 2 版, pp. 10-12.
23) *N1*, 2 版, pp. 16-17.

より一般的な考え」]、また、ユダヤ教会の考えでもある[24]。

III. 第三書簡。福音書と使徒行伝。

マタイ伝28：19. にある「父と子と聖霊の名において洗礼を授け」[られる] は、父と子と聖霊に導かれ、従うと告白する、ということであって(モーセ(コリント前書10：1-2.)やヨハネ(使徒行伝19：3.)についても同じように言われている)、子や聖霊が神であるという意味ではない[25]。ヨハネ伝1：1-18. にある「言葉」とは、「神の永遠の子」のことではなくて(聖書にそう言われているところはない)、「神の力と知恵」(これは、キリストに豊かに与えられてある) のことである (Grotius に従っている)[26]。などと書かれている。

IV. 第四書簡。書簡と黙示録。

「天において証しするのは三者、父、言葉、聖霊です。この三者は一つです。」(ヨハネ第一書5：7.)——1. これは最初の聖書にはなかった、後からの付加である。2. これの意味は、「三者は一神である」ということではなくて、「三者はその証言において一つである」ということである[27]。などと書かれている。

第四書簡では、このような個々の個所の検討に続いて、新約聖書全般に関わるソッツィーニ派の考えとして、次の三点が挙げられている。

1. 教会の聖書解釈、即ち、「三つの全知、全能の Persons [あるいは神] があり、唯一の神がある」という三位一体論は、「不条理あるいは自己矛盾、そしてありえないことである」、従って、われわれはこの教えを拒否する。同じ理由で「神人同形説 (神は、人間と同じ身体諸部分、情念を持っている)」や「実体変化の教え」を拒否する。「われわれは聖書を言葉の音によってではなく、物事の本性によって解釈すべきである。」[28]

2. 最も学識あるプロテスタントの人々の中には、聖書の章句は、ヨハネ伝1：1. など以外は [Episcopius は、ヨハネ伝1：1. などについても、ソッツィーニ派の解釈が正しいと認めている (2版追加)]、三位一体、子や霊の神であることの「証拠としては不完全であり、決定的なものではない」と考えている人々がいる。カトリックの教会博士たちは、「三位一体や、子、聖霊の神であること」は聖書によっては証明されず、言い伝えによっ

24) *NI*, pp. 67-68. 2版, pp. 22-23.
25) *NI*, pp. 77-79.
26) *NI*, pp. 80-89.
27) *NI*, pp. 151-153.
28) *NI*, pp. 158-160.

て証明される、と考えている[29]。

上述の聖書の章句に基づく議論の他に、「正統教会の人々 the Orthodox は、キリストが人であると同時に神でないならば、キリストはわれわれの罪に対する神の正義を満足させることはありえない、即ち、罪に対する十分な償いではありえない、として反対する。」――1.「主キリストが罪の贖罪、償いであるということは、キリストが神でないということの論証である。なぜならば、神は、われわれの罪の贖いを与え、行なうのではなく、受け取るのだからである。」 2. アダムの時以来、けものの捧げ物、生贄が赦しのための十分な償い、贖いとして受け容れられてきたのであるから、神の子は人間にすぎなくても、十分な贖い、贖罪である[30]。

3.「正統教会の人々は、キリストにおける二つの本性（神と人間の本性）の区別によって、ソッツィーニ派の議論の多くを受け容れない。」即ち、「父はわたしよりも偉大な方」（ヨハネ伝 14：28.）、「わたしは自分では何もできない。」（ヨハネ伝 5：30.）などは、キリストにおける人間の本性に従って言えることであり、神の本性に従えば、別のことが言える、などと言う。――1. キリストにおける二つの本性の区別という考えは、上述の第一書簡 8-11（初版）によって明確に覆されている。2. この言い方に従えば、キリストが人間として、処女から生れ、十字架にかけられ、死に、葬られ、よみがえり、昇天したことは、神の本性に従えば、ないことになる。これは、新約聖書、キリスト教を否定することである。また、キリストは本当の神ではないというソッツィーニ派の言い分は、キリストの人間の本性に従えば、成り立つことになる[31]。

以上の四書簡の後に付け加えられた、四書簡を読んだ学識ある人［Henry Hedworth（匿名）］の書簡では、更に次のことが主張されている。

「ユニテリアンの教えは、……明確、明白な聖書の議論に基づく、説明ができる、理性に適った信仰である。一方、三位一体論者の教えは、不明瞭なあるいは見当違いの章句に基づいている、そして、自己矛盾しているか、あるいは全く理解できないが故に……認めることができない、理性に合わない区別によって弁護されている。」こうして「1. 三位一体論者の教えは、キリスト教の不可欠のあるいは基礎の教えではない。2. ユニテリアン、ソッツィーニ派の人々を、その教えの故に刑罰あるいは財産没収の下に置くことは不正であり、キリスト教に反する。3. 三位一体論者は、ユニテリアンをキリスト教徒である兄

29) *NI*, pp. 160-162. 2 版, p. 45.
30) *NI*, pp. 162-163.
31) *NI*, pp. 163-166.

弟と認めるべきである……。」[32)]

2．匿名『アタナシウス信条に関する簡単な覚書』1690.

1690年、アタナシウス信条（聖アタナシウス（c. 296-373）の作と伝えられていたけれども、1642年オランダの神学者G.J. Vossはそれが誤りであることを決定的に証明した。後述のJohn Wallis第三書簡はこのことを示唆しており（*W3*, p. 1.）、Jean le Clerc (anon.), *An Historical Vindication of the Naked Gospel*, p. 67. Robert South (anon.), *Animadversions upon Dr. Sherlock's Book*, p. 257. はこのことを明確に認めている。）の三位一体を論じた個所を順次掲げて、それぞれに対して批判を加えた（anon.), *Brief Notes on the Creed of St. Athanasius*（『聖アタナシウス信条に関する簡単な覚書』), 1690.[33)] が出版された。

アタナシウス信条は、イングランド教会の公祈禱書 *The Book of Common Prayer* にある英訳に従い訳せば、次の通りである。

「救われようとする者は誰でも、何よりもまず、普遍教会の信仰 the Catholick Faith を抱くことが必要である。この信仰を欠けるところなく、汚すことなく持ち続けない者は誰でも、疑いもなく永遠に滅びる。

普遍教会の信仰とは、こうである。わたしたちは、唯一の神を三位一体において、三位一体を統一において礼拝する。位格を混同せず、実体を分割しない。なぜならば、父の位格が一つ、子の位格がもう一つ、聖霊の位格が更に一つある、しかし、父、子、聖霊の神は全く一つ、その栄光は等しく、その尊厳は等しく永遠であるからである。父のありようと同じく、子はあり、聖霊もまたそうある。父は創造されたことがなく、子は創造されたことがなく、聖霊は創造されたことがない。父は限りなく、子は限りなく、聖霊は限りない。父は永遠、子は永遠、聖霊は永遠である。しかし、これらは三つの永遠ではない、一つの永遠である。また、三つの限りないものがあるのではなく、三つの創造されたことがないものがあるのでもない。一つの創造されたことがないもの、一つの限りないものがある。同じように父は全能、子は全能、聖霊は全能である。しかし、それらは三つの全能ではない、一つの全能である。同じく父は神、子は神、聖霊は神である。しかし、それらは

32) *N1*, p. 168.
33) 小論は、後述4のパンフレット *A* による。

三つの神ではない、一つの神である。同じように父は主、子は主、聖霊は主である。しかし、三つの主ではなく、一つの主である。なぜならば、わたしたちは、キリスト教の真実により、どの位格もそれだけで神であり主であると認めないでいるわけにはゆかないように、普遍教会の信仰により、三つの神、三つの主がおられると言うことを禁じられているからである。

父は何ものからも作られず、創造されず、生まれない。子は父のみから、作られず、創造されず、生まれる。聖霊は父と子とから、作られず、創造されず、生まれず、出て来る。こうして一つの父がおられる、三つの父ではない。一つの子がおられる、三つの子ではない。一つの聖霊がおられる、三つの聖霊ではない。この三位一体では、どれも他のものの前になく、後にない。どれも他のものより大きくなく、小さくもない。三つの位格はすべて、共に等しく永遠であり、等しく対等である。こうして、すべてのものにおいて、前に言われているように、統一を三位一体において、三位一体を統一において礼拝すべきである。従って、救われようとする者は、三位一体をこう考えなければならない。

その上、永遠の救いには、わたしたちの主イエス・キリストの受肉を正しく信ずることもまた必要である。なぜならば、正しい信仰とは、神の子、わたしたちの主イエス・キリストは、神であり、人間であると信じ、告白することであるからである。父の実体から、世々の前に生まれた神であり、母の実体から、この世の中で生まれた人間である。完全な神であり、完全な人間である。理性に適う魂と人間の肉から成り、神性に関しては、父に等しく、人間性に関しては、父に劣る。神であり人間であるけれども、二つではなく、一つのキリストである。神性の肉への転換によるのではなく、人間性を神の中に取り入れることによって、一つである。実体の融合によるのではなく、位格の統一によって全き一つである。なぜならば、理性に適う魂と肉は一つの人間であるように、神と人間は一つのキリストであるからである。

キリストは、わたしたちの救いのために殺されて、黄泉に降り、三日目に死者の中からよみがえられた。天に昇られ、全能の神、父の右に坐っておられる。そこから生者と死者を裁くために来られる。キリストが来られる時、すべての人間はからだと共によみがえり、自分の行ないについて申し開きをする。善をなした者は永遠の生命の中に入り、悪をなした者は永遠の火の中に入る。

これが普遍教会の信仰である。これを誠実に信じないならば、救われることはない。

父と子と聖霊に栄光あれ。それが始めにあったように、今もあり、とわにある、世々限りなく。アーメン。」

これを批判した『簡単な覚書』の要旨は、次の通りである。

神の法に従う「よき生活」は、救いに絶対に必要である。しかし、普遍教会の信仰の中でこれまでに教会の中で論争のあった事柄に対する「正しい信仰」は、必要ではない。努力して探究した後の無知は、罪ではない[34]。

アタナシウス信条の信仰は、どの時代においても、アタナシウス自身の時代においても、教会全体の信仰ではなかった。この信条で三位一体について言われていることは、要するに、「唯一の真の神は三つの別々の位格 distinct Persons であり、三つの別々の位格（父、子、聖霊）は唯一の真の神である。」ということである。これは、「Peter, James, John は三つの Persons であり、かつ、一人の人間である」と言うのと同じ、理性に反した矛盾である。父と子とは別の実体 Substance［祈禱書では、Person］であり、かつ父が唯一の真の神であるとすれば、子は唯一の真の神でないことは明らかである。また、この三位一体論は聖書には書かれていないことである。聖書は、唯一の神のみを認めている。『ユニテリアン史』を見よ[35]。

「子は生まれる begotten」のであれば、「父のみから」ではない。父と母の両者からである。「父のみから」であれば、「生まれる」のではなく、「作られる」か「創造される」である。「聖霊は子から出て来る」のではない。父のみから（ヨハネ伝 15：26.）と言われている。「生まれる」と「出て来る」とは同じ意味である。子は「父は私よりも偉大な方」（ヨハネ伝 14：28.）と言っている。また、生むものは、生まれるものよりも先にある。「正しい信仰とは、神の子、わたしたちの主イエス・キリストは神であり、人間であると信じ、告白することである」――そうであれば、キリストは二つの Persons である。その上、人間と神との結合は、有限と無限との結合であり、不可能なことである[36]。

「この信条は、キリスト教だけでなく、あらゆる宗教の基礎、即ち、理性と啓示の基礎を覆えす。理性と啓示の原則の中で、神は一つである、ということより明白な原則はないからである。」[37] その上、「この信条は、これを信じかつ告白しないすべての者に対し、その始め、真中、結びで、永遠の滅びの宣告をしている」という点で、「キリスト教の精神、生命である愛、慈愛を破壊する。」こうして「ここからキリスト教徒の間での多くの、終りのない論争と戦争が生まれた。」[38]

34) *A*, p. 10.
35) *A*, pp. 11-13.
36) *A*, pp. 14-15.
37) *A*, p. 16.
38) *A*, p. 17.

3．ウィリアム・シャーロック『三位一体と受肉の教え弁護』1690.

1690 年ウィリアム・シャーロック William Sherlock (c. 1641-1707. Cambridge の Peterhouse で学び、1660 年 BA, 1663 年 MA を取得。1669 年 Lower Thames St., London の St. George's 教区司祭 Rector に叙任され、説教者として名をなし、多数の本を書いた。1680 年 DD を取得。1681 年 St. Paul's Cathedral の St. Pancras の参事会員祿 prebend を与えられ、1685 年 the Temple の長 master とされた。名誉革命の前には王権神授説を主張し、William と Mary に対する臣従宣誓拒否者 nonjurors の代表的な一人であったけれども、1690 年 8 月臣従宣誓した。宣誓より前に、下記の『三位一体と受肉の教え弁護』は出版された。1691 年 6 月 St. Paul's の主席司祭 dean とされた。）は、アタナシウス信条を弁護するとともに、『ユニテリアン略史』と『簡単な覚書』を批判した William Sherlock, *A Vindication of the Doctrine of the Holy and Ever Blessed Trinity, and the Incarnation of The Son of God. Occasioned By the Brief Notes on the Creed of St. Athanasius, and the Brief History of the Unitarians, or Socinians, and containing an Answer to both* (『神聖にして永久に聖なる三位一体と神の子の受肉の教え弁護。聖アタナシウス信条に関する簡単な覚書とユニテリアン即ちソッツィーニ派略史をきっかけに書かれ、両者に対する回答を含む。』), London, W. Rogers, 1690（2 版, 1691. 3 版, 1694）.[39] を出版した。その概要は次の通りである。

1．アタナシウス信条弁護

物の本性における現実の矛盾（物の本性において矛盾を含む物は存在しない）と、人間の不完全な知性において矛盾と思われることとは別のことであり、区別すべきである。従って、人間がその本性を理解していない物について、それに矛盾があると言うことは、人間の無知によるものである[40]。

39）小論は、2 版によっている。
40）Sherlock, pp. 2-10. pp. 140-150.
シャーロックは、William Sherlock, *The Danger of corrupting the Faith by Philosophy. A Sermon Preach'd before the Right Honble the Lord-Mayor, and Court of Aldermen, At Guildhall-Chappel, On Sunday, April 25. 1697*, London, W. Rogers, 1697. の中でも、「神が啓示されたことは、人間の理性に明確に理解できないことでも、神の権威を基に信じなければならない。それは、感覚や理性に明確であるものを、それの本性（感覚や理性にはそれは理解できない）が理解できなくても、信ずるのと同じことである。」と論じて、われわれの感覚、理解を越える宗教の中に哲学を持ち込み、啓示一般及びキリスト教の個々の教え（三位一体、神が子を生むこと・始まりのない永遠の生まれ、受肉など）を哲学、理性に矛盾するとして批判するのは、「無信仰と異端を保護する」「空しいだまし事」の哲学である、と主張している。

アタナシウス信条は、三位一体と受肉の信仰に必要なこと以上のものを含んではいない[41)]。

「本質あるいは実体をPersonから区別することは容易ではない」。しかし、三つのPersonsが一つの実体の中にあるということは、測り知れない神秘であるけれども、不条理、矛盾ではない。神の三つのPersonsは、別々のdistinct Personsではあるけれども、『簡単な覚書』が言うように、三人の人間の如く「互いに区別された別個のdivided and separate」ものではない。本質的に一つの神である[42)]。

霊の場合、同じ一つの自己意識Self-consciousnessが一つの霊を作る。その意味で、父と子と聖霊は一つである。聖書にそう書かれている（ヨハネ伝1：1.18. 10：30.38. コリント前書2：10. ヨハネ伝16：13-15. ロマ書5：5. など）。これは、「知識、意志、感情の一致」即ち「心の一致Moral Uuion」であるにとどまらず、「相互の共通する自己意識によって一つ」である。即ち、各Personは、他の二Personsを自分の中に持っている。「父が子の内におられ、子が父の内にいる」（ヨハネ伝10：38.）と言われている通りである[43)]。

神の本質、実体、即ち、無限の真理と知恵を有限の物質と同じものと考えるところに三位一体についての誤解が生ずる。神の三つのPersonsは、「三つの無限の心であって、それぞれの自己意識によって互いに他から区別されるとともに、それぞれの他に対する相互意識によって本質において結び合っている」。「絶対の完全」、「完全な知恵、知識、力、善、正義」は、無限の心にしかありえない[44)]。

三位一体に関する教父（Gregory Nyssen, St. Austinら）やスコラ神学者の教えは、上述の私の説明と一致している[45)]。

聖書は、理性に従い解釈すべきである。啓示は、明白な理性と矛盾することはありえない。しかし、一つの神は三つのPersonsである、しかし、三つの神ではない、という三位一体の信仰は、自然理性と矛盾しない。それは、一つの神という自然理性の信仰に、神のPersonsに関わる啓示の教えを付け加えている。しかし、この啓示の教えは、自然理性が見出すことのできないものである[46)]。

---

41) Sherlock, pp. 10-21.
42) Sherlock, pp. 47-48. Cf. Sherlock, pp. 61-64. pp. 87-88. pp. 97-98. p. 141.
43) Sherlock, pp. 48-57. Cf. Sherlock, pp. 58-68. p. 88. p. 99. p. 100. pp. 124-128.
44) Sherlock, pp. 68-85.
45) Sherlock, pp. 100-139. Cf. Sherlock, p. 144.
46) Sherlock, p. 147. Cf. Sherlock, p. 216.

II.『簡単な覚書』批判

普遍教会の信仰の中でこれまでに論争のあった諸々の点の信仰は、救いに必要ではない。神の法に従う、よき生活は必要であるが、努力して探究した後の無知は、罪ではない。[*A*, p.10.] ――これは、キリストに対する信仰を救いに無用のものにする。しかし、キリストに対する然るべき、真の信仰こそが救いをもたらす。然るべき信仰とは、普遍教会の信仰［箇条］である。アタナシウス信条は、この信仰を記している。それは、洗礼の形式「父と子と聖霊の名において」と同じ信仰である[47]。

聖書は「誤りのない完全な信仰原則」であるから、それ以外のもの、即ち、アタナシウス信条の如きものは必要ではない。[*A*, p. 10.] ――救いに必要な信仰を明確にすること、それを明確に記した初期教会の、言い伝えによる信条は必要である[48]。アタナシウスがその当時批難されたのは、その信仰の故ではなかった[49]。

神は一人で、自分の似姿である子を生むことができる。「生まれる」と「出て来る」とは違う意味である。[Cf. *A*, p. 14.][50]

神の三つの Persons は、本性は対等で同じものであり、従属関係において順序がある。原因と結果が同時にあって、どちらが先とは言えない場合がある。父、子、聖霊は、本質的に一つの神であるから、その間にどちらが先、後はない。[Cf. *A*, pp. 14-15.][51]

キリストは二つの Persons ではなく、一つの Person であり、「一つの Person において神-人である」。魂とからだは、互いに対応するものを持つ対等のものではない、それでもその結合はありうる。同様に、神と人との結合の仕方が理解できないからといって、結合がありえない、とは言えない。著者は、有限と無限の結合と言って、時や所のひろがりを考えているけれども、有限・無限の心に時、所のひろがりはない。[Cf. *A*, pp. 15-16.][52]

一つの Person の中に二つの意志、二つの理性がある、ということはありうる。その二つの本性 Natures の結合において、1．上位の本性（神の本性）が Person の全体を治める、2．従って、この上位の本性の中に Person としての一つの意識がある、という場合がそうである。[Cf. *A*, p. 16.][53]

---

47) Sherlock, pp. 21-27.
48) Sherlock, pp. 28-32.
49) Sherlock, pp. 35-44.
50) Sherlock, pp. 257-258.
51) Sherlock, pp. 259-261.
52) Sherlock, pp. 262-266.
53) Sherlock, pp. 267-269.

III.『ユニテリアン略史』批判

批判の中心は、第一書簡の中の、キリスト、聖霊は神でないことの証明に向けられた。

キリストは神でないことの証明に関して。

1．神と子の本性 Nature は同じであるが、Persons の従属はあり、「父が本源の心、知恵」、「子は父の知恵が反映された姿」である[54]。

2．キリストはあらゆる被造物より前に生まれたのである、従って、被造物ではない。キリストのその他の呼び名も、キリストが神であることを否定するものではなく、むしろ神であることを示している[55]。

3．この世の自然の統治においては、神の Persons の区別、各々の Person が行なう仕事の区別はなく、本源の心、知恵である父が子と聖霊の協力を得て、唯一神として治められている。しかし、人間の救いにおいては、子には、父から子の国、仲立者の国 the Mediatory Kingdom が与えられていて、そこでは子が治める。子が罪を赦し、この世を裁き、死者をよみがえらせる。悪魔の国が滅ぼされ、悪魔や悪人が火の湖即ち第二の死に投げ入れられ、善き人々がよみがえって永遠の生命を与えられる時には、この国は父に引き渡される[56]。

4．子はその力を父から受け、父の意志を行なう。子は神の永遠の子であり、父と一体であり、従って、宗教礼拝の適切な対象である[57]。

5．これは、救い主の人間性に関わる事柄を神性に関わらせている[58]。

6．これも救い主の人間性に、及び、父への従属に関わる事柄である。キリストは、三位一体の神以外のものの助けを求めてはいない。「唯一の神」について言えることは、「三位一体のそれぞれの Person」について同じように言える、というのは誤りである[59]。

7．これは、父と子との区別を示しているけれども、子が神でないことを示してはいない[60]。

8．父が「唯一の真の神」と言われている時、当時の人々が礼拝していたさまざまな神々と対照させられているのであって、子や聖霊が神から排除されているのではない[61]。

9．10．父、子、聖霊は別々に働くのではなくて、一つのエネルギー、力として働く。人間の聖化は、特に聖霊の仕事である[62]。

---

54) Sherlock, pp. 154-155. Cf. Sherlock, pp. 167-169. p. 259.
55) Sherlock, pp. 155-160.
56) Sherlock, pp. 167-172. pp. 175-176.
57) Sherlock, pp. 173-174. p. 176.
58) Sherlock, pp. 176-177. Cf. *N1*, pp. 12-13.
59) Sherlock, pp. 178-184.
60) Sherlock, p. 184.
61) Sherlock, pp. 184-187.
62) Sherlock, pp. 187-188.

11．キリストが事実こういう者であったことに間違いはない。その上、旧約聖書では、キリストは「神の子」とも言われている[63]。

聖霊は神でないことの証明に関して。

1．2．聖霊は、神とは別のものであり、しかし神のみにふさわしい「Person としての行ない」をするものであるから、Person である[64]。

3．父、子、聖霊が一体となったのが唯一の真の神であり、人間の礼拝の対象である[65]。

4．これは、Person と神とを混同している[66]。

5．子や聖霊が神でないならば、この二者が使徒信条や洗礼形式の中に入れられることはなかったはずである。原始教会の人々が子と聖霊は神であると信じていたことは、当時の信仰の記録から明らかであり、アリウス派やソッツィーニ派の異端が教会を悩ます以前には、それを信条の中に書き込む理由はなかった[67]。

Ⅳ．ソッツィーニ派批判

ソッツィーニ派の教えは、キリストは人間にすぎない、神はその力によって聖処女の胎の中にキリストを作り、また、キリストを死者の中からよみがえらせ、天に昇らせた、聖霊は神の力と霊気 Inspiration にすぎない、ということである[68]。

1．この教えは、聖書をあざけっている。

旧約聖書でキリストについて言われているとキリストや使徒が認めている文章を父についてのことと考えている（『ユニテリアン略史』第二書簡）などで、聖書に不条理なあるいは軽薄な、取るに足りない意味を押しつけている。また、ヨハネ伝1：1-18. の理解を Grotius に従っていると言っているけれども（『ユニテリアン略史』第三書簡）、Grotius を読み間違えている。また、Socinus は、「言葉」は Person しかし人間であると考えているのに対し、『ユニテリアン略史』の著者は、「何か神のもの」、「神の性質、付帯物、神の力と知恵」と考えている[69]。

2．［キリスト教の予型、象徴であった――神殿は、受肉の神キリストのからだの象徴、祭司長 High Priest といけにえは、キリストとその死の象徴――］ユダヤ人の宗教体制を

63) Sherlock, p. 188.
64) Sherlock, pp. 188-191.
65) Sherlock, pp. 193-194.
66) Sherlock, pp. 195-197.
67) Sherlock, pp. 197-198.
68) Sherlock, p. 198.
69) Sherlock, pp. 199-231.

あざけっている[70]。

3．キリスト教をあざけっている。

「人間を贖うために、神は御自分の子、御自分の独り子をお与えになった（ヨハネ伝3：16.）という神の驚くべき愛」[71]が核心の奥義であり、「キリストは神の身分でありながら、……僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」（フィリピ書2：6-8.）[72]ということを強調するキリスト教を、キリストは人間にすぎないとすることによって、無意味なものにしている。

聖書、キリスト教の信仰に従えば、「キリストは地上の自分の教会をすべての敵から守り、人間や悪魔の悪意を抑え、支配し、罪を赦し、新しく恵みを与え、死者をよみがえらせ、この世を裁き、悪人を地獄に落とし、誠実な弟子に天国を与える力を持っていなければならない。」[73]ソッツィーニ派の教えでは、キリストの知識・力は、キリストに本来備わっている知識・力ではなくて、神からの啓示、霊感により与えられた知識、神に対する執り成し、嘆願により神が行なわれる力であることになる[74]。

4．異教や教皇教の偶像崇拝を正当化し、少なくとも許す。

ソッツィーニ派の中で少なくとも、人間にすぎないキリストの礼拝を認めている者にとっては、被造物（異教の神々、天使、聖人、マリア）礼拝は偶像崇拝ではないことになる[75]。

自分の説明が持つ意味、含みを十分に吟味せずに、神の全能とアタナシウス信条に寄り掛かったシャーロックのこの三位一体弁護論は、ユニテリアンの恰好の攻撃目標となった。

4．匿名『アタナシウスの行ない』『シャーロック三位一体と受肉の教え弁護批判』1690.

シャーロックのこの書物出版から1ヶ月程後には、シャーロック『三位一体と受肉の教え弁護』批判に『簡単な覚書』と、三位一体論とアタナシウスの行ないを批判した『アタ

70) Sherlock, pp. 231-238.
71) Sherlock, p. 238.
72) Sherlock, p. 239.
73) Sherlock, p. 243.
74) Sherlock, pp. 243-252.
75) Sherlock, pp. 252-255.

ナシウスの行ない』とを付け加えた（シャーロック批判だけのパンフレットも出版された）、(anon.), *The Acts of Great Athanasius. With Notes, By way of Illustration, On his Creed; And Observations on the Learned Vindication of the Trinity and Incarnation, by Dr. William Sherlock*（『偉大なるアタナシウスの行ない。彼の信条に関する説明としての覚書、及びウィリアム・シャーロック博士による三位一体と受肉の学識ある弁護に関する考察を付す。』), 1690.（*A* と略記する）が出版された。

このパンフレットでは、まず『アタナシウスの行ない』で三位一体論批判を次のように書いている。

旧、新約聖書では、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」[出エジプト記 20：3.]（ホセア書 13：4. マルコ伝 12：32. コリント前書 8：4. ガラテヤ書 3：20.）、父なる神以外のものは神ではない（マルコ伝 10：18. エフェソ書 4：4-6.）、と明確に言われている。これに対して、神は三つである、父、子、聖霊のそれぞれが神である、と言う人々がいる。しかし、聖書の趣旨は明らかであるから、学識ある三位一体論者は、三位一体の教えは、聖書ではなく、教会の言い伝えに基づいている、と言っているほどである。

シャーロックも、教会の言い伝えの信仰を重視し（Sherlock, pp. 29-31.）、また、理性の明確な指図に反する啓示は信じない、とも言う（Sherlock, p. 151.）。しかし、ソッツィーニ派の人々は、聖書即ち神の言葉を信ずる。三位一体論者は、スコラ哲学・形而上学の微細な区別によって明確な聖書の言葉に反する信条、聖書や使徒信条に反する信条を作り上げた。この中で有名な信条がアタナシウス信条である[76]。

続いて、アタナシウスについて、彼や彼を支持した人々の策略、悪行を数えあげて、アタナシウスは普遍教会の信仰の擁護者であったことを示してアタナシウスを弁護したシャーロックのアタナシウス略伝（Sherlock, pp. 37-44.）は誤りである、と主張している[77]。

次に、『簡単な覚書』をはさんで、シャーロック『三位一体と受肉の教え弁護』批判を次のように書いている。

シャーロックは、従来のアタナシウス信条・三位一体弁護論を放棄して、「自己意識」と「相互意識」という、これまで聞いたことのない言葉を使って、三位一体を説明している[78]。

76) *A*, pp. 3-4.
77) *A*, pp. 4-10.
78) *A*, p. 17.

I．神の実体、本質、本性について

シャーロックは、われわれは実体の観念を物質から得られるもの以外には持っていない（Sherlock, p. 69.）、神の実体は知恵と真理であるから、これを物質から得られる実体の観念と混同してはならない（Sherlock, pp. 70-73.）、スコラ神学者は、三位一体を説明しようとして人為の言葉（本性、本質、実体、位格など）を使ったけれども、神は人為の言葉の及びえないものであり、また、教父たちはこれらの言葉をさまざまに違う意味に使っていたから、スコラ神学者の説明はうまくゆかなかった（Sherlock, pp. 138-139.）、と言う。――これは、三位一体の弁護ではなく、それの転覆であり、異端である。シャーロックは、「現実の神実体があることを否定しており」（「知恵と真理」は実体ではなく、実体の性質である）、人々はこれまでこれらの言葉を不適切な仕方で神に当てはめてきた、と言っている。これは、『簡単な覚書』の著者の「神の実体と Person との間に区別はない」という主張を認めているということである。それに対して、三位一体論者は、「ニケア及びアタナシウス信条を守り、現実の神実体を想定し、そこに神の Persons が三つあると考えている。」その上、シャーロックには自己矛盾がある。神に実体や Persons はないと繰り返し主張しながら、三つの Persons は「三つの現実の実体的存在」、「実体として別々の distinct もの」である（Sherlock, p. 47.）と異端の考えを言っている[79]。

II．Persons、その［自己］統一と区別について

「神は三つの、無限の霊 Spirits, 心 Minds, 存在 Beings である。」（Sherlock, p. 66. p. 258.）――これでは、三つの神がいることになる。これは、聖書にも普遍教会の著作者の書物にもないことである[80]。

この三つの「霊、心、存在」は、「三つの限界ある被造物の心と同じように区別される」（Sherlock, p. 67.）、Peter, James, John と同じく「現実に別々の Persons」（Sherlock, p. 104.）である。――これは多神論である。学識ある三位一体論者は、従って、「現実に really 別々」とは言わずに、「様相として modally 別々」と言ってきた[81]。

「神の各 Person は自分自身についての自己意識を持ち、［これによって］神の他の Persons とは別の自分を知り、感ずる。」（Sherlock, p. 67.）――これほど各 Person が別々の他者であることを示しているものはない。そうであれば、神は、これら別々の三つのもの

79) *A*, pp. 18-19.
80) *A*, p. 20.
81) *A*, p. 21.

が合成されたものであることになる[82]。

神の各 Person は、「知恵、善、正義、力において絶対に完全である」(Sherlock, p. 81.)。——そうであれば、各 Person は「絶対に完全な神」であり、一つの神以外のものは必要ではないことになる。その上、「相互意識」は不要になる。なぜならば、各 Person が「絶対に完全な知恵、力、善」を持っているのであれば、それに加えて「相互意識」は不要だからである[83]。

神の各 Person は別個の Person であり、それだけで一つの神 a God である（Sherlock, p. 98.）ならば（Sherlock 以外の三位一体論者は the God と言ってきた）、三つの Persons は三つの神であることになる[84]。

III. Persons の統一とそれらが唯一つの神を作る仕方について

三つの Persons は相互意識により一つの神となる、というシャーロックの説明は成り立たない。

1．相互意識が神の三つの Persons を一つのものにするのであれば、神は、他の霊や人間の場合と同じく、一つの Person であることになる[85]。

2．この説明は、実体変化にも同じように当てはめることができる。即ち、天にあるキリストの本来のからだと聖餐式のパンとの間には、相互意識による統一がある、従って、聖餐式のパンのそれぞれはキリストの本来のからだと同じ一つのからだである、と言うことができる[86]。

3．キリストの人間としての本性は、神としての Person のすべてを意識することはありえない（Sherlock, pp. 269-270.）から、「普遍的な、全体としての、完全な相互意識」が心や霊の統合を作るのに必要であるならば、キリストの受肉（神と人間との霊の結合）はありえないことになる。

これに対して、シャーロックが言っているように、下位の本性における意識は部分的なものでよい（Sherlock, p. 269.）のであれば、①信仰篤い人間と聖霊との間に Person としての結合がありうることになる。②神の三つの Persons には普遍的な相互意識があるから、尚更一つの Person を作ることになる。しかし、③実際には、部分的な相互意識は、下

82）*A*, pp. 21-22.
83）*A*, pp. 22-23.
84）*A*, pp. 23-24.
85）*A*, p. 25.
86）*A*, p. 25.

位の霊において普遍的な自己意識を作らないから、一つの Person を作らない[87]。

4．相互意識は神の三つの Persons を一つにしない。なぜならば、各々の霊・Person が他者の考え、行ないを意識する仕方は、それらを自分の外にある Person のものとして意識するのであって、これは自分の中の考え、行ないを意識する仕方とは違うからである。

これに対して、各 Person はそれらを自分の考え、行ないであると意識する、と言うことは、①父が子を生む行ないを子が自分を生む行ないと意識する、聖霊が父と子から出て来る行ないを聖霊は自分の行ないと意識する、と言うことであって、異端の考えである。②子の Person や Person としての知識は父の Person, Person としての知識である、と言うことは、Persons の混同また各 Person の考え・行ないの混同であり、矛盾である[88]。

5．各 Person は自分の知識、意志、力などを持っているのであるから、それぞれが独立した存在であり、他の Person についての意識は、自分についての意識とは区別される、他者即ち他の神々についての意識である[89]。

6．神の Persons の間のこのような相互意識はない、とキリスト自身が言っている（マルコ伝 13：32. マタイ伝 24：36.）。これは、子も聖霊も神ではないということである。これに対してシャーロックは、ここでのキリストは人間としてのキリストのことであって、神としてのキリストのことではない (Sherlock, p. 177.)、と言う。しかし、聖書では、「父だけがご存じである」と言われている。これに対しては、ここの「父」は、「父、子、聖霊を含む」と言われる (同上)。しかし、聖書の一つの文の中で「父」と「子」とが対照されて言われているにもかかわらず、この「父」と「子」とは、それぞれに「父」と「子」とは別のものを指していると言うのは、聖書の意味を歪めている[90]。

こうしてシャーロックら三位一体論者は、十戒の第一「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」［出エジプト記 20：3.］を「父、子、聖霊をおいてほかに」と解釈している。この解釈に対応してシャーロックが神の三つの Persons の間の相互意識の証明として挙げている聖書の個所［Sherlock, pp. 51-54.］は、シャーロックの解釈とは違う意味を持っている[91]。

普遍教会の信仰は救いに必要である、懸命に問い尋ねた後の無知は罪ではないとは言えない、というシャーロックの主張［Sherlock, p. 23.］に対する反論。

---

87) *A*, pp. 25-26.
88) *A*, p. 27.
89) *A*, p. 28.
90) *A*, pp. 28-29. Cf. *N1*, pp. 12-13.
91) *A*, pp. 29-31.

1．無神論が、考える努力を相当にした者の永続する感情であるとは思わない[92]。

2．唯一の真の神を信じ、礼拝するユダヤ人やトルコ人は、キリスト教信仰を棄ててアタナシウス信仰に変った者よりも救いに近い。

3．キリスト教を知りながらそれを否定する者は、懸命に問い尋ね、公正な探究をしたとは言えない。そういう人々は、自分の偏見あるいは肉欲によって歪められたのである[93]。

5．スティーヴン・ナイ（匿名）『シャーロックの三位一体の教え弁護の考察』1690？.

ナイ（匿名）は、Stephen Nye (anon.), *Some Thoughts upon Dr. Sherlock's Vindication of the Doctrine of the Holy Trinity. In a Letter*（『シャーロック博士の聖三位一体の教え弁護の考察。書簡。』), London, 1690？（2 版, 1691）.[94]（*N2* と略記する）で次のように書いて、シャーロックの上述の書物を批判するとともに、それをきっかけとして信仰の基本を論じて、キリスト教正統派（教皇派、プロテスタント）の考えを批判した。

シャーロックは、「父と子の本質における統一」証明の根拠をヨハネ伝 10：30.38. に置いている（Sherlock, p. 51.）。しかし、ヨハネ伝 10：35-36. にある「父が聖なる者とされてこの世に遣わされた者」は、「父と子の統一」が「聖化、任務における統一」であって、「本質、本性における統一」ではないことを示している。その点では、キリストは、神から権威、知識、力を与えられた他の人々と同じであり、ただその程度において「限りない」（ヨハネ伝 3：34.）だけである[95]。

聖書でキリストが「神の子」と呼ばれている根拠は、1．生まれによって、i．「処女の胎から聖霊の働きによって生まれた」（ルカ伝 1：35.）、ii．「死者からの最初の復活」（使徒行伝 13：32-33.）、2．役割によって、i．「預言者」（マタイ伝 3：17.）、ii．「大祭司」（ヘブライ書 5：5.）、iii．「他のどの預言者、祭司、王よりも優れた王」（ヘブライ書 1：5.）である。シャーロックの言う「永遠の昔に父と同じ実体から生まれた」ということを示す個所はない。「使徒信条に述べられている原初の真実と教え」は、キリストが人間であった（但し、罪がない）ことを示している[96]。

92) Cf. *N1*, 2 版, p. 9.
93) *A*, p. 32.
94) 小論は、2 版によっている。
95) *N2*, pp. 3-6.
96) *N2*, pp. 6-8.

シャーロックの言い方を使えば、教皇派のどんな奇怪な考えをも擁護できよう。このような人々は、意味のない言葉を乱用することによって多くの神秘を作り出し、宗教を普通の人には理解できない「学者の宗教」にしている。ソッツィーニ派の人々は、人間が作り出したこのような空しい学識に反対である。すべての真理の基礎は、「天地の創り主である唯一つの神だけがおられるという原初の真理」と「キリストの誕生、死、復活の情況を記した歴史」「原初の事実」とである、とソッツィーニ派の人々は考えている[97]。

「聖書が神についてわれわれに与える知識のすべては、道徳的なもの、われわれに関わるものにすぎず、形而上のものでは決してない。なぜならば、この点では神は［われわれには］理解できないものであって、神を明らかに示すことはできないからである。」聖書の中で人間の自然の力による知識（コモン・センスと理性）に反する言葉は、比喩の意味であり、そういうものとして理解すべきである。聖書で人間としてのキリストが「神」と言われているのは、この一例であって、「神の似姿 Image」の意味である[98]。

「教会はすべての時代に、また総会議は、同じ信仰を持ち続けてきた」という正統派 The Orthodox の主張は、学識ある人々が指摘してきたように、嘘である。また、「誰もが自由に自分で吟味して、思うことを言って、自分の評判、財産、職業、生命を危険に陥れるということがないのであれば」、この主張にも根拠はあるかもしれない。しかし、「そのような自由は認められたことが決してなく、世俗権力、異端審問、十字軍、刑罰法規はこの信仰を固め、守ろうとしてこれまで努力をし続けてきたのであるから」、この主張を認めることはできない。私は、どの宗派にも与せず、聖書（上に記した原初の真理と事実）とキリスト教会の普遍の信条、即ち、すべてのキリスト者が認める使徒信条とを基にする[99]。

正しい原則を持っているプロテスタントも、間違った原則を持つ教皇派と同じように、「自分の信仰告白を、宗教にとって無用、奇妙あるいは忌まわしい考えで限りなく大きくしてきた」。しかし、その考えは、正しい原則とは相容れない考えであった。キリスト者よりも厳格な生活を送っている理神論者が多くいることも事実である。しかし、彼等は大抵は本性善良であって、歪められた、宗派心の強いキリスト教につまづいているのである。彼等にキリスト教がよく教えられておれば、彼等は理神論者ではなかったであろう。今の教会は、「世俗の欲を追い求める人々」、「自分の肉欲［情念］が満たされれば、コモン・センス、理性、信仰を犠牲にすることを厭わない」人々で溢れている[100]。

---

97) *N2*, pp. 10-13. Cf. *N2*, p. 18.
98) *N2*, pp. 13-16.
99) *N2*, pp. 17-20.
100) *N2*, p. 21.

正統派の人々は、シャーロックの議論がユニテリアンを利したと考えて、ユニテリアン批判の説教・論考の出版を差控えるよう圧力をかけた。シャーロックは、しばらくの沈黙の後これに逆らい、「普遍教会の信仰の弁護」のために、William Sherlock, *An Apology for Writing against Socinians, in Defence of the Doctrines of the Holy Trinity and Incarnation : In Answer to a Late Earnest and Compassionate Suit for Forbearance to the Learned Writers of some Controversies at present,* London, Will. Rogers, 1693. を出版して、持論を展開した。

6．ジョン・ウオリス『三位一体に関する三書簡』1690-91.

ジョン・ウオリス John Wallis（1616-1703. Cambridge の Emmanuel College で学び、1640 年 MA を得るとともに、聖職に入れられた。後 London で Robert Boyle らと出会い Royal Society 設立に貢献した。1649 年 Cromwell により、Oxford の Savilian 幾何学教授に任ぜられた。1654 年 DD を得た。）は、1690 年 8 月から 91 年にかけて三つの書簡を出版して、三位一体とアタナシウス信条を解説するとともに、それらをソッツィーニ主義者の批判に対して弁護した。

第一書簡 John Wallis, *The Doctrine of the Blessed Trinity Briefly Explained, In a Letter to a Friend*（『聖三位一体の教えを友人への書簡の中で手短かに説明する』）, London, Tho. Parkhurst, 1690.（*W1* と略記する）では、三位一体について次のように書いている。

聖書には、「天において証言するのは三者、父と言葉と聖霊です。この三者は、一つです。」（ヨハネ第一書 5：7.）、洗礼の形式は、「父と子と聖霊の名において」（マタイ伝 28：19.）である、と書かれている。キリスト教会は、キリストと使徒の時以来、「これら三者 Three Persons は［それぞれが］神であること Divinity」、また、「これら三者は唯一つの神である」と考えてきた[101]。

この三者（「三つの何かあるもの Three Somewhats」[102]）は互いに区別される。この区別は、Three Persons（ヘブライ書 1：3.）という言葉で示されてきた。この Personalities が何であるかについては、聖書ではただ、「父は生む、子は生まれる、聖霊は出て来る」と

101）*W1*, p. 2. Cf. *W1*, p. 4.
102）*W1*, p. 9.

言われているだけである。これは隠喩である。従って、人間について言われる時と同じ意味ではない。しかし、その意味は、聖書に啓示されていること（これまでに述べたこと）以上には、われわれは知ってはいない。聖書が何も言っていないこと、とりわけ神のことについては、われわれは知らないで安んずることができるし、また、知ろうとする必要はない[103]。

ソッツィーニ主義者は、神についての上述のことは自然理性と相容れないから、信じない、と言う。この時彼等は、明確に三位一体を示している聖書の意味を歪めて理解している[104]。

三位一体のこの教えにおいては、死者の復活の場合と同じく、二つの問がある。1．それは可能であるか。2．それは真実であるか[105]。

啓示を基に論じられるべき2は、自然理性を基に論じられるべき1を確定する。無からすべてのものを創られた神に不可能なことはない。しかし、実際に神が何をされるかは、啓示によってのみ知られる。神が聖書に啓示されたことは、不可能であると信ずる理由はない。三位一体についてもこれと同じことが言える[106]。

残る問題は、それが［自然理性から見て］可能であるかどうか、即ち、それは自然理性と相容れるかどうか、ということである。われわれは、自分自身の魂の本質さえ知らず、ましてや神の本質を知らない。従って、神が啓示されたことがわれわれの知らない神の本質と相容れないかどうかをわれわれが決めることは難しい[107]。

しかし、物体や神以外の創造された霊のものについて言えば、ある観点で三であるものが、別の観点では一である、ということは矛盾、不可能ではない。例えば、一つの立方体は三つの広がりを持つ。天使や人間の魂などの霊のものは、存在し、知り、行なう。われわれは「妊婦の胎内で骨がどのようにして育つのか分からない」（コヘレトの言葉11：5.）からといって、そこで骨は育っていない、とは言えない。神がそうであると言われていることは、どのようにしてそうであるのかがわれわれにわからなくても、そうであると考える方が安全である[108]。

第三書簡 John Wallis, *An Explication and Vindication of the Athanasian Creed. In a*

---

103) *W1*, pp. 3-5. pp. 9-10. Cf. *W3*, p. 31. p. 39.
104) *W1*, p. 5. p. 8.
105) *W1*, p. 5.
106) *W1*, pp. 6-8.
107) *W1*, pp. 8-9.
108) *W1*, pp. 10-19. Cf. *W3*, pp. 22-35. ここでは、キリストの受肉もまた神の全能の故に可能である、人間にはどのようにしてそうであるのかがわからないことは神に不可能であるとは言えない、と論じられている。

Third Letter, Pursuant of Two former, Concerning the Sacred Trinity. Together With a Postscript, in Answer to another Letter（『アタナシウス信条の解説と弁護。聖三位一体に関わるこれまでの二書簡を受けた第三書簡。もう一つの書簡に答える後書を付す。』），London, Tho. Parkhurst, 1691.（*W3* と略記する）では、第二書簡を受けてアタナシウス信条を論じ、次のように書いている。

アタナシウス信条（学識ある人々は、アタナシウス自身が書いたものではないのではないかと考えている。しかし、アタナシウスの考えに従って書かれた信条である[109]。）にある「[永遠の] 滅びの宣告 Damnatory Sentences」は、[ユニテリアンが] 言っているような、この信条にある一字一句を明確に理解して同意しないならば救われない、という厳しい意味ではなくて、この信条の教えは「健全で本物の教え」であるから、「キリストによって救われようとする……すべての人々は、この教えをそういう教えとして、[それの説明の個々の点ではなく、別の言葉であってもかまわないから] それの実質において [それを理解した時には] 信ずるべきである」という意味である[110]。普遍教会の信仰（アタナシウス信条はその一部であり、神の言葉、聖書のすべてがそれの全体である）を、その実質において信じない者は（悔い改めないならば）救われない[111]。それは、マルコ伝 16：16.（「信じない者は滅びの宣告を受ける。」）やヨハネ伝 3：17-18.36. に言われているのと同じことである[112]。

「キリストにある神を知り、信ずる以外に（われわれの知る限り）救いの通常の道はない。しかし、（幼児、無能力、人間の力ではなくすことができない無知などのように）通常ではない場合に神がどういう処置をされるかは、そこで [アタナシウス信条で] 明言しようとされていることではないし、また、われわれが知る必要はない……ロマ書 11：33.。」ましてやキリスト以前の時代にこれの明確な知識が必要であった、とは言えない[113]。アタナシウス信条では、「滅びの宣告」は一般的な命題にだけ付けられていて、それの説明の個々の点には付けられていない[114]。

「滅びの宣告」についてのこのような議論の後、アタナシウス信条の簡単な解説とアタナシウス信条弁護の議論（キリストの受肉はありえないことではないことなどが論じられている）がある[115]。

---

109) *W3*, p. 1.
110) *W3*, p. 2. Cf. *W3*, pp. 3-6. p. 10. p. 15. pp. 19-22. pp. 35-36.
111) *W3*, p. 6. pp. 19-20.
112) *W3*, p. 5. p. 14. pp. 20-22.
113) *W3*, pp. 2-3.
114) *W3*, pp. 3-4. pp. 10-11. p. 15.
115) *W3*, pp. 4-36.

1690年11月15日付後書では、出版されたばかりの或るユニテリアン（匿名）の書物、*Doctor Wallis's Letter, touching the Doctrine of the Blessed Trinity, answer'd by his Friend* 批判を書き、ソッツィーニ主義者は、三位一体に関わる聖書の章句を、理性に適うと彼らが考える意味に歪めて解釈していることなどを指摘している。

7．スティーヴン・ナイ（匿名）『ウオリス三書簡に対する回答』1691.

ウオリスの三書簡に対し、ナイ（匿名）は、Styphen Nye (anon.), *An Answer to Dr. Wallis's Three Letters Concerning the Doctrine of the Trinity*（『ウオリス博士の三位一体の教えに関する三書簡に対する回答』), 1691.（*N3* と略記する）を書いて、次のように反論した。ここにはDr. Sherlock批判の言葉はある[116]けれども、本書のほとんどはウオリス批判である。

聖書には、十戒の第一に、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」［出エジプト記20：3.］とある。「この唯一つの神に多くのPersonsがありうる」ということは、聖書のどこにも書かれていない。三位一体論者は、そう推論する根拠は明らかである、と言う。しかし、この推論は、キリスト以後何百年かの間は行なわれてはいなかった[117]。

私は、神の正確な定義を知らないから、神に三つのPersonsがありうるという考えに矛盾があるとは断言できない。しかし、神に多くのPersonsを認めることは、唯一つの神を認めよ、という神の命令とは相容れない不条理である[118]。

ウオリスの立方体の比喩は、釣合、関係に関わる比喩であって、物体あるいは実体に関わるものではない。三つの立方体の想定がよりふさわしい比喩であろうけれども、それでも物体の統一とPersonsの統一とは同じことではない。神はある役割の名であるとすれば、それに多くのPersonsが含まれるということはわかる。しかし、ウオリスはそうは考えていない。ウオリスは、Personを何かあるものsomewhatと呼んでいるけれども、三位一体は明確に区別される三つのPersonsである[119]。

ウオリス「神の本性に不可能があると断定することは難しい」（*W1*, p. 9.）――その通りであって、われわれはそのことに反対はしていない。三位一体論者は、十戒の第一を排除

116) *N3*, p. 2. p. 15.
117) *N3*, p. 2.
118) *N3*, pp. 3-4.
119) *N3*, pp. 5-8.

する聖書の個所を示すべきである[120]。

ウオリス「三位一体を否定することは、復活を否定することと同じ不条理」（*W1*, p. 6.）——われわれは、聖書や神の力を否定していない。偶像崇拝を否定しているだけである[121]。

「神が受肉する」とは、神を「変り、変化し、死ぬことのあるもの」とすることであって、「ありえない、不条理な冒瀆」である。神の一つが死ぬことがありうるならば、神の他のものも死ぬことがありうるであろう[122]。

ウオリスは、神に不可能はない、と言う（*W3*, pp. 28-35.）。しかし、それは、われわれが神についてどんな特定の観念でも持つということとは別のことである[123]。

聖書の章句について言えば、ヨハネ伝 16：13-15. は、子と聖霊とが全く別の Person であることを示している。ウオリスが三位一体の証拠として挙げているマタイ伝 28：19. ヨハネ伝 10：30. ヨハネ第一書 5：7. ロマ書 9：5. マタイ伝 4：10. など（*W3*, p. 57. p. 60.）は、三位一体を証明しておらず、反対のことを示している[124]。

「滅びの宣告」についてのウオリスの考え［*W3*, pp. 2-3.］、即ち、幼児、無能力、人間の力ではなくすことができない無知を持つ者、キリスト以前の者などに、厳格な三位一体論者がしてきたように滅びの宣告をすべきではない、という「原則は、平和、和合、一致をもたらす本当の方法を生きづかせている」。「信じない者は、聖書において滅びの宣告を受ける」ということと、「三位一体を統一において信じない者は、アタナシウス信条によって滅びの宣告を受ける」ということとは別のことである。なぜならば、「神の直接の言葉［聖書］」と「人間［教会］の言い伝え、解釈」とは別のものだからである[125]。

8．アーサー・ベリ（匿名）『裸の福音』1690.

アーサー・ベリ Arthur Bury（1624-1713）は、1690 年「イングランド教会の本当の子による」として匿名で、出版者名も付けず、(anon.) a true son of the Church of England, *The Naked Gospel. Discovering I. What was the Gospel which our Lord and His Apostles Preached. II. What Additions and Alterations latter Ages have made in it. III.*

120) *N3*, p. 9.
121) *N3*, p. 9.
122) *N3*, p. 12.
123) *N3*, pp. 12-13.
124) *N3*, pp. 14-18.
125) *N3*, pp. 18-19.

What Advantages and Damages have thereupon ensued. Part I. Of Faith（イングランド教会の本当の子、『裸の福音。I．われわれの主及びその使徒たちが説いた福音は何であったか。II．後の時代はそれにどんな追加、変更を加えたか。III．その結果どんな利益と損害が生じたか。を明らかにする。第一部信仰について。』), 1690 (2nd Ed. Arthur Bury, D.D. Rector of Exeter Coll. in Oxford, London, Nathanael Ranew, 1691)．を出版した。

ベリは、1639年Oxfordの Exeter Collegeに入学、1642年BAを取得、1645年正式のFellowとされた。1647年にOxford大学巡察に来た議会代表者の権威承認を拒否してOxfordを追放されたが、王政復古と共にFellowに復帰し、1666年空席となったExeter Collegeの長Rectorの職に、カンタベリ大主教Sheldonの推薦と国王Charles 2世の支持を得て選ばれた。同年DDを取得。

1689年ベリは、Fellowの一人Mr. Colmerを独身女性を妊娠させたという淫蕩の罪で追放した。Colmerは無実を訴えて、Exeter College巡察者Exeter主教Jonathan Trelawney (在位1689-1707) に上訴した。主教代理Dr. Mastersが1690年3月に巡察を行ない、Colmerの復帰を命じたが、ベリは、別件の淫蕩を理由に再度Colmerを追放した。Colmerの上訴を受けて行なわれた主教自身の巡察（7月）において、ベリとベリ支持のFellowsは、5年に一度の巡察と定めたCollege規則に反するとして、主教巡察に抗議し、巡察阻止を試みた。この騒動の最中に『裸の福音』が出版された。8月19日のOxford大学評議会Convocationは、『裸の福音』は異端の命題を多く含んでいると断罪し、これを大学構内で公衆の前で焼かせた(後述、小論325-328頁参照)。主教Trelawneyは、ベリ支持の10人のFellowsをFellow職及び職禄3ケ月間停止とし、ベリを主教法廷召喚無視に加えて『裸の福音』を書いた異端などの故にCollege長職罷免、更にベリが退去命令に従わないが故に大破門とした。

ベリは、1．College規則に従えば、Colmerには追放裁定上訴の権利はない、2．巡察者は、College内の問題に関して管轄主教Ordinaryとしての上訴裁定権を持っていない、3．主教代理がCollegeに来て裁定を行なったのは、主教の巡察であり、再度の巡察は「5年に一度の巡察」と定めたCollege規則に反する、4．College巡察は、College規則により巡察者に与えられた世俗の権利である、従って、巡察者は管轄主教としての破門などの教会懲戒権を持ってはいない。Oxford大学は元はLincoln司教の管轄下にあったが、外部の管轄権を免除されて以来、総長がこの権利をもっている、また、Exeter主教が巡察権問題の当事者でありながら、それに関して自分で裁定を下したのは不当であり、裁定は無効である、と主張して、King's Benchに訴えた。King's Benchはベリの主張を認める判決

を下したが、1694年12月上院 the House of Lords がベリ罷免を正当とする逆転判決を下して決着した（Arthur Bury (anon.), *The Case of Exeter-Colledge, in the University of Oxford. Related and Vindicated*, London, Randal Taylor, 1691.）。

1691年著者、出版者名を明示して出版された『裸の福音』第二版は、序の前に「読者に」を付け加えた他、論旨を明確にするために、推敲不十分であった文章、語句の訂正、不必要と考えた個所の削除、説明の文章、語句の追加を相当多くの個所で行ない、章の区切の個所を変えたところ（2章、7章）もある。

序の要旨は、次の通りである。

最近のキリスト教発展の勢いは、最初の頃と比べると、弱まっている。最初の頃のキリスト教の大きな発展は、神の力と知恵によるものであり、キリストは神の子であることを証明するものであると考えられていた。この考えに従うならば、最近のマホメット教の、キリスト教世界を征服する発展は、マホメット教がキリスト教よりよい宗教であることの証明であることになる。

しかし、現代の福音が原始キリスト教の福音と大いに違うとすれば、話は違ってくる。キリスト教会の腐敗――三位一体の第二、第三位格に関する議論（三位一体は多神論と思われた）や御像崇拝 Image-worship の確立（偶像崇拝と思われた）によって一般の人々の心は混乱し、両派は互いに相手を無慈悲に迫害しあった（2版では「福音を、まずその単純明瞭から、次いでその慈愛から、あのように粗野なものに歪めてきた人々の腐敗」と書き換えられている）――の故に、神はキリスト教会から離れて、それをマホメット教の支配に服させたのである。

そこで、キリストと使徒が説いた原始教会の福音と現代の福音とを比較してみる。前者、即ち、「どんな能力のない者にも合うし、また、自然の光にかなう[最高の賢者が抱くに値する]」裸の福音は、太陽のように明白簡明である。

本論の要旨は、次の通りである。

「福音の本質 Nature［と一般的意図 general Design（2版追加）[126]］を示すしるし」は、1．神の「新しい誓約 the new Covenant」（エレミヤ書31：33．ヘブライ書8：8．10：16.）。――これは、「古い誓約」と違って、理解することも行なうことも難しくないし、どんなに無知な心にも明瞭に刻み込まれている。「新しい誓約」は、「福音の意図がわれわれ

126）Bury, 2版, p. 1.

を儀式の法の規律から開放して、自然の法における最高の完全へと高めることにあること」［ペトロ後書1：4.］と「罪を赦す［神の］慈悲の約束」とを示している。――と 2．信ずべき教えの基を示す「［よき（2版追加）[127]］知らせ Message」。――それは、「神は光であり、神には闇が全くないということ」（ヨハネ第一書1：5.）と、われわれは神の如くなるように、ということである。――である。これがあらゆる教えを判断する時の基準である[128]。

問題Ⅰ．キリストとその使徒が説いた福音は何であったか。

聖書は、福音が「神に対する悔い改めと主イエス・キリストに対する信仰」にあるということを示している（使徒行伝20：21.）。どちらか一つだけが言われているところもあるが、それは、一方が他方を含んでいるからである[129]。

信仰は、「グノーシス主義のきっかけ［公の戦争、論争を扇動し、個々人の良心を苦しめてきたもの（2版書き換え）[130]］」であり、また、主や使徒によって「救いの唯一の条件」とされたものである［ロマ書3：28. ガラテヤ書2：16. 3：11. ヨハネ伝3：16.］。しかし、「主が信ずる者のすべてに永遠の生命を絶対に約束された中には、悔い改めを想定することが必要である。」 1．物事の本性 Nature から。自然法は、神によって人間の心に書き込まれたものである。福音は、これをより明確にするものであって、罪を罰しないと約束し、それの享受を勧めているものではない。2．主は、悔い改めを信仰と同じように勧めている［ルカ伝24：47.］。反律法主義とは対照的であり、議論に明け暮れるグノーシス主義とも対照的である[131]。

自然宗教においては、神に対する信仰、即ち、神は嘘をつかない、神の知恵、力、真実は限りないという信仰は、神に対する義務であり、正義である。福音はその上に立てられる。また、「信仰は、［神に対する］従順を大きく推し進めるものである。」アブラハムの信仰はそのような信仰の原型である（ロマ書4章）。「神に対してのみ与えられるべき信頼を被造物に与える」「軽信 Credulity」は、「神に対する不正」（多神崇拝であるとともに、人の心に書かれた神の言葉である理性に反する）であり、信仰とは正反対の悪徳である[132]。

信仰は、法の下でよりも、福音の下で、より大きなものとして現われる。何故か。1．

127) Bury, 2版, p. 1. p. 3.
128) Bury, pp. 7-8.
129) Bury, pp. 8-9.
130) Bury, 2版, p. 10.
131) Bury, pp. 10-12.
132) Bury, pp. 13-19.

キリストが初めに現われた時に命じられた、キリストを信ずることの難しさ。ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しているから[コリント前書 1：22.]、そのような信仰は「ユダヤ人にはつまづかせるもの、ギリシア人には愚かなものであった。」[コリント前書 1：23.] 2．その時にこの信仰を公に告白することの危険。3．これを信じ、これを公に告白することの必要（今も必要である）[133]。

永遠の生命が約束されている信仰は、1．キリストの Person に対する信仰と、2．これを基にした、キリストの約束に対する信仰である[134]。

1．キリストの Person に対する信仰

キリストは、「この世に関してはその救い主」、「自身の *Person* に関しては神の子」である、と信ずるということである[135]。

「キリストの神性の永遠」や「受肉」について、即ち、主の Person について問うことは愚かなことだと言った皇帝コンスタンティヌスは正しい。

①人間が主の Person を何と考えるかは、「[自分の Person に関する信仰の有無に関わりなく [すべての（2 版追加）] 人間に癒しを与えようとする] 主の意図とは無関係である [に役に立たない（2 版書き換え）]。」

初期の頃には、キリストを神と信じている者も信じていない者も共に、キリストを救い主と信じている者には贖罪 Redemption が与えられていた[136]。

2 版では、ここで「三位一体」と「主の受肉」について次のことが書き加えられている。

i．三位一体について

聖書には、「キリストは神である」[ヨハネ伝 3：13. エフェソ書 4：10.] と書かれているところと、「唯一の神、父のみがおられる」（コリント前書 8：6.）と書かれているところとがある[137]。

三位一体に関わる議論で混乱を避けるためには、聖書にない言葉 *ὑσία* [*οὐσία*] や *ὑπόςυοις* [*πρόσωπον*] を使わないこと、しかし、これは現実には実行が難しいので、使われる言葉の意味を明確にすること、また、翻訳の時には同じ意味の言葉に翻訳することが必要である。特に、物質を表わす言葉を物質でないものに使う時、意味は明確でなくな

133) Bury, pp. 19-24.
134) Bury, p. 25.
135) Bury, pp. 26-28.
136) Bury, pp. 29-31. Cf. Bury, 2 版, pp. 55-58.
137) Bury, 2 版, pp. 43-44.

ることに注意すべきである。1．*ὐσία*(Beingness)は、スコラ哲学者によりSubstanceの意味のラテン語[Substantia]——物質について言われる言葉——に訳された。Essenceの意の語に訳す人もあったが、その方がよい。Sherlockの「神に、無限の知恵、力、善以外の実体を探し出そうとしてはならない」[Sherlock, p. 69.]は、その意味では適切である[138]。2．*ὑπόςυοις*は、ラテン語でPersonの意味の言葉[Personam]——さまざまな意味を持つ言葉——に訳された。Subsistence, Propriety の意の語に訳す人もあったが、その方がよい。従って、Wallisがこれを「定義できない三つのsomewhats」と言っているのは、適切である[139]。

言葉の元の意味に従えば、「神には、一つのSubstanceと三つのPersons［父（心)、子（言葉)、聖霊（力と行為)］がある」[140]。

ユニテリアンは、三位一体論者が「神は一つである」と言っていることを知っており、また、三位一体論者が主張する個々の命題（例えば、上述のSherlockやWallisの命題）に反対しているのではない。彼等は、それらの命題の間に、即ち、三つのPersonsと一つのSubstanceとの間に、矛盾があると言っている。しかし、この点については、SubstanceとPersonという言葉の、双方に同意された明確な観念を基にしなければ、決着をつけることはできない[141]。

ii．主の受肉について

これは、理性によっては全く見出せず、福音によってのみ知られる。しかし、Socinusのように、永遠ではない創造されたキリストの礼拝を主張するよりも、キリストは永遠に神の子であると考える方が理にかなっている。

キリスト教の初期には、受肉を理解していない人も、キリストを神とは考えていない人も、教会に入れられていた。今でも、誠実に努力した結果真理に至らない人々を有罪と宣告して、彼等の救いの望みを否定すべきではない。キリストのPerson、永遠の生成をめぐるアリウスなどの論争は、重要な問題ではない[142]。

②主が神であることや主の受肉について尋ねることは、「尋ねる人自身の満足にとって効果がない。」

これは、人間の理解を越える神秘であり、人間のNature、Personと神のそれとは違う

138) Bury, 2版, p. 45. p. 51.
139) Bury, 2版, pp. 44-46.
140) Bury, 2版, p. 47. Cf. Bury, 2版, pp. 48-52.
141) Bury, 2版, p. 52.
142) Bury, 2版, pp. 53-57.

のであって、前者から後者を推論してはならない。このような問に答えられなくても、人は救われる[143]。

③「それは危険である。」

危険は、ｉ．神冒瀆。

ii．誤り。ニケア総会議で最初にこの問題が決められた時、それを決めたのは宗派の利害であった。その後は、宗派・教会間の争いに、世俗権力と教会権力の争いが付け加わり、最後にキリスト教初心者の皇帝 Theodosius によって決着がつけられ、現在の教義が定められた[144]。（２版では、この個所は、ニケア総会議や Theodosius などの具体的な事柄は削除され、代りに、上述②にあった（２版では削除されていた）教皇 Leo と Dioscorus とのキリストの Natures をめぐる対立や、聖霊をめぐるラテン教会と東方教会との対立が書かれている[145]。）

iii．争いにより愛をなくすこと[146]。（２版では、これの「危険」だけではなくて、「確実性」があると書き加えられ、更に次のことが付け加えられた。無慈悲は、神冒瀆や誤りよりも悪い。「［敵対する両者は］相手が犯していない罪を相手に負わせ、……迫害者の残酷をもって互いに相手に対した……。自己愛は、自分を大きく欺く。まず、それは自分を欺いて、われわれにとって大事な考えは、神にとっても劣らず大事であるとわれわれに信じさせ、次に、われわれの考えを好むことは、神に対する熱心であると己惚れさせる。神やキリストの名がその中にあれば、その名は、命題全体を信仰の対象へと聖別する。その中のそれ以外の言葉は、その聖なる言葉と結びつけられるに足るものでなくても、そうする。」[147]）

２．キリストの Person に対する信頼を基にした「信仰の対象である言葉、事柄」

２版ではここで、「基礎の信仰箇条」は使徒信条である、イングランド教会もこれを救いに十分な信条と認めている、ということが付け加えられている[148]。

「［そのような基礎の（２版追加）］信仰の事柄」の条件は、次の通りである。

①「それは、どんなに能力の乏しい者にも理解できる程にわかりやすいものでなければならない。」（ロマ書 10：8-9. 参照）

143) Bury, pp. 31-36.
144) Bury, pp. 36-38.
145) Bury, 2 版, pp. 63-64.
146) Bury, p. 36.
147) Bury, 2 版, p. 62.
148) Bury, 2 版, p. 65.

②「それは、神の明確な言葉でなければならない。」(ロマ書10：17. 参照)

「明白な理性は、神のもう一つの言葉である。従って、理性が[神の]書かれた言葉からの議論の余地のない論理的必然によって推論することは、その論理的必然の明白さに等しい信仰によって受け容れられなければならない。」しかし、論理的必然が明白でないことは、信仰の事柄ではない。

③その上、「それは、信ずるものに永遠の生命の約束を光栄にも明確に与えるもの[即ち、福音]でなければならない。」

従って、当然に

i.「聖書を解釈する者あるいは(2版では、ここまでを削除[149])信仰の事柄について疑問の点を決着させる者は、必要ではありえない。」疑問の点はそのままにしておいて、害はない。

ii.「聖書は十分であるということを否定できない。」

iii.「その信仰にこの[永遠の生命の]約束が結びついていない、それ以外の教えにおいて、われわれとは考えの違う人々に無慈悲である[を罪あると批難する(2版書き換え)[150]]必要はないし、そうあるべきではない。」神を愛し、神に愛されている人々に対する無慈悲は、その人々の誤り以上に大きな誤り、大きな罪である。

iv.「基礎の個条の目録は必要ではありえない。」それは、聖書に明確に書かれている。

こうして福音の要点は、「[救い主]を信ずる者は、悔い改めに基づいて、罪の完全な赦しを得て、死から解放される。このことを約束されたキリストは、御自身が死者の中からよみがえることによって、われわれにそれの保証を与えられた。」ということである[151]。

復活は同じからだでか、別のからだでか、という問題については、使徒の言葉[コリント前書15：37-38.]は、これが「信仰の事柄」ではないことを示している。この一節は、各人は復活の時に自分のからだを与えられるであろうけれども、それは葬られたのと同じからだであるとは言えないことを示している。

その上、①復活の時に裁かれるのは、物質ではなくて、魂Soulである。同じ魂がその人間を同じ人間にする。従って、同じからだでなければ神の正義に適わない、ということにはならない。②そうする必要がないのに、神は御自分が作られた物事の秩序に反する(即ち、同じからだで復活させるという)仕方で万能を発揮されると信ずることは、神の栄光

149) Bury, 2版, p. 69.
150) Bury, 2版, p. 70.
151) Bury, pp. 41-45. 2版, pp. 65-73.

を増すことにならない。

復活の約束は何のためにされたかと言えば、①「わたしたちの喜びが満ちあふれる」［ヨハネ第二書 12. ヨハネ第一書 1：4. 参照］ために、復活は約束された。キリストによらない復活の期待・喜びは、信頼性を欠いた（人間に対する信頼に基づく）、内容の貧弱なもの（肉の喜び）である。②「われわれが神の本性に与るためである。」

「従って要するに、これ［復活の時のからだ］は信仰の事柄ではなく、好奇心の事柄である。信ずる者は復活して、自分たちが願い、考えることのできる以上に大きな幸福に至ると信ずること、これが従って信仰の事柄である。」[152)]

「福音の仕事は、ユダヤの人々をモーセの法への隷従から引き離し、異邦人を更に［限りなく（2 版追加）[153)]］悪い、悪魔崇拝への隷従から引き離して、［燦然たる啓示に助けられ（2 版追加）[154)]］彼ら自身の本性を自由に導くことによって神に仕えさせることであった。この目的のために、神はその唯一人の子をこの世に遣わされて、神に仕える最善の道は、キリストに倣うことにあるということを彼等に教え、そうするよう彼等を励ますために、悔い改めに基づいて、過去の罪の赦しと永遠の生命を彼等に約束された。」従って、「信仰は、それが仕えるべき［仕えている（2 版書き換え）[155)]］聖化 Holiness 以上に更に、誠実な心が到達できないものであるはずがない。」[156)]

問題 II．どのような変更、追加を後の時代は信仰の事柄で行なったか。

「信仰は聖化の従僕である」にもかかわらず、聖化から切り離して、それだけで独立したものと考えるところに、後の時代の誤りの根源がある。そこから二つの誤りが生じた。

1．「信仰の領域をできるかぎり広げる。」スコラ哲学者や教皇らのこのような努力によって、信仰の事柄は、大量の、難解な形而上学になり、以前には好奇心の事柄にすぎなかったものが信仰の事柄となり、これを信ずることのできない人々を地獄に落とすことになった。これを理解できない、否、聞いたこともない普通の人々には、教会に対する黙信 implicit Faith で十分だと言われる。しかし、①主はどこでも、教会に対するこのような黙信を要求されてはいない。②そのような信仰は、その人間の聖化に何の役にもたたない。このような、主が命じられた以上の信仰を命ずる権利が教皇にあることを否定する人々の

152) Bury, pp. 45-49.
153) Bury, 2 版, p. 80.
154) Bury, 2 版, pp. 80-81.
155) Bury, 2 版, p. 81.
156) Bury, p. 50.

中に、自分にはその権利があると考える人々がいるということは、耐えがたいことである[157]。

2.「このようにして信仰の領域を広げる人々は、また、信仰の特権を　1.適切な限度、2.聖化、3.愛、4.理性以上に高める。」

①（普遍宗教が要求する（2版追加）[158]）信仰の適切な領域とは、「神は嘘をつかない」、従って、「魂、力の限りを尽して汝の神、主を信ぜよ」を越えるものではない。2版ではここで、「福音で要求されている信仰の適切な領域は、イエスは神の子であると信ずること、と、イエスの復活のおかげでわれわれは復活する、という二つの命題を越えるものではない。」[159] と書き加えている。

これ以外の真理は、i.神は嘘をつかない、ii.敬虔 Piety に役に立つ、の二つに適うかどうかによって信ずればよい[160]。

②信仰のみによって救われると考える徹底した反律法主義者 Antinomians や唯信論者 Solifidians だけでなく、正統と自認している人々の中でも、「信仰は、われわれがキリストを自分の身にあてがう手である。このあてがいによってキリストはわれわれのものとなり、キリストの正しさは、われわれ自身の正しさであるかのように、われわれにあるとされる。信仰がわれわれを正しいとするのは、自分自身が価値あることによるのではなく、信仰がつかみ、自分にあてがうキリストの功績 *Merit* による。」と主張する者も、これにあたる[161]。

③聖化の中で大きなものは愛である。「信仰と希望と愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である。」［コリント前書 13：13.］「キリスト・イエスにあっては愛の実践を伴う信仰こそ大切です。」［ガラテヤ書 5：6.］しかし、信仰箇条を増やすことは、「分離、敵対」を作り出してきた。特にローマ教会は、多くの複雑な教えを救いに必要なものとして作り出し、これに疑問をさしはさむ者は異端者であるとしてきた。そのような人間は異端審問所監獄に投獄され、信仰の行ない Act of Faith（審理と判決）の時期が来ると裁判にかけられ、有罪とされれば、火と悪魔の絵を描いた上着を着せられて、生きたまま焼かれ、人々は、この人間は死後も地獄で火に焼かれ続けて、生者の祈りは効き目がない、と信じさせられている。「異端者という批難ほど、大きな批難はない。教会の胸に抱かれていないということは、神の恵みを受けていないということである。この人間は

157) Bury, pp. 50-52.
158) Bury, 2版, p. 85.
159) Bury, 2版, p. 85.
160) Bury, pp. 52-53.
161) Bury, p. 53.

神に憎まれており、［従って］神を愛するすべての人間に憎まれなければならない。」これが、信仰箇条を増やした結果である[162]。

④神は嘘をつかないということを正しく認めることが、信仰の本質的な力である。従って、理性に適うが故に信ずるのであって、理性は信仰の基礎である。しかし、時がたつにつれて、信仰は「全くの裸から、金、紫、緋［の衣］、宝石へと、身分の一番低い人々によって説かれ、信じられたわかりやすい真理から神秘へと、最も深い愛から聖なる者たちの血に酔いしれているさまへと、キリストの貞節な妻から大淫婦、みだらな女の母へと」（ヨハネ黙示録 17）移り変った[163]。

問題III．この変化、追加の結果どのような損害と利益が生じたか。

損害は、1．われわれの主とその福音に対する損害。2．キリスト教会の個々の構成員に対する損害。「神の本性に与る［聖化］」と「喜びの充溢」を奪う。3．キリスト教会一般に対する損害。「キリストの代理者」は、使徒［パウロ］の説いた「愛」の代りに「盲目の熱心」を説き、多くの人々を殺してきた。

利益は、1．教皇の得た莫大な名誉と力。信仰の事柄をめぐる論争が調停者を必要とし、教皇は、世俗君主や他の司教に君臨する至上権を得た。2．教皇に仕える司祭の、一般の人々に対する絶大な権力。この権力によって、神の言葉を人々に知らせないままにしている。

われわれは、これら他人の言い伝えを棄てて、聖書を自分で読み、判断すれば、神が示されている信仰の事柄を知ることができる[164]。

「結び」では、次のことが書かれている。

信仰は愛に仕え、愛を推し進めるものでなければならない。「すべての人間を愛し、とりわけ、主イエスを告白し、神はイエスを死者の中からよみがえらされたと信ずる人々を愛しなさい」と、使徒は説いている。

「これがわれわれの教会の改革者たちのすばらしい名誉である。これが、われわれの教会はローマの腐敗からは離れたけれども、愛からは離れなかったということが、われわれの教会をこの世で最善の体制の教会としているのである。」

162）Bury, pp. 54-55.
163）Bury, pp. 56-57.
164）Bury, pp. 57-64.

洗礼や病者訪問の聖務では、一番簡単な信条［使徒信条］を越えることは言われないのであるから、それ以外のところでそれと矛盾すると思われることが言われてきたのであれば、それは偉大な使徒の行ないをまねて、ローマ教徒にはローマ教徒となり［ロマ書14：15.21. コリント前書8：13.］、ローマ教徒を獲得しようとしたためである。しかし、ローマからの勅書により、この試みは成功しなかった。また、このような事を受け容れることのできない多くの人々をイングランド教会は失ってきた。従って、国王が今召集している、教会の高位聖職者、代表者の会議において、ローマから取り入れた腐敗の儀式、信条、制度を含むイングランド教会の現在の体制を、愛の精神に従い、本書で書かれたあり方へと変革すべきである。（2版では、「結び」は、最初の個所以外は大きく書き改められた。そこでは、イングランド教会や教会総会議［1690］への言及は完全に削除された（代りに、2版では、「読者に」でこの教会総会議について書かれている）。しかしそこでも、はっきりしない問題では、さまざまな考えを容れて平和を享受すべきであるという、基本的趣旨としては初版と同じことが書かれている。）

2版で付け加えられた「読者に」では、次のように書かれている。

現国王が典礼やその他の教会制度改革のための聖職者総会議Convocationを召集されたので、私はこの会議構成員の心を「これまでよりも包括的な愛」へと広げるために［初版の］本を書いた。しかし、多くの人々に誤解されて、「ソッツィーニ主義やそれより悪いもの」との批難を招いた。この誤解を正すために、この［第2］版では、さまざまな個所で削除、改訂、付加を行なった。しかし、結びの言葉は［2版ではこれを大きく書き換えたけれども］その元の言葉を私は絶対に撤回しない。国王は、国教反対者の信仰を受け容れようとされていたが、多くの人々の妬み心、国王［カルヴァン派］はイングランド教会をオランダの教会と同じものに変えるのではないかという妬み心のために、私が適切と考える改革は行なわれなかった。しかし、ジェイムズと教皇派体制の復帰がイングランド人の本当の教会を作るとは思えない。

「私は、教会の権威に反抗はしない。私は教会に沈黙を課する権力を認めるけれども、信仰を課する権力は認めない。」「私は、教会の信仰箇条のどれをも一言たりとも否定したとは思っていない。もしも否定しておれば、私はその言葉を無条件に撤回する。」「この世の平和は非常によいものであるから、聖書が救いに必要であると明確に断言していない、あるいは、その本性において必要であることが極めて明らかではないどんな教えにも、信仰箇条であるとして、関わるべきではない。」

ベリ『裸の福音』とロック『キリスト教の合理性』とを比較すれば、前者は後者ほど緻密な議論ではないけれども、福音は悔い改めとキリストに対する信仰（『裸の福音』はこの中に、イエスは神の子であることと、イエスの復活のおかげでわれわれは復活することを含めている）にある、キリストの神性の永遠、三位一体、キリストの受肉、復活の時のからだに関する信仰は救いに必要ではない、という考え、聖化、愛の重視（『裸の福音』は、信仰は聖化の従僕である、と書いている）、理性の重視、国教反対者を含む広い寛容の主張（但し、『裸の福音』は、イングランド教会の改革を主張しており、異なる教会の間の寛容には触れていない）などの点で両者は同じ考えである。これらの論点の細部において両者の間に考えの違いは幾つかあるけれども、キリスト教信仰の基本、その大筋の方向について両者の考えは非常に近しい。

9．ジャン・ル・クレール『歴史に基づく裸の福音弁護』1690.

ジャン・ル・クレール Jean le Clerc は、(anon.), *An Historical Vindication of the Naked Gospel, Recommended to the University of Oxford*（『歴史に基づく裸の福音弁護、オックスフォード大学への献言』), 1690.（*HV* と略記する）で、キリスト教初期の歴史を書き、『裸の福音』を、それの直接の弁護の言葉はないけれども、弁護した。

読者への序では、昔の書物は多くが焼かれ、抹殺されてきたけれども、「福音の飾らない原初の純潔は儀式や異教徒の空虚な哲学によって汚されたということをわれわれは今でもなおはっきりと見ることができる。」と書き、本論では概略次のように論じている。

プラトンやプラトン学派の神性についての考え――「至高の神……存在そのもの……父」、その下にその子である「理性 *Reason*（λόγος［言葉］）……宇宙の創造者」、第三に、子が作り出した「この世の霊、魂」がある（但し、プラトンの説明は不明瞭である）、あるいは、魂の（過ち故に追放されてこの世のさまざまなからだの中に住むことになる以前の、天上での）先在という考え――この言葉遣いや考えをユダヤ人は自分達の宗教と一致するものとして受け容れた（旧約聖書、知恵の書 8：19-20. Reason については同 9：1. 18：15-16., 新約聖書でも、特にヨハネ福音書にある）[165]。

最初の三世紀の教父の中には、プラトンと使徒の考えは同じだと考えた人もおり、この

165) *HV*, pp. 5-12.

考えに反するとして異端とされた人々がいた。例えば、Ebionites（キリストの神としての先在否定）, Sabellius（位格 Hypostasis 混同、父、子、聖霊を区別する特性の否定）, Paulus Samosatenus（キリストはキリスト以前にあった実体から作られたという、Ebionites と同じ考え）。しかし、異端とされた人々の考えが何であったかは、敵対者の記述しか残されていないので、正確には分からない[166]。

ニケア公会議以前の正統の教父の神についての考えは、プラトン学派の考えと同じであった。プラトン学派と同じように、神についての彼等の考えは、子は父と同じく永遠であるか、父と対等であるか、子と父は二つの位格、本性、本質であるか、などに関して、さまざまであり、また、明確ではなかった。そこに現われたアリウス Arius [-336] は、「[父が子を] 生むとは、作り出すことに他ならない」、従って、「イエス・キリストの神性は、[あらゆる時の前に] 父によって無の中から取り出された」と主張した。「子は父と本質が同じであり、同じく永遠である」と考えるアレクサンドリア Alexandria 司教アレクサンドロス Alexander は、アリウスの「新しい教え」を批判し、アリウスやアリウスの考えに従う人々を破門した [321]。両派は互いに、古代の教父の考えに訴え、相手を異端、キリスト教を覆す者と批難した[167]。

皇帝コンスタンティヌス Constantin は、両者に対し、互いに許し合い、人間の理解を超える、しかも重要でないこの問題については沈黙を守るよう勧告した。しかし、対立は激化したので、コンスタンティヌスは 325 年ニケアに公会議を開いた。そこでは正統派の考えに従う信条 [「……主イエス・キリスト、神の子、父から生まれた唯一人……生まれたのであり、作られたのではない、父と同質 consubstantial……」] が作られて、これに署名しないアリウス派の司教はアリウスとともに、神の呪いを受けるものと断罪され、破門されて、コンスタンティヌスにより追放されることになった[168]。

コンスタンティヌスはその後アリウスの信仰はニケア公会議の信条と同じであると認めて、彼がアレクサンドリアに帰ることを認め、また、追放したアリウス派の司教をも呼び戻した。しかし、アレクサンドリア司教に選ばれていたアタナシウス Athanasius は、アリウスの教会復帰を認めなかった。論争はなお続いた。双方が意味のあいまいな言葉を使って、熱烈に自分の考えを表現しようとしたからである。アリウス派が多数を占めたアンティオキア教会会議 Antioch Synod (329) では、正統派のアンティオキア司教エウスタティ

166) *HV*, pp. 17-19.
167) *HV*, pp. 19-34.
168) *HV*, pp. 34-48.

ウス Eustathius が弾劾、罷免された。ティルス教会会議 Tyre Synod (334) では、アレクサンドリア司教アタナシウスが罷免された。その後ローマ帝国にはアリウス主義が広まった[169]。

アタナシウスが追放中にローマで書いたと言われている信条は、三百年以上も後にトレド教会会議で初めて公表されたものであって、実際には誰が作ったかはわからない。その後［アタナシウスを認める］西方教会は［アタナシウスを認めない］東方教会を破門し、東方教会は西方教会を破門した[170]。

この歴史的考察を通して『歴史に基づく裸の福音弁護』の主張は、「福音の原初の純潔」を守るべきであり、アタナシウス信条の権威は認められないということであると同時に、教会は正統の信条を認める者も、それとは異なる信仰を持つ者も、広く受け容れるべきであるということである。これは『裸の福音』、特にそのキリスト教の歴史の個所［Bury, pp. 29-39.］の趣旨と一致している。

10. オックスフォード大学評議会『裸の福音』異端宣言 1690.

オックスフォード大学評議会は、1690 年 8 月 19 日『裸の福音』に関して次のように宣言した[171]。

オックスフォード大学は、1690 年 8 月 19 日の評議会で『裸の福音』の中の「普遍教会 *the Catholick Church*、とりわけイングランド教会の中で常に持ち続け、生かし続けられてきた信仰の主要な神秘を批難し、攻撃する不敬、異端の命題」に対し、全員一致の同意により次のように宣言する。

「Ⅰ．われわれは、以下の命題をすべて、どれをも（簡潔のために触れていない同質の他の命題をも）間違い、不敬、キリスト教とりわけイングランド教会侮辱として有罪と宣告する。われわれは、それのほとんどを異端と定め、宣言する。それらは、聖書に反し、教会の初めからこの現在に至るまですべての時代に世界中いたるところであらゆる正統のキリスト者によって受け容れられ、犯すべからざるものとして抱き続けられてきた普遍の信

169) *HV*, pp. 50-64. p. 67.
170) *HV*, p. 67.
171) Thomas Long, *An Answer to a Socinian Treatise, Call'd, The Naked Gospel*, 1691, pp. 3-7. による。

仰 the Catholick Faith に反している。教会会議、とりわけ記録にある中で最も神聖な、われわれの信仰、承認に最も値するニケア会議の教令に矛盾している。最後に、教父、とりわけキリストの大義を守る信仰と忍耐が比類なく大きかった……聖アタナシウスの書いたものに反している。

II. その上、われわれは、すべての学生に対し、昔から有罪と宣告されてきた異端をあたかも地獄から呼び戻すような上述の忌まわしい侮辱の書あるいは同種の書を読まないよう、法の罰の下に命ずる。すべてのどの講師、個人指導教師、宗教導師、その他大学の若者の教育を委ねられている人々に対しても、自分に託されている人々に、第一の必要な信仰箇条、それ以外の信仰箇条が基礎として乗っかっている箇条、唯一の生きている真の神がおられる、この神の本性の単一の中に本質、力、永遠を同じくする三つの位格、父、子、聖霊がおられるということを信じ、告白するようわれわれに教えている信仰箇条を勤勉に教え、心に確と打ち立てるよう堅く命ずる。

III. われわれは、上述の忌まわしい侮辱の書が忌まわしい手により、この学校の構内で焼かれるよう定める。」[172]

「定めの中で言及されている命題」[173]［小論では、これらの命題の要旨を記す。］

1.「マホメットはキリスト教信仰箇条のすべてを告白した。」キリスト教の博士たちの（とりわけ三位一体の第二、第三位格に関する）微妙、熱烈な論争や御像崇拝という腐敗は、マホメットに改革者として現われる機会を与えた。序。

2.「キリストの神性に関わる大問題は、1. 主の意図とは無関係、2. 考察する者自身の目的にとって効果がない、3. 危険。」40頁［29頁］。

3. 二人の福音書記者が主の血統に関して違うことを書いている。そうであれば、主の永遠の生まれを探ることは、それ以上に人間の理解を越えている。46頁［32頁］。

4. スコラ哲学者は、三位一体を十分に説明できないので神秘だとしているが、同じ仕方で実体変化を擁護している。同じように考えれば、異教徒の多神論も正当化できるのではないか。48頁［33-34頁］。

5. キリストの神性に関わる幾つかの問題は、「皇帝と教皇の権威によって決定されたのであり、それは論争を鎮めるには十分であったが、真理を打ち立てるには十分ではなかっ

172) Long, pp. 3-4.
173) ここで引用されている命題は、小論で使用した（ロングも使用している）Arthur Bury (anon.), *The Naked Gospel*, 1690. にあるものと同じであるけれども、頁数は違っている。更に、これに追加修正を加えた版からの、小論で使用した初版、2版のどちらにもない文章の引用がある。従って、小論で使用した初版とは別の刷版の、内容は同じ初版及びそれに追加修正を加えた版があって、大学評議会はこれを使ったと言える。小論で使用した初版の頁数は、［ ］内に記す。

た。」51頁［35頁］。

6．「キリストの神性の永遠に関わるばかげた問題（と彼は言う）の吟味には、神冒瀆の危険がある。よるべき確かな根拠がないということが第二の危険である。」53頁［36-37頁］。

7．「普遍教会の人々the Catholicksの唯一の利点は、長く権威の座にあったということ、しかも裁定の後そうであったということである。……［ニケア会議で］この論争に最初にけりをつけた裁定は、主張の理非によるのではなく、宗派の利害によるものであった。」54頁［37頁］。

8．［キリストのPersonに関わる］この論争に最後の結着をつけたのは、同質論者から教えと洗礼を受けていた皇帝Theodosiusである。彼以後の皇帝、司教はすべて、Theodosiusの裁定に従い、三位一体を信ずる教会を普遍教会、信じない人々を異端としてきた。56頁［38頁］。

9．「このように重要な教えを［Theodosiusのように］自分の司教座を偏愛した二人の司教［ローマ司教Damasusとアレクサンドリア司教Peter］……に対する黙信に基づかせることほどおかしく馬鹿げたことがあるか。そのように馬鹿げたことに欺されることを拒否する人々を皆異端、悪人として迫害することほど憎むべきことがあるか。」追加修正版57頁（小論で使用した初版、2版には同じ文章はないが、初版38-39頁には、次の10に引用されている同じ趣旨の文章がある）。

10．［上記9と同じ趣旨の文章に続いて］その後ローマ教会が新造した言い伝えは、東方教会では成功せず、そこではアリウスの考えが広く受け容れられるようになったことを見れば、アタナシウスの教えはローマの教えであり、それはアリウスの教えと同じく、信仰にも考察にも値しない。57頁［38-39頁］。

11．この［キリストのPersonに関わる］論争の初めにはほとんどの司教がそれの意味を理解していなかったことを考えれば、それの信仰が救いに必要であるとは考えられない。57頁［39頁］。

12．アタナシウス派は多神論を忌み嫌っているけれども、多神論は彼等の立場からの理性推論による当然の帰結である。しかし、彼等は信仰の神秘において理性推論を認めない。他方アリウス派は、キリストについてキリストや使徒が言ったことは何でも信ずると言い、それらの間に矛盾があれば法と慣習に従い、それらを調和させようとする。修辞は、讃えようとしている人の性格を過大に表現することが多い。従ってアリウス派は、救い主を父と対等のものに高める表現を棄てて、劣る者とする表現を採る方が理にかなっていると考える。これは、反対の道よりも安全な道である。なぜならば、これは信仰の目的に十分で

ある信仰へとわれわれを導くからである[174]。58頁［39頁］。

13.「パウロの言葉……［コリント前書15：37-38.］は、同じ個別の分子の復活を明らかに否定している。」70頁［46頁］。

14. 同じからだの復活か同じからだでない復活かどちらを信ずることがより神の名誉であるか、という問は、神の完全のすべてを弁護するか、その一つを取り去って他をわれわれが身につけるか、どちらがより神の名誉であるか、と問うことと同じである。70頁［47頁］[175]。

11. ウィリアム・ニクルズ『裸の福音に対する回答』1691.

カルヴァン派の聖職者[176] ウィリアム・ニクルズ William Nicholls（1664-1712. 1680年Oxford の Magdalen Hall に入学、後 Wadham College に移り、1683年 BA 取得、1684年 Merton College の仮 fellow となり、1688年 MA, 1695年 DD を取得。1688年頃聖職に入り、ラルフ Ralph モンタギュ伯爵、後公爵 earl, afterwards duke of Montagu の礼拝堂司祭 chaplain, 1691年 Selsey の教区司祭 rector となった。）は、William Nicholls, *An Answer to an Heretical Book Called the Naked Gospel, Which was condemned and ordered to be publickly burnt by the Convocation of the University of Oxford, Aug. 19. 1690. With some Reflections on Dr. Bury's New Edition of that Book. To which is added a short History of Socinianism*（『裸の福音という名の異端の書に対する回答。この書は、1690年8月19日のオックスフォード大学評議会により有罪と宣告され、公の場で焼かれるよう命じられた。ベリ博士によるこの書の新版に対する考察を付す。更に、ソッツィーニ主義略史を付け加える。』）, London, Walter Kettilby, 1691. で『裸の福音』を批判（本論で初版批判、付論で二版批判）し、著者を異端と断定した[177]。本書には、ニクルズが礼拝堂司祭として仕えているラルフ・モンタギュ伯爵への献辞が付けられている。

ニクルズは、『裸の福音』の主要な意図は、三位一体、救い主は神であることに対する攻撃であると考えて[178]、本論では『裸の福音』の序及び各章について紹介あるいは要約した

174) Cf. Long, pp. 81-82.
175) Long, pp. 4-7.
176) Cf. Nicholls, p. 10.
177) Nicholls, p. 61.
178) Nicholls, p. 20. なお、本書本論では、ベリの名はなく、「著者」、「われわれの著者」と呼ばれている。付論では、それに加えて、「ベリ博士」、「博士」とも呼ばれている。しかし、小論ではベリと明示する。

内容に対し、次のように批判を加えている。

序

1．三位一体の教え[「三位一体の第一、第二位格に関する議論」とあるのは、誤り]は、キリスト教を衰退させた。――「三位一体の教え［あるいはそれについての議論］がマホメット教の発展を引き起こしたはずがない。」最大の二次要因（一次要因、神の意図は、人間にはわからない）は、その時期［Muhammad (c. 570-632)］におけるキリスト教会内の愛と敬虔の衰退と教義・儀式における多くの誤り、迷信の侵入である。

2．三位一体の教えは、福音の単純明瞭とは正反対である。――①「聖三位一体の信仰は、キリスト教の単純明瞭と大いに調和している。」なぜならば、理解できないことは理解できないままで、啓示された真理を神の証言に基づいて信ずればよいのであるから。②神には、人間には理解できない神秘があるということは、理に適っていて、普通の人間でも理解できる。人間には理解できないこの神の神秘について、神の証言に基づいて信ずることは、理に適っている。③普通の人間は、この教えに関わる学者の議論を理解する必要はない。それを理解しなくても救われる。この議論が起こり、位格 Hypostasis、同質 Homoousios, Consubstantiality などの新しい言葉が作られたのは、異端者が新しい教えによって、広く受け容れられていた正統の信仰を批難したのに対し、本当のキリスト者が正統の信仰を守るためであった。その上、ソッツィーニ派の人々自身がこの微妙な言葉遣いを基に議論している。

第一章

1．キリスト教の教えは、どんな無知な人の心にも分かるように刻み込まれていて、理解できる。[Bury, p. 7.] ――これは、ソッツィーニ主義とは言えないけれども、救い主は人間が救い主以前に十分に知っていたことを言っただけだと言おうとしている。しかし、ユダヤ人や異教徒の哲学者（Aristotle や Cicero）は、救い主が説いた山上の垂訓を知ってはいなかった。

2．三位一体の教えは、福音のこのような明白さに反する。[Bury, p. 8.] ――序に対する回答で答えた。ここでは、「救い主は神であるという教えは、救い主の法により大きな信用と権威を与える」ということを付け加える。

3．この教えは、キリスト教の教えはわずか（「信仰と悔い改め」）であるということに反する。[Bury, pp. 8-9.] ――三位一体は、ベリの言う信仰の中に含まれている[179]。

179) Nicholls, pp. 2-4.

第二章

「信仰のみによる義認の否定」[Bury, pp. 10-12.] に対して。

1.「われわれは信仰のみによって義とされる。」(ロマ書3:22.24.30. 5:1. エフェソ書2:8-9. 39箇条の第十一条.)「但し、よき行ないを含まない信仰ではない。なぜならば……(われわれの教会が[39箇条の第十二条で]言っているように)よき行ないは本当の生きた信仰から当然に出てくるからである。……行ないは、それだけでは本質的価値はない……[しかし]まさに信仰それ自身が義認の正当、必然の原因であるというのではない[それは無価値である]。そうではなくて、信仰がキリストのmeritsを抱き、つかむことによって、神は信仰を原因あるいは手段として喜んで受け容れられたからである。従って、キリストの功績が義認の本当の、正当な、義認に価する原因である。われわれがこうして神の慈悲と、信仰によって抱かれたキリストの功績から受ける、この義認即ち正しさが神によって、われわれの完全、十分な義認であると見なされ、受け容れられ、認められる。」[180)]

2.「これは、少なくとも基礎信仰箇条のすべてに対する正統の信仰であるべきである。」「間違った、あるいは、正統でないHeterodox信仰」は、義認をもたらさない。

3.「信仰は何故このように神に喜ばれるかの理由」。「謙遜な絶望したキリスト者が自分自身の無価値、自分の悔い改め自体、その他の自分の徳すべての不十分を考えて、[「キリスト・イエスに示された神の無償の恵み」、神の約束に固く信頼して]神が慈悲へと向かわれるようにすること」ほど神に喜ばれるものはない[181)]。

第三章

自然宗教における信仰[Bury, pp. 13-17.]について。

ベリは、信仰とは神の証言に基づき理性が同意することと考えて、この自然宗教における信仰を福音の基礎としている。しかし、福音の下における信仰は、それだけではなくて、「神により注ぎ込まれた恵み」、「神からの霊感」である。ソッツィーニ派とレモンストラント派だけは、これに賛成せず、「聖書と啓示のすべてを自分自身の感覚と気質に合わせることをよしとしている。」[182)]

アブラハムや旧約に書かれているその他の神の僕の信仰は、自然の信仰であるだけでなく、キリスト者の、キリストに対する、キリストによる救いに対する信仰であった[183)]。

---

180) Nicholls, p. 6. Cf. Nicholls, p. 7. p. 77.
181) Nicholls, p. 7.
182) Nicholls, pp. 8-10.
183) Nicholls, pp. 10-13.

第四章

ベリの軽信批判［Bury, pp. 17-19.］は、三位一体に対する信仰は、信仰ではなく、「信仰の過剰」、「軽信」であるとほのめかそうとしている[184]。

1．「軽信は、神に対する信仰の過剰ではない。」「軽信とは、他人の話に同意する正しい根拠、動機なしに簡単に同意する悪徳である。」それは話し手に当然に与えられるべき以上の信用を与えている。しかし、嘘をつかれない神に対する信仰には、そのような軽信はありえない[185]。

2．「信仰の事柄において総会議 General Councils の決定に対する黙認は、軽信ではない。」

三位一体に対するわれわれの信仰は、総会議の決定のみに基づいているのではない。聖書の中の言葉に基づいている。「総会議の決定は誤りのない神の言葉であると見る人は、われわれの教会には誰もいない。それは、われわれの著者が言う通り、人間の権威である。しかし、そうであるとしても、それは地上における人間の権威の最大のもの、それは普遍教会 the Church Universal の代表者である。」それは、「新しい信仰箇条」を作る権威を持っていないけれども、「古い信仰箇条」、「本当の、古来の、普遍教会の信仰 Catholick Faith」は何かの、この世における最善の判定者である。その上、神の御自分の教会に対する大きな愛を考えるならば、神は信仰の重要な事柄においてこれらの代表者が誤るようにされるとは、よき人は信ずることができないであろう。

たとえ総会議の決定に誤りがあると自分の理性が判断する場合でも、この決定に反対せず、自分の理性は自分の中にしまっておくべきである。われわれが彼等より誤っていることの方がありそうであるし、この決定は「［教会］統一の最善の方策」であり、これに反する自分の考えを広めようとすることは、「異端と教会分離」という、本人にとっても自分だけの誤りよりはより大きな害を作り出すことになる。従って、「総会議の決定に対する黙認」は、軽信ではなく、「賢明な注意、用心深さ」である[186]。

第五章

福音の下における信仰［Bury, pp. 19-24.］について。

ここでも、考えられている信仰に、救い主が神であることや三位一体の信仰は含まれていない。「彼は［救い主が初めに来られた時に］人々の信仰が乗り越えなければならなかっ

184）Nicholls, pp. 13-14.
185）Nicholls, pp. 14-15.
186）Nicholls, pp. 15-17.

た困難のすべてを挙げておらず、他のすべてのことに生命を与える信仰の主要な目的、即ち、イエス・キリストは神の永遠の子であるということを落としている。」この教えは、「最初に現われた時には、人間の自然の理性にとっては実にひどい話、非常に難しい真理であった。」ことは、聖書の多くの個所に書かれている[187]。

救い主は神であるということ（これを誤りであると攻撃することが本書の著者の主要な意図である）は、宗教と敬虔にとって意味がある。

1．救い主の法の権威を増す。

2．神の独り子がこの世に遣わされて、われわれの罪の贖いのために死なれたという神の愛に対して、われわれの愛と感謝は高まる。

3．神に背いた人間に課された限りない罰の贖いを神がされたということによってはじめて、その罰の等価が払われて、完全な贖いがなされたということをわれわれは確信できる[188]。

第六章

「神の子という名は、［聖書では］キリストが神であることの証拠ではなくて、非凡な、人並はずれた人間であることの証拠にすぎない。」[189] ［Bury, pp. 26-27.］――聖書で救い主が神の子と言われているのは、「神からの永遠の生まれ」による子であり、神であるという意味である（ヘブライ書1：4-8．ヨハネ伝10：30.36-38.）。われわれは、ベリの言う通り、救い主の「本質 Essence」を知ることはできないけれども、しかし、われわれが知ることのできる「外側の印、性質」によって、救い主は神であることを知る[190]。

第七章

キリストの Person に対する信仰。①救いとは無関係［Bury, pp. 29-31.］。

「皇帝［コンスタンティヌス］は、ここ［アレクサンドロスとアリウス宛書簡］で正統派の信仰を不適切と批難しているのではなくて、主として、……司教アレクサンドロスとアリウスの熱を和らげるために書いており、従って二人に、……互いの平和と和解を勧めている」。皇帝はアリウスが間違っていると考えていた。しかし、それはいずれにせよ、キリスト教の初心者にすぎない皇帝よりもアレクサンドロスやその他の司教の方が問題をよく理解していた。アリウスの教えが有害であることを知った皇帝は、ニケア総会議のアリウ

187) Nicholls, pp. 18-19.
188) Nicholls, pp. 20-21.
189) Nicholls, p. 22.
190) Nicholls, pp. 22-27.

ス批難に大いに賛成している[191]。

初期の教会では、洗礼の時に、三位一体の教え［マタイ伝 28：19.］を含む定まった文言があったこと、洗礼を受ける者はその意味を教えられたことは、極めて確実である。その当時、キリストを人間にすぎないと考えた人々は、異教徒でなければ、間違いのあるいは正統でない者と考えられており、正統のキリスト者とは考えられていなかった[192]。

第八章

②効果がない［Bury, pp. 31-36.］。

ベリのこの考えを支持する者として挙げられているコンスタンティヌスがアリウス［無から作り出す］とアレクサンドロス［生む］の考えの違いを重視しなかった［Bury, pp. 31-33.］のは、彼がこの違いをよく理解できなかったからである。コンスタンティヌスは、アリウス派の聖職者やアリウスに欺されて、アリウスはニケア総会議と同じ信仰を持っていると信じ込み、アリウスらの教会復帰に努め、［その時アリウス派が大勢を占めていた］エルサレム教会会議は、アリウスらの破門を解いた。しかし、司教アタナシウスは、アリウスが皇帝に提出した信仰告白は曖昧で、アリウス派でないことを示す要の言葉 *ὁμο-οὐσία*［Consubstantial 同質］がなく、彼の破門を解いた教会会議はアリウス派の多い地方的な会議であることをよく理解していたので、アリウスの復帰を認めなかった[193]。

教父たちの三位一体の説明（例えば、Peter, James, John は同じ本性の人間であり、三人の個人である）［Bury, p. 33.］は、彼等の意図した比喩を越えて、過剰に引き伸ばして解釈されるべきではない[194]。

神秘について議論することは矛盾である。［Bury, p. 34.］――神秘は理解できない真理であるけれども、例えば、「三位一体があるということ」は、［序に対する回答で言ったように］理解できる。この神秘が否定されている時には、この理解できる真理を弁護すべきである[195]。

教会会議の決定は互いに矛盾している。［Bury, p. 34.］――異端者の教会会議は正統の会議と矛盾し、また、互いに矛盾することがあったけれども、正統の教会会議はそうではない。ベリが言及している、自分の決定を取り消した Sirmium 教会会議は、当時支配的であったアリウス派が自分とは異なる Photinians を異端と批難しようとして作った信条が、ア

191）Nicholls, pp. 27-28.
192）Nicholls, pp. 30-33.
193）Nicholls, pp. 35-40.
194）Nicholls, pp. 40-41.
195）Nicholls, p. 42. Cf. Nicholls, pp. 50-51. p. 80.

リウス派の考えをも批難することになることに気づいて、別の信条を作ったのである[196]。

ベリは更に、キリストにおける神の本性と人間の本性の結合に反対して、理性に従えば、キリストは二つの本性を持つ二つの Persons である (Nestorius) か、一つの本性を持つ一つの Person である (Eutyches) か、どちらかであると言う。[Bury, p. 34.] ——しかし、二つの本性を持つ一つの Person はありうる。アタナシウス信条「理性に適う魂と肉は一つの人間であるように、神と人間は一つのキリストである。」は、これを非常に適切に表現している。この二つの本性が結合すれば、人間の本性は神の本性に従い、一つの Person となる[197]。

第九章

③危険である [Bury, pp. 36-40.]。

1．神冒瀆[Bury, p. 36.]。——神の神秘は理解できないけれども、理解できるところがないわけではない。救い主はどのような仕方で神であるかは理解できないけれども、救い主は神であるということは理解できる[198]。

2．誤り。古代の教会会議は、皇帝の意向に従い、時には普遍教会 Catholick の教えを、時にはアリウス派の教えを決めた。普遍教会の利点は、長い期間にわたって支配的であったということにすぎない。[Bury, p. 37.]——これは証拠のない主張である。これらの教会会議においてアリウス派の司教たちは、自分たちの信仰を認めさせるためにさまざまなごまかしや言い逃れを使った。その上、キリストは神であることをめぐって教会内に起こった争いの責任は、このように重要な真理を否定した神冒瀆者にある。「[神の言葉においては] われわれが救われることのできる唯一つの信仰があり、聖餐の交わりに与る唯一つの教会があり、この両者に対して福音の約束がされている。それ以上に神が何をされるかは、われわれには知られていない。」[199]

第十章

「信仰の事柄の条件」[Bury, pp. 41-45.]。

1．「どんなに能力の乏しい者にもたやすく理解できる」[Bury, p. 41.] ——人間は信ずることのすべてを理解していなければならない、完全に知っていること以外を信じてはならない、という意味であれば、信ずることはなくなる。福音の信仰には躓きがあると言わ

196) Nicholls, pp. 42-44.
197) Nicholls, pp. 44-46.
198) Nicholls, pp. 50-51. Cf. Nicholls, p. 42. p. 81.
199) Nicholls, pp. 51-59.

れている通り、難しいところはある[200]。

2．「神の明確な言葉でなければならない」[Bury, pp. 41-42.] ――この原則は正しい。しかし、キリストや聖霊は神であるということ、即ち三位一体に関わる時に、聖書にそれを示す明確な言葉が多くあるにもかかわらず、キリストが神であることに反対するソッツィーニ派などの人々は、ベリを含めて、この原則を守らない[201]。

3．「永遠の生命の約束を明確に与える」[Bury, p. 42.] ――「キリストは神であるという信仰は、[永遠の生命] の約束が与えられる資格がある。」[202]

この三つの原則から四つの系が導き出される。[Bury, p. 43.]―― i．ii．は問題がない。iii．は、「キリストは神であるという信仰は、永遠の生命の約束がそれに結びついていない」という想定に基づいている。しかし、ヨハネ伝 3：16.18．17：1.3.5．ヨハネ第一書 5：20．では、永遠の生命の約束がこの信仰に結びつけられている。iv．が正しければ、使徒自身が不必要なことをしたことになる。ベリの友人、アリウス派、ソッツィーニ派の人々も同じことになる。しかし、必要な信仰箇条の要約は、初心者らにとって有益であり、また、[使徒信条によって] 使徒の時代の信仰をよりよく知ることができる[203]。

第十一章

復活の時のからだ [Bury, pp. 45-50.] について。

1．人間は葬られた時と同じからだで復活することの必然性について。「眠りについた人たちの初穂」[コリント前書 15：20.] 救い主は同じからだで復活されたし、ヨハネ伝 5：28.29.（「墓の中にいる」ものは、からだである）、ロマ書 8：11．はからだの復活を示している。また、古代の普遍教会 the Catholick Church の信仰は常に「同じからだの復活」の信仰であった[204]。

2．ベリの反対論への回答。

①[Bury, p. 46.] ――コリント前書 15：37-38．は、質は違うけれども、実体は同じものの復活を言っている。

② [Bury, pp. 46-47.] ――からだは、単なる物質としては罰を受けるものではないけれども、人間の本質的構成要素であり、そういうものとして、その人間の罪に対する罰を受けるのは当然である。

200）Nicholls, pp. 61-62.
201）Nicholls, pp. 62-64.
202）Nicholls, p. 64.
203）Nicholls, pp. 65-68.
204）Nicholls, pp. 69-71.

③より小さい手段でできることに全能を使うことは、神の知恵の欠陥を示していると言える。[Bury, p. 47.] ――神はその全能の力によってどんなことでもなされる。
④ [Bury, pp. 48-49.] ――ベリの言う「肉と霊との間の戦い、対立」は、比喩としては妥当するけれども、生まれ変った人間の霊は、復活の時にそれまで別れていた元のからだと結びついて、喜ぶであろう[205]。

問題II　後の時代の変更、追加 [Bury, pp. 50-57.]。

ベリはここでは、三位一体にはほとんど触れずに、教皇主義者 Papists の改革に対する批判に終始し、しかも、それのほんのわずかの例を挙げて論じているだけである[206]。

しかし、2② [Bury, pp. 53-54.] では、主として「信仰のみによる義認」の主張者を批判している。私は第二章への批判で「信仰のみによる義認」の考えを証明し、それが聖書に基づいていることを示した。St. Chrysostom, St. Basil, Theophylact, Oecumenius ら古代の人々もこの考えを述べていた[207]。

2③「信仰を愛以上に重視している」[Bury, pp. 54-55.] ――救い主が与えた救いの条件「信仰と悔い改め」は、救いに必要であり、これなしでは人間は救われない。「行為の愛に関しては、われわれは、教会と王国の法が許す限りの親切な取り扱いを[異端者 Hereticks]に与え、必要な場合には、躓きと伝染を避けられる限りで [異端者] と交際すべきである。聖パウロは関わりを持つな [テトス書3：10.] と命じているのであるから、異端者を親友とすべきでないことは確実である。われわれは [異端者] にできる限りの親切を尽すべきである。しかし、彼が普遍教会の信仰 the Catholick Faith に再び帰るまでは、彼には、他のよきキリスト者のように、われわれに日常普通の交際を要求する権利はない。……異端者を罰することに関しては、……ローマ主義者 *Romanists* が何をしていようとも、わが教会は、純粋に霊の罰で満足し、それ以外のことはすべて世俗権力に委ねている。即ちフォティオス *Photius* の言葉で言えば、われわれは異端者をキリスト者の集まりであるからだから切り離すよう教えられている。しかし、それ以外の仕方で罰することを教わってはいない。異端者が手に負えなくなれば、為政者によって彼等に判決が下されるよう、われわれは彼等を世俗権力に引き渡す。わが世俗権力もまた、今では苛酷を責められるべきところは何一つない。異端火あぶり法 [1401] は、この著者には慰めとなることだが、廃止されてもうしばらくになる。そうでなければ、……恐らくは、当然の報いであるが、友人[三

205) Nicholls, pp. 72-75.
206) Nicholls, p. 76.
207) Nicholls, pp. 77-78.

位一体冒瀆者］ゲンティリス *Gentilis* [1558] やセルヴェトゥス *Servet* [1553] の例に従い、同じ仕方でこの世を去っていたであろう。」[208)]

2④「信仰を理性以上に重視している」[Bury, pp. 56-57.] ——1．三位一体の信仰は、三位一体否定論よりもよりよい理性に基づいている。即ち、聖書からよりよく理性に従い演繹される。2．われわれが神秘を信ずるのは、それが真理であるからである。聖書で「神秘」と呼ばれているものには、ベリの言う「感覚できるものに包まれた霊の真理」、「ある時代からは隠されていた真理」[Bury, p. 56.]の他に、三位一体やキリストの受肉のように「人間には全く理解できないこと」がある（テモテ前書 3：16.）。そこに人間に隠されていることと開かれていることとがあっても、それは「矛盾」[Bury, p. 57.] ではない[209)]。

問題III　それによる損害と利益 [Bury, pp. 57-64.]。

三位一体、特に救い主は神であるという教えは、福音に対する追加ではなくて、救い主とその使徒が最初から述べていたことである。

損害について。1．理由なくあることを信ずるよう命ずることは、「移り気で気まぐれ」[Bury, p. 57.] ——人間が神の命令の理由を理解できないと、神は「移り気で気まぐれ」である、とは言えない。しかし、「救い主は神であること」の理由は前述した[Nicholls, pp. 20-21.]。また、三位一体の教えは、ローマ教の教えとは違い、ユダヤ人やマホメット教徒に対し福音の普及の妨げにならない。

2．個々の人間の聖化を損なうのは、三位一体の教えではなくて、その人間自身の誤りによる。喜び、平安をかき乱すのも、異端者に責任がある。

3．教会一般に対する損害についても、同じく、正統の教えに責任があるのではない。

利益について言われていることも、三位一体の教えとは関係がない[210)]。

結び [Bury, p. 64.]

ベリは、愛が要だと言うけれども、本論では愛についてはほとんど何も言われてはこなかった。信仰については、理性に適わないものは矛盾であるとして、信仰に容れられてはこなかった。

ベリは、イングランド教会は、アタナシウス信条とニケア信条とをローマ教徒を喜ばせるために取り入れたと言って、イングランド教会に偽善をなすりつけている。しかし、これは根拠がなく、事実に反する中傷である。イングランド教会 39 箇条の第八条には、「三

208) Nicholls, pp. 78-79.
209) Nicholls, pp. 79-81. Cf. Nicholls, p. 42. pp. 50-51.
210) Nicholls, pp. 81-84.

つの信条、ニケア信条、アタナシウス信条、そして使徒信条と普通呼ばれているものは、全面的に受け容れられ、信じられるべきである。なぜならば、それらは、聖書の最も確実な証言により証明できるからである。」とある。

国家がついこの間議会の法により三位一体否定論者を寛容から排除したのに、教会総会議の法により彼等が教会に受け容れられると期待するということは、この著者以外の人々には考えられないことである[211)]。

ベリ博士の名を付けて出版された新版裸の福音についての考察

初版と比べると、異端の毒素は大いに弱まっている。序［読者に］で、初版の本は、一般の人々にではなくて、教会総会議に集まる人々に向けて書いたつもりであった、と言い訳をしているけれども、これは事実に反する。

新版の新しい誤りは、ほとんどが三位一体についての新しい章［第七章 pp. 44-52.］にある。ここには、プラトン主義、ホッブズ主義、サベリウス主義と著者の考えとの混合がある。1．Substance と Person という言葉に対する批判――ギリシア語の *ὑσία* とラテン語の Substantia とは同じ意味に定義されていたし、*ὑπόςυοις* と Persona とは同じ意味に定義されていた。この言葉を神秘を表現する言葉としてこれまで教会で使われてきた意味で使うことに問題はない。2．「三位一体の三つの Persons は、心、理性、力［行為］である」というベリの三位一体の説明は、聖書やイングランド教会の考えに合わないが、サベリウスの考え［「父、子、聖霊は、からだ、魂、霊」］とはそれほど違わない。ベリの考えは、神だけでなく、人間にも言えることであり、また、「心、理性、力」は同じ魂の三つの様相、属性にすぎず、Persons と言う時の存在ではない。このような考えは、正統の教父にはない[212)]。

ソッツィーニ主義略史

救い主は人間にすぎないという異端の信仰と、その結果生ずる教え［ユニテリアンの教え］は、最近ソッツィーニ主義と呼ばれてきた。この異端は、古くからあったけれども、長い間知られておらず、最近二人の Socinus や Servet らの書物によって知られるようになった。

この教えを最初に起こしたのは、使徒と同じ時代の Cerinthus。彼に対する反論として

211) Nicholls, pp. 84-86.
212) Nicholls, pp. 87-94.

St. John は福音書を書いた。Cerinthus の弟子 Ebion, 下って Theodotus Scytes, Artemon, Paulus Samosetanus, Sabellius, Photinus が古代におけるこの考えの主要な擁護者であった。この後、異端としては、Arianism, Nestorianism, Eutychianism が支配的となった。12 世紀には Petrus Abelardus がこの考えを復活させた。

宗教改革期にはじめてこの考えを主張したのが、Michael Servetus。その後 Valentinus Gentilis, Georgius Blandrata, Paulus Alicatus, Franciscus Stancarus, Franciscus Lifmaninus, Bernardus Ochinus, Franciscus Davidis ら、続いてユニテリアン神学の基礎を作った中心人物 Laelius Socinus（1525-1562）とその甥でユニテリアン神学を完成させた Faustus Socinus（1539-1604）が現われた。Faustus Socinus の後、彼の考えに従った Georgius Enjedinus, Ostorodus, Johannes Volkelius, Ernestus Sonerus, Valentinus Smaltzius, Johannes Crellius, Samuel Przipcovicius, Jonas Slichtingius, Johannes Lodovicus Wolzogenius らが出た。[これらの人々の考えと生涯が簡単に書かれている。]

ソッツィーニ派の教えは、従来、Poland と Transylvania, それにオランダのレモンストラント派の中の小さな集団に限られていたが、イングランドはこの前の反乱と簒奪の時に異端の巣窟となって、John Bidel (Oxford の MA) がソッツィーニ主義を導入し、ロンドンでこの派の集会を持ち、ソッツィーニ派の教義問答集などを書いた。

しかし、1658 年ポーランド国王は勅令により、ソッツィーニ主義を教えあるいは告白する者は死刑、信仰を棄てない者は三年以内に立ち去ることという前王の法を復活させた。更に、この期限は 1660 年中に、と短縮された。そのために多くのソッツィーニ派の人々は、Poland と Lithuania を去り、Prussia, Silesia, Brandenburg, Holland などに住みついた。その後に現われた注目すべきユニテリアンは、Christoph. Sandius, イングランドでは最近の F――n 氏の論稿と『裸の福音』だけである[213)]。

12. トマス・ロング『裸の福音に対する回答』1691.

トマス・ロング Thomas Long (1621-1707. Exeter に生まれ、1639 年 Oxford の Exeter College の給費生、1642 年 BA 取得。1652 年 St. Lawrence Clyst の代理司祭 vicar。市民革命期には、国教会と王権の強力な擁護者として活躍し、1660 年 Oxford の BD を与えら

213) Nicholls, pp. 95-108.

れた。1661年Exeter Cathedralの参事会員prebendary(1701年辞任)。1689, 1693, 1694年聖職者総会議の教区選出代議員。)は、Thomas Long, *An Answer to a Socinian Treatise, Call'd The Naked Gospel, which was Decreed by the University of Oxford, in Convocation, August 19, Anno Dom. 1690. to be Publickly Burnt, as containing divers Heretical Propositions. With a Postscript, in Answer to what is added by Dr. Bury, in the Edition just Published*(『裸の福音という名のソッツィーニ派論説に対する回答。この論説は、オックスフォード大学により、主の年1690年8月19日の評議会において種々の異端の命題を含んでいるとして公の場で焼かれるよう命じられた。今度出版されたばかりの版で、べリ博士が付け加えたことに答えるあとがきを付す。』), London, Randal Taylor, 1691. で、『裸の福音』をソッツィーニ主義の異端の議論であると批難して、次のように述べている。

「エクセター主教Jonathan［Trelawney］宛献辞」では、こう書いている。

『裸の福音』は、ソッツィーニ主義、「われわれの救い主の王位、王国を［否認］転覆させようとする公然の試み」である。「異端火あぶり法」は厳し過ぎたと考えるけれども、世俗権力による「主を否認する呪うべき異端に対する強力な抑制」がなければ、教会法だけでは、われわれは以前よりも混乱した状態になるであろう。

ソッツィーニ派は、権力を握れば、「多神論者、偶像崇拝者」(と彼等が考えている)われわれに対し、教皇派以上に残酷となるであろう(アリウス派の例を見よ)。従って、イングランド教会の基礎である三位一体を覆そうとする者に対しては、「異端火あぶり法」を廃止した29 Car. II, c. 9.［1677］を文字通りにすばやく適用すべきである。

1 Gul. & Mar., c. 18.［1689］には、イングランド教会と意見を異にする人々で従来の宗教関係の法律の刑罰免除を受けようとする者は、三位一体の信仰を告白しなければならない、とある。私は、三位一体の信仰を破壊する「無限定の寛容」に対抗して、この信仰を守ろうとしているのである。

「序」では、こう書いている。

『裸の福音』は、慈愛を広げ、信仰の事柄における欺瞞を批判するという名目の下に現実には、イングランド教会が受け容れているアタナシウス信条やニケア公会議の教えをあざ笑い、自然宗教を選び取っている。著者[214]の考えはソッツィーニ主義であり、ソッツィーニの異端は、異端の中でも最悪の異端である。オックスフォード大学が異端の『裸の福音』

214) ロングは『裸の福音』の著者を「著者」、「博士」と呼んでいるが、あとがき以外では、「著者」に統一した。あとがきでは、表題にはArthur Bury, D.D.とあるが、論の中では「博士」と呼んでいる。

を焚書に処し、Exeter College の巡察者 Exeter 主教が著者を懲戒処分したのは当然のことである。

以上は、本論の要旨でもある。

本論ではまず、イングランド教会は、39 箇条の第一条で三位一体を認め、[第八条で]ニケア、アタナシウス、使徒の三信条を認めている、頌栄、洗礼、嘆願(連禱)、賛美歌の中でこれを認める言葉が繰り返されている、従って、「イングランド教会の本当の子」がこれに反することを出版するということは、「事実に反する断言」である[215]、と書き、続いて『裸の福音』の焚書を命じたオックスフォード大学評議会の文書を転載している（小論 325-328 頁参照）。

本論は続いて、評議会が異端、誤りと宣告した命題は「アリウス派とソッツィーニ派の議論の精髄」であり、イングランド教会の教えに対する論駁である[216] と述べ、『裸の福音』序及び各章に対する批判（その要点は、キリストの贖罪を認めない『裸の福音』の自然宗教批判、及び、序批判の後にある「『裸の福音』に対する一般的批判」の二つの論点（後述、小論 343-344 頁参照）に集約できる）を展開している。

ロングは、議論の基であるキリスト教について、次のように書いている。

イングランド教会の教えは、聖書を基にした、普遍教会 the Universal Church の長年の教えである[217]。聖書は、「キリストは福音の誓約の基である、この誓約はキリストの血によって確証され、保証されたということ」、キリストは単に神の言葉を伝えた使者であるだけでなく、自分の死によって贖ったものにわれわれ［キリストを信じ、その命令に従う者］を与らせる、キリスト自身の誓約（恵みの誓約）の当事者であるということを教えている[218]。イングランド教会の信仰は、「心を清めて、信ずる者をあらゆるよき行ないにおいて実り豊かにする信仰、われわれを謙虚かつ神聖に保ち、自分自身の行ないの功績によって義とされると思い込むのではなく、キリストがなされた贖罪を通して［われわれは］義とされる、神はキリストの贖罪の故にわれわれとわれわれの心からの従順を受け容れて、われわれの罪をわれわれに負わせられないと思う信仰」であり、「その上、われわれはこの信仰を神の贈り物、神のわれわれの中での働きであると認める。」[219] イングランド教会で告白されている「愛によって働く信仰」は、「キリストの［罪を償うだけの］価値ある死、受難、

215) Long, pp. 1-2. Cf. Long, p. 49. p. 61. p. 79.
216) Long, pp. 7-8. p. 12. pp. 14-15. p. 49. Cf. Long, p. 61. p. 79.
217) Long, p. 23. p. 70. Cf. Long, p. 79. pp. 83-87. pp. 98-99.
218) Long, pp. 26-27. Cf. Long, p. 83.
219) Long, p. 40. Cf. Long, pp. 45-46.

復活、とりなしに対する信仰」である。この信仰こそが心を清め、自分自身のために生きるのではなく、自分のために死に、よみがえられたキリストに従い、「この世で正しく、節度を持ち、神に倣って生きる」ようにさせる信仰である[220]。

『裸の福音』の福音の要点（Bury, p. 50.）には、この「イエスによって来た恵みと真理」、「神はキリストのうちにあって、この世と和解された」、「神の子の尊い血による贖い」、「キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義」（フィリピ書3：9.）のことは何も書かれていない。著者は、ソッツィーニ派と同じく、これらの信仰を認めず、これらに反対し、これらを「神は嘘をつかれない」ということに対する自然の信仰に解消しようとしている[221]。イングランド教会の祈禱書にもある「キリストの功績を自分にあてがう信仰」批判（Bury, p. 53.）は、John Beedle, *Socinian Catechism* [1654] の序に書かれていることに酷似している[222]。

著者は、誓約を自然法に基づかせることによって「恵みの誓約」[「信じて、洗礼を受ける者は、救われる」] を「行ないの法」[「これを行ない、生きよ」] と混同している。著者によれば、キリストは、自然宗教を他の預言者よりも更に高めた、すぐれた預言者にすぎない。こうして著者の考えは、自然宗教、自然の（啓示なしの）信仰、自然法を重視し、人間の自然の努力は、キリストの恵みなしに、救いに十分であると考えるペラギウス主義 Pelagianism である[223]。これは、ソッツィーニ派の考えでもある[224]。

著者の考えでは、洗礼は「わたしたちに与えられた心の内の、霊の恵みの、外の、目に見えるしるし、わたしたちが恵みを受ける手だて、わたしたちに恵みを確信させる保証としてキリスト御自身が定められたもの」（イングランド教会教義問答）ではなくて、「心の外側の告白という儀式、しるし」（Bury, p. 22.）にすぎない[225]。主の晩餐も、ソッツィーニ派の考えと同じく、「キリストの死を想い出すためにのみ制定された儀式」（*The Constant Communicant* [1681]）である[226]。

ソッツィーニ派は、著者と同じく、理性によって理解できないことを信じてはならない、と主張する。これは、自分の理性を聖書よりも上に置くことであり、教皇派の人々が教皇は誤ることがないと信じているのと同じことである。しかし、神が啓示により与えられた

220) Long, pp. 90-91. Cf. Long, p. 26.
221) Long, p. 89. pp. 91-92. Cf. Long, p. 106.
222) Long, pp. 92-93.
223) Long, pp. 26-28. Cf. Long, p. 46.
224) Long, pp. 40-41. pp. 87-88. p. 90. p. 91.
225) Long, p. 29. Cf. Long, p. 86.
226) Long, p. 30.

信仰箇条を、理性によって理解できなくても、神の証言を基に信ずるということは、正しい理性の原則に反していない。これは貧しい者にもできることである。福音の啓示は、「人間の理性の届けるところを越えてはいるけれども、それに反してはいない」。「信仰の眼は、理性の眼をはるかに抜きん出ている」[227]。キリスト者は、理性の及びえない、肉の理解では理性に反すると思われる、しかし実際には理性に反してはいないこと、「救い主は神の永遠の子である」という啓示を信ずる[228]。

アリウス派やソッツィーニ派の考え、例えば、「全知全能の神は創造された神である」、「神の正義に対する贖いなしに神は人間と和解される」、「無限の本質が限りのある理性によって測られる」、「創造された者キリストを神と同じように礼拝すべき」にこそ、明らかな矛盾がある[229]。

ロングは、キリスト教についての以上の正統の考えを基にして『裸の福音』を批判し、上に述べた「ソッツィーニ主義の自然宗教」批判を別にすれば、批判の一般的論点としては二つを挙げて、次のように論じている。

1．著者の言う慈愛は、「アリウス派とソッツィーニ派の教えの寛容のためのもの」である。「彼は［2版「読者に」で］、あらゆる種類の異端を包み込むことができる広教主義者の慈愛深い異端、何の条件もない普遍的寛容を勧めている。」[230] しかし、「主イエスを告白し、神はイエスを死者の中からよみがえらされたと信ずるすべての人々［永遠、神、栄光・礼拝、その命令への従順など、すべてを剝ぎ取られたイエスを告白しているとしても］に対する寛容」(Bury, 結び)は、信仰を従順・愛から切り離している[231]。ソッツィーニ派は、キリストは神であると信ずる者は救われない、そのような者は多神論者、キリスト教反対者であって、キリスト者の名に値しない、と言っている（Smalcius)[232]。

著者の愛は小さい。

i．神に対する愛は、われわれの永遠の生命のために独り子を与えられた神の愛（ヨハネ伝3：16.）を信じ、その愛に応えることである。キリストに対する愛は、われわれのために死に、よみがえって、救いの敵のすべてを滅ぼし、われわれを聖なるものにするために聖霊を遣わされるキリストに対する愛である。聖霊に対する愛は、人間の自然の霊（不

227) Long, p. 33. pp. 35-36. p. 44. pp. 58-57(wrong number. 60). Cf. Long, p. 39. p. 43. p. 53. p. 86. pp. 98-99. pp. 106-107.
228) Long, pp. 94-95.
229) Long, p. 95. Cf. Long, p. 106. p. 111.
230) Long, p. 18. Cf. Long, pp. 7-8.
231) Long, pp. 100-101.
232) Long, p. 19.

従順の子にも働く霊）とは別の霊に対する愛である[233]。

ii．兄弟に対する愛を、キリストの教会の人々は偶像崇拝者であると主張する著者は、示していない。イングランド教会、Westminsterでの聖職者総会議に対する愛も大きくない。聖職者総会議の聖職者は、適度の譲歩をしようとしていたけれども、「教会体制、教えの変更、広教主義原則の寛容を要求する、恥を知らぬ、信仰をつまづかせる多くのパンフレットを見て」、「ソッツィーニ派の異端の寛容などという理にかなわない提案に屈するわけにはゆかない」と考えたのである。オックスフォード大学評議会に対する愛については、2版「読者に」での評議会批判を見れば、著者の愛が同じ信仰の持主に限られていることが明らかである。これが著者の『裸の福音』を書いた意図であるならば、使徒［パウロ］が言うように「呪われて当然である」［ガラテヤ書1：8.9.］[234]。

2．聖書を基にした、普遍教会の長年にわたる教え[235]であり、「罪の赦しの基礎」[236]、愛の基[237]である、キリストの「永遠の生まれ」、「子と聖霊は神であること」、「三位一体」が否定されている[238]。『裸の福音』は、「キリストから、その礼拝を支える輝かしい特質をすべて剝ぎ取って、キリストを裸のままにしておく」「新しい福音」[239]である。

救い主は神であることの根拠は、1．旧約聖書と新約聖書の関連個所の対比照合、2．ニケア総会議までの古代の教父、殉教者の教えと信仰（彼等はこの信仰の故に迫害された）、3．救い主が神であることを否定する異端者に対する神の裁きである[240]。

三位一体の明確な証言は、マタイ伝28：19．ヨハネ伝15：26．コリント前書12：5.6．コリント後書13：13．にある。その他にも、救い主は神の特質（全知、全能など）を持っていると書かれているところは、聖書に多くある[241]。どのようにして一つの神の中に父、子、聖霊という三つのPersonsがあるかは、人間の理性にはわからないけれども[242]。

同じからだの復活を信じない方が、神の栄光を増し、福音の役に立つ（Bury, pp. 45-49.）。——聖書（コリント前書15：37-38.53．ヨブ記19：27［25は誤］.）は、形、性質が変化しても同じからだの復活を示している。信仰篤い者は聖霊の「神殿」［コリント前書3：16-17.］であるから、その報いを同じからだで受けるのは当然である。また、キリストは同じ

233) Long, pp. 101-103.
234) Long, pp. 103-104.
235) Long, p. 23.
236) Long, p. 69.
237) Long, p. 16. pp. 93-94.
238) Long, pp. 18-19. Cf. Long, pp. 30-31. p. 92. pp. 98-100.
239) Long, pp. 25-26. Cf. Long, p. 40.
240) Long, p. 105. pp. 107-137.
241) Long, pp. 116-117. Cf. Long, p. 79.
242) Long, p. 155.

からだで復活されたし、裁きの日には同じからだで来られる[243]。

ロングは更に、キリストは神であることや三位一体が真実であることを示す歴史的考察（これは、ル・クレール『歴史に基づく裸の福音弁護』批判でもある）を次のように書いている。

プラトンやプラトン学派の人々は、神には「存在、理性［λόγος 言葉］、この世の魂」という三つの原理があり、存在は理性を生み、理性はこの世の魂を作り出す、と考えていた。λόγος という言葉のこの意味は、ユダヤ人の間で普通に受け容れられており、救い主は、「神の子」という意味で神の λόγος と呼ばれていたのである[244]。

原初の福音と現代の福音に違い（Bury, 序）はない。教会はそれを守り続けてきた。福音の成功を妨げたのは、その教えの故でも、神の摂理の故でもなく、Ebion, Cerinthus, Marcion や Gnosticks, Nicolaitans の間違った教えや行ないの故である[245]。「キリストは永遠の神である」ことを否定した最初の者は Ebion と Cerinthus である。聖ヨハネは福音書と書簡で彼等に反論して、キリストは神である、神と同じ本性、本質を持つ（神の子は神と同義の言葉である　ヨハネ伝 10：36.）、と明確に書き、彼等を「異端」、「人を惑わす者、反キリスト」（ヨハネ第 2 書 7）と呼んだ[246]。「キリスト教世界を切り裂く最初の最も無慈悲な論争」（Bury, p. 55.）を始めたのは、Ebion, Cerinthus, Arians である[247]。

アレクサンドロス（アレクサンドリア司教）は、地区教会会議で、配下の司祭アリウスと彼の考えに従う何人かを「キリストがいない時があった」、「キリストは神によって無から創造された者である」などの異端の考えの故に破門した［321］。普遍教会 the Catholicks とアリウス派は互いに交わりを拒否して分裂し、両派の間にあつれき、騒動が起った。皇帝コンスタンティヌスは、アレクサンドロスとアリウスに書簡を送り、同じ一つの信仰を持っている両者が信仰の本質に関わらないささいなことで論争せずに、和解して兄弟としての交わりに帰るよう要請した。しかし、騒動は収まらなかったので、コンスタンティヌスはニケアに総会議を召集した。この会議［325］で作られた信条（これには、［「かつて主イエス・キリストがいない時があった」、「生まれる前にはいなかった」と言い、イエス・キリストは存在していないものから、あるいは、他の実体、本質から生じたのであり、神の子は変化し、変わることがあると断言する者――これらの者を普遍の使徒の教会は、呪

243）Long, pp. 88-89.
244）Long, pp. 37-38.
245）Long, pp. 8-9.
246）Long, p. 13. pp. 50-53. Cf. Long, p. 8. p. 25. p. 155.
247）Long, pp. 93-94.

われた者と定める。] という呪いの宣言が付け加えられた。) に318人の司教は承認署名をしたが、「同質 Consubstantial」という言葉の故に署名を拒否した5人の司教はアリウスと共に追放と定められた(このうち Eusebius と Theognis は、考慮の後に承認署名した)。皇帝の [異母] 妹コンスタンティア Constantia は、死ぬ前に、自分が信頼していたアリウス派司祭を敬虔、信仰篤い人として皇帝に勧めた。皇帝の好意を得たこの司祭は、アリウスはニケア会議の人々と同じ考えである、と皇帝に言った。これを受け容れた皇帝は、アリウスに信仰告白を提出させ、更に、ニケア会議教令に同意するとの欺瞞の承認署名、宣誓を得て、アレクサンドロス (当時、コンスタンティノポリス司教) にアリウスを交わりに入れるよう命じた。翌日アリウスが教会に行く途中、神罰が下り、彼は大きな恐怖に襲われて失神し、死んだ [336]。コンスタンティヌスは、ニケア会議教令の正しいことを確信した。こうして、『裸の福音』の著者はテオドシウスがこの論争に決着をつけたと書いている (Bury, p. 38.) けれども、コンスタンティヌスが既に決着をつけていたのである[248]。

コンスタンティヌスは、ニケア会議で問題点をよく知った後は、アリウスの考えを批難し、アリウス派の書物を焼かせており、アリウスの死の事情を聞いた後はアリウス主義を根絶しようとしていた。著者は、この経緯を知っていながら、それについては何も言っていない。ニケア会議の後で作られたアリウス派の多くの信仰告白は、チャールズ1世王位追放後の改革と同じく、宗派の利益のためのものであり、その支配は短命に終った[249]。

マホメットは、キリストが神であることを否定し、自分はモーセ、キリストに続く、彼等より大きな力 (強制力・暴力) を使って神の法を広めるよう遣わされた「神の最後の、最大の預言者」であると称した。彼は当時アラビアやエジプトに住んでいた逃亡ユダヤ人、異邦人、アリウス派に取り入ろうとして、割礼・モーセの法、4人までの妻・養えるだけの妾、モーセより偉大な神の使者キリストを信ずる「裸の福音」を認めた。従って、キリストを神と認めないという点で、『裸の福音』はコーランと一致している[250]。

従って、「アタナシウスの教えはローマの教えの一つであると言える、それはアリウス派の教えと同じ次元のものであり、われわれの信仰にも検討にも同じように値しない」 (Bury, p. 39.) という著者の考えは、「ソッツィーニ主義の精髄」であり、間違っている。ニケア会議は、聖書に基づいてアタナシウスの教えを認めたし、イングランド教会も、ニケア、アタナシウスの教えを持ち続けている[251]。「イングランド教会は、(聖書と原始教会

248) Long, pp. 71-81.
249) Long, pp. 20-21. Cf. Long, pp. 62-68.
250) Long, pp. 9-11. Cf. Long, p. 19.
251) Long, pp. 69-70. p. 79. Cf. Long, p. 92. p. 100.

にかなうものはすべて持ち続け）ローマ教会の堕落した改革、欺瞞のすべてを……正してきた。」[252]

イングランドでの福音について言えば、「信仰いと篤い国王、殉教者チャールズ 1 世の統治の下で一旦栄えたイングランド教会は、次のように改革された。まず長老派議会がその主教と祈禱書を取り除き、次に独立派軍隊がその土地と収入をむさぼり食い、次に霊感を受けた将軍があらゆる種類の狂信者寛容を持ちこみ、更にさまざまな変革の後、裸の残余議会が改革した。神御一人がこれを妨げなかったならば、われわれは全く混乱の中に置かれていたであろう。」[253]

『裸の福音』による福音の改革は、最初の Gnosticks, Nicolaitans, Ebionites（ユダヤ教を混入し、モーセをキリストと対等とした）、次に、Samosatenians, Arians（キリストは神でないとした）、更に Mahomet（自分がキリストの上に立った）、その他の多くの改革に続くものであり、キリストと聖霊を冒瀆している。このペリシテ人の冒瀆に反対して、私はこの書を書いた[254]。

最後に、『裸の福音』に対しては神が既に解毒剤を備えられているとして、オックスフォードの欽定神学講座担当教授で Exeter College の長 Rector であった John Prideaux（1578-1650）のマタイ伝 16：16.「シモン・ペトロは答えて言った、あなたは救い主、生ける神の子です。」についての講義の英訳を付け加えている[255]。

あとがき「神学博士アーサー・ベリが出版したばかりの裸の福音批判」では、要旨次のことが書かれている。

「読者に」批判。

聖職者総会議［1690］は、信仰の事柄を変えようとして召集されたのではないし、そこで三位一体や受肉の教えを放棄しようとしていた人はいない。また、その人々の中にウィリアムのやり方に不満でジェイムズの復帰を望んでいる人がいるとは思わない。むしろ、「アリウス派やソッツィーニ派の異端の成長と成功」に反対して、「三位一体と救い主の受肉の教え」を守る人々が「イングランド人の本当の教会」を作っている。

「自分は教会の信仰箇条のどれをも一言たりとも否定したとは思っていない。」という博士の抗弁にもかかわらず、『裸の福音』の主たる意図が「イエスは神である」という最も重要な信仰箇条の否定にあることは明らかである。彼はこの 2 版で初版の異端の考えの多く

252) Long, p. 9. Cf. Long, p. 13.
253) Long, p. 104. Cf. Long, p. 125.
254) Long, pp. 104-105. Cf. Long, p. 101.
255) Long, pp. 137-156.

を撤回しているように見えるけれども、彼がここで言っていることの矛盾は明らかであり、アリウス派やソッツィーニ派の偽りの自説撤回告白と同じものである[256]。

7章「聖三位一体について」批判。

博士はここで、*ὑσία*, *ὑποςυοις* という言葉の吟味から始めて、「[Person の区別なしに]唯一の高貴な神は、父[心]、子[言葉]、聖霊[力と行為]であるという、*Paulus Samosatenus* や *Sabellius* の教えと一致する[聖書やイングランド教会、教父らの考えと一致するし、ユニテリアンも同意する（と博士は考えている)] 三位一体の新しい観念」を提示している。これは、「父なる神は旧約ではモーセによって語り、新約ではキリストによって語る」という Hobbs の考えと似ている。また、聖書では、第二、第三位格に対して「言葉」、「力と行為」以外のさまざまな特性が与えられており、力は第三位格よりも第二位格の特性としてより多く言われている。こうして博士は、彼一人の理性を教会の理性と権威に逆らって対置させ、昔からの異端に新しい衣を着せて教会に押しつけようとしている[257]。

2版では、救い主は神であること、三位一体を聖書に基づいて認めているところがある（Bury 2版, pp. 53-55.）ことは、喜ばしい。しかし、それを否定するソッツィーニ派をキリスト者と認め、彼等に救いの望みを認めている［Bury 2版, p.55.］のはおかしい[258]。

最後に、Chester 主教 John Pearson (1613-1686) の *An Exposition of the Creed* (1659) から、キリストの永遠の生まれを論じた個所の一部を紹介している[259]。

こうして本書には、正統の信仰を基にした、『裸の福音』は「キリストは神であることの否定」を中核とするソッツィーニ主義の異端であるという信仰批判とあわせて、同じく正統の信仰を基にした、異端の信仰の持主に対する世俗権力による力の行使、迫害を必要、当然とする異端迫害肯定の考えの一つの典型がある。

トマス・ロングは、ロック（匿名）『寛容書簡』*LT* (William Popple による英訳) (1689) 出版直後に Thomas Long (anon.), *The Letter for Toleration Decipher'd, and the Absurdity and Impiety of an Absolute Toleration Demonstrated, by the Judgment of Presbyterians, Independents, and by Mr Calvin, Mr Baxter, and the Parliament, 1662*（『寛容支持書簡を読み解く。絶対の寛容の不条理と不敬虔を長老派、独立派の人々の判断、

256) Long, pp. 157-160.
257) Long, pp. 160-163.
258) Long, pp. 163-164.
259) Long, pp. 165-168.

及び、カルヴァン氏、バクスター氏、1662 年議会により論証する。』), London, R. Baldwin, 1689.（*LTD* と略記する）を書いて、ロックの寛容論を批判していた。

このパンフレットは、首席裁判官で枢密院構成員である Sir John Holt, Kt. への短い献辞の後、本論で要旨次のように論じている。

著者の原則

1．著者は「読者に」[260] で、「絶対の自由」を「正しい、本当の自由、対等、公正な自由」として主張している。これは、「誰もが自分の好きなことを信ずるだけでなく、それを公に告白する自由であり、そのような無法な自由を為政者が法によって抑え制しようとするならば、力には力で抵抗することは法にかなっていると考えているということである。」この自由は「生まれつきの権利 birth right（原文は natural Right）」（p. 48.［p. 48.］[261]）であり、この絶対の寛容は「本当の教会であることを示す主要な印」（p. 1.［p. 5.］）であると言う。これは、キリスト者の交わりのすべてを教会ではないとするものである。初期の教会では、使徒や長老 Elders は、構成員の考えの違いに決着をつけ、教えと礼拝の統一を保つ権威と権限を持っていた。その後の教会においても、教父や司教は同じ権威と権限を持っていた。「［絶対の自由は］むしろ反キリストの特徴である。」[262]

教会の中に分離、分裂を作り出す自由、教えは許されるべきではない（コリント前書 1：20. ロマ書 10：17. 14：22. ガラテヤ書 5 ：12.）。すべての良心の寛容を主張する者は、権力を握ると、対立する者を残酷に迫害してきた（アリウス派や過去、現在のイングランドを見よ）[263]。

2．「為政者の権限のすべては、世俗社会の事柄だけに及び、……どんな仕方であれ、魂の救いにまで広げることはできませんし、また、広げるべきではありません。」（pp. 6-7.［p. 10.］）――これは、ロマ書 13［1-5］に反する。皇帝コンスタンティヌスは、教会の外的儀式、管理を命ずる権利を要求したし、聖書は、「王たちは彼らの養父となる」［イザヤ書 49：23.］と予言している[264]。

為政者は、悪疫を持っている者を隔離する義務を持っているように、魂の悪疫、異端、誤りを持つ者を隔離する義務を持っている。為政者は、異端、誤りを許すならば、それに

260）ロック『寛容書簡』（英訳）では、「読者に」の筆者が誰かについては何も書かれていない。しかし、実際には、「読者に」は英訳者 William Popple の文章である。
261）頁数は、ロングが使ったロック『寛容書簡』初版の頁数。［　］内は、*The Works of John Locke*, 1823. Vol. VI. の頁数。
262）*LTD*, pp. 1-2.
263）*LTD*, pp. 10-11. Cf. *LTD*, pp. 13-14.
264）*LTD*, p. 3.

よって生ずる罪の責任がある[265]。

3.「教会とは、神に受け容れられて魂の救いが与えられると自分達が判断する仕方で神を公に礼拝するために自分達の意志で結びついている人間の自発的な集まりである」(p. 9.[p. 13.])。――これでは、トルコ人でもユダヤ人でもよく、聖書やサクラメント、主教や牧師、規制や法もいらず、「人間の戒めを教えとして教える(マタイ伝15:9.)、[人間が]自分達の作り出したものに従う意志礼拝 Will-worship」である[266]。

著者のその他の個別の論点(批判を加えずに列挙)

為政者は、教会に特定の儀式を命じ、禁ずる権利を持っていない(p. 29.[p. 30.] pp. 32-33.[pp. 33-34.]p. 36.[pp. 36-37.])。思索に関わる教義を命じ、禁ずる権利を持っていない(p. 40.[p. 40.])。福音の下に「キリスト教のコモン・ウエルスというようなものは絶対にありません。」(p. 37.[p. 38.]p. 54.[p. 52.])宗教においてすべての人間に対する寛容を認めない者は、寛容されるべきではない(p. 47.[p. 46.])。日常生活において自由であることは、神の礼拝においても自由であるべき(p. 33.[p. 34.] pp. 52-53.[p. 51.])。特定の教会で許されていることは、どの教会においても許されるべき(pp. 53-54.[p. 52.])。異教徒、マホメット教徒、ユダヤ人にもコモン・ウエルスの世俗の権利を認めるべき(p. 54.[p. 52.])。違う考えの人々に寛容を拒否したことがキリスト教世界における戦争の原因である(p. 55.[p. 53.])[267]。

この著者は、黙示録9:3.の「いなご」のようなものである。「愛と統一を勧め」、「悪徳批判」の雄弁を振っているのは、欺瞞にすぎない。「彼の書簡の意図のすべては、絶対の寛容によって教会と国家の全体を混乱に陥れることである。絶対の寛容の意図は、われわれを無数の、和解できない宗派に砕くことである。その結果、教皇教会 *Popery* はわれわれの間で寛容されるだけでなく、われわれを支配するようになるであろう。」この問題の詳細については、改革派教会の信仰告白、カルヴァン、グロティウスの著作、更にはこのような寛容に反対した長老派、独立派の人々の議会説教(1641-1647)を読むとよい[268]。

この後、R. Baxter の諸著作から、寛容反対、国教遵奉(分離反対)、教区教会に対立する秘密分離集会批判、教会事項に関わる為政者の権威への従順、教区聖職者への従順、大主教・主教を頭とする教会体制支持、教会儀式支持、サクラメントにおいてひざまずくこと、洗礼において十字を切ることは法に反しないことを述べている文章が引用されてい

265) *LTD*, p. 9. Cf. *LTD*, pp. 14-15.
266) *LTD*, p. 3.
267) *LTD*, pp. 3-4.
268) *LTD*, pp. 4-5. Cf. *LTD*, p. 9. p. 16.

る[269]。

最後に、国教反対者に対し統一令 Act of Uniformity [1662] からの免罪を拒否した 1662 年の議会決議を引用して、「寛容、信仰の自由」は、さまざまな宗派を作り出して、この国を大混乱に陥れる、それに対して、「教皇教会と狂信」を排除する統一令の体制は、国の平和を確立させる、と結んでいる[270]。

ロックはこれには反論を書かなかった。

13. ウィリアム・フリーク『神についての対話』『三位一体に対する反論』1693.

ウィリアム・フリーク William Freke（1662-1744. Wadham College, Oxford の自費生であり、the Temple でも学んだが、聖職や法曹職にはつかなかったと思われる。）は、1693 年匿名で、出版者名も付けずに二つの論考の合本、(anon.), *A Dialogue By Way of Question and Answer, Concerning the Deity. All the Responses being taken verbatim out of the Scriptures & A Brief, but Clear Confutation of the Doctrine of the Trinity*（『神についての質疑応答による対話。返答はすべて、聖書から言葉通りにとられている。』及び『三位一体の教えに対する手短かな、しかし明確な反論』), London, 1693. を出版した。その概要は次の通りである。

『神についての対話』

聖書には、「唯一の神、父である神」がおられる（コリント前書 8：6.）、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」（出エジプト記 20：3.）とある。「三位一体」という言葉は聖書にはない。「わたしと父とは一つ」（ヨハネ伝 10：30.）、「三者は一つ」（ヨハネ第一書 5：7-8.）にある「一つ」は、「証言の一致」であって、「実体の一致」ではない[271]。

キリストは父である神に完全に従属している（黙示録 3：12. ヨハネ伝 8：54. 14：28. 20：17. エフェソ書 1：17. コリント前書 15：27.28. マルコ伝 12：29. ルカ伝 18：19.）。キリストは「第一の、首天使」（出エジプト記 23：20-22. コヘレトの言葉 5：6. イザヤ書 63：9. エズラ記（ラテン語）2：42-48. Cf. ヘブライ書 1：4-9.）。ソッツィーニ派の主張と

269) *LTD*, pp. 17-28.
270) *LTD*, pp. 28-30.
271) Freke, pp. 1-2. Cf. Freke, p. 6.

は違って、キリストはこの世の前にあった(コリント前書10：4.5.9. フィリピ書2：6. ヨハネ伝16：28. 17：5.)。神はまず子を創造し、子を用いてそれ以外のすべてのものを創造された（ヘブライ書1：2. 2：10. エフェソ書3：9. コロサイ書1：15-19. ヨハネ伝1：1-11.)。キリストは、アダムによって堕ちた者を贖うために、この世に来られた（ヘブライ書2：9.10. ロマ書5：18.19.コリント前書15：21.22.)。受肉された時、キリストは、それまで持っていた力をすべて失った（ヘブライ書5：7.8. ヨハネ伝12：49.マタイ伝27：46. 26：39.)。しかし、復活の後は、以前の栄光のすべてを回復された（ヨハネ伝17：5. マタイ伝28：18. ペトロ前書3：22. エフェソ書1：20.)。従って、ソッツィーニ派の言うように「単なる人間」ではない。「神の子」と呼ばれている（使徒行伝13：32.33. ペトロ後書1：17.)[272]。

父である神だけが絶対の力を持っておられる（マタイ伝20：23. マルコ伝13：32.)。キリストの誉れは父によって与えられたものであり(黙示録5：9-13.)、キリスト、聖霊に対する礼拝は禁じられている（ヨハネ伝16：23.26. 聖霊については、ヨハネ伝14：16-27. 15：26.)。父と聖霊とは二重であって、ソッツィーニ派の言うように一つではないし、また、三位一体論者の言うように本質において一つではない(ロマ書26：27. エフェソ書2：18.)。聖霊は、キリストの代理天使である（ヨハネ伝16：7-8.13-15. 使徒行伝1：2. 2：33.)。しかし、良い天使（真理の霊 ヨハネ伝14：17.-15：26.）の他に、悪い天使（悪魔、サタン）がいる（黙示録12：9.10. 20：2.3. エフェソ書2：2. 6：12.)[273]。

「キリストが死んだのは、[キリスト者だけでなく]すべての人の罪の贖いのためである」（ヨハネ第一書2：1.2.ヘブライ書9：12.25-26.)。キリストについて聞いたことのない人も救われる（ヨハネ伝9：41. ヤコブ書4：17. ロマ書2：14.15.)。しかし、神の法をわざと忘れた者は滅びる（ホセア書4：6.)[274]。

『三位一体に対する反論』

「子と聖霊は神であるとすることは、聖書に反し、偶像崇拝であるとともに、父に対する不正でもある」。教会やその聖職者たちは、真理よりも宗派、利益を重視し、われわれに対する支配を打ち立てようとしてきた[275]。

「三位一体の教えは、神の単一そのものを破壊する。」この誤りは、ユダヤ人、トルコ人、異邦人に絶好の攻撃目標を与え、キリスト教に害を与えてきた。三位一体の教えは、十戒

272) Freke, pp. 2-5.
273) Freke, pp. 6-8.
274) Freke, p. 8.
275) Freke, pp. 9-10.

の第一「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」（出エジプト記 20：3.）の多神教禁止に反する。「わたし」が三者であるとは、理解できない（三より多数でもよいことにならないのか）[276]。

アタナシウス信条における矛盾。1．三者が一つである、あるいは三つの Persons が同質 homoousios である、というのは矛盾であり、神の誉れを最高に傷つけることである。2．子について。「神は自分の正義を満足させるために自分が死ななければならない」、「神は受肉し、知恵を増し、苦しみを受ける」とは馬鹿げた考えである。苦しんだのは神ではない、と言う人がいる。そうであれば、何故その功績が神に帰せられるのか。3．聖霊について。聖書で神と呼ばれたことがなく、礼拝の対象とされたことがなく、神とは別のものであるということが明確に示されているものが神であるのか[277]。

以上の三位一体の教えは、理性推論に反するだけでなく、聖書（神については十戒の第一、子についてはヘブライ書 1、聖霊についてはヨハネ伝 16：12-15.）にも反する。この教えの基礎である「永遠の生まれ、聖霊の発出、同質」は、聖書にはない。また、三位一体論者の中でも考えは分かれている。Wallis は「滅びの宣告」の力を弱めているし、Sherlock は、ギリシア教会と同じく、［ニケア信条の］「［聖霊は父］および子より Filioque」を否定している[278]。

歴史を見れば、最初は教皇、教会会議、キリスト者のすべてがユニテリアンであった。堕落した教会が言い伝えを改竄し、歪めたのである。彼等は、「理解できない神秘」と呼んでこれをごまかした。こうして基礎がぐらぐらしているから少なからぬ異端が現われ、それを抑えるのに力が使われるのである[279]。

「要するに、三位一体論は多神論であり、偶像崇拝である。」「多くの三位一体論者は、利益と評判を自分の神としている」。十戒の第一を犯した彼等は「反キリスト」、「神に背く者」（詩編 50：16-17.）であり、彼等の罪は普通の犯罪者の罪よりも重い[280]。

教会と聖職者、またその教えの基礎である三位一体を聖書に反し、神に背いていると批難したこのパンフレットは、上院、下院の何人かの議員にも郵送献呈された。下院は 1693 年 12 月 12 日、上院は 1694 年 1 月 3 日、このパンフレットは破廉恥な、信仰のつまづきと

276) Freke, pp. 10-11.
277) Freke, pp. 11-12.
278) Freke, pp. 12-13. Cf. Freke, p. 16.
279) Freke, pp. 12-14. Cf. Freke, p. 16.
280) Freke, p. 14. p. 16.

なる侮辱であると決議し、Westminster の Old Palace Yard で絞首刑執行人による焚書を命じた。焚書はそれぞれに実施された[281]。著者、印刷者、出版者調査委員会が作られ、法務長官は彼等を起訴するよう命じられた。Freke は King's Bench で2月12日罪状認否を問われ、無実を申し立てたが、5月19日有罪宣告され、500ポンドの罰金支払、Westminster Hall の四つの法廷での自説撤回宣言、3年間罪過の振舞ないことの保証人を立てることを命じられた。

14. ロバート・サウス『シャーロックの三位一体弁護批判』1693.

三位一体に関して伝統とは異なる新しい解釈を提示したシャーロックの『三位一体と受肉の教え弁護』は、普遍教会、イングランド教会の正統を自認する人々からも批判を受けた。ロバート・サウス Robert South（1634-1716. Westminster School（1647年入学）をへて、1651年 Christ Church, Oxford に入学。1655年 BA, 1657年 MA, 1658年聖職叙任を受け、1659年 Cambridge の MA。1663年 Westminster 参事会員、同年 Clarendon からの書簡に基づき Oxford 大学から BD, DD を与えられ、1664年 Cambridge の DD。1667年 Llanrhaiadr-y-Mochnant, Denbighshire, Wales の教区司祭、1670年 Christ Church の参事会員、1678年 Islip, Oxfordshire の教区司祭。高教会派であり、非国教徒に対する寛容には生涯反対した。国王には他の何者からも制約を受けない絶対の権利があり、国教会はこのような世俗統治の支えであると考えて、両者の密接な関係を強調した。名誉革命の時には、躊躇の後、James の逃亡は王位放棄であるという議会の解釈を受け容れて、臣従宣誓を行なったが、臣従宣誓拒否者に対する共感は最後まで持ち続けた。）は、「イングランド教会神学者による」として匿名で、(anon.) a Divine of the Church of England, *Animadversions upon Dr. Sherlock's Book, Entituled A Vindication of the Holy and Ever-Blessed Trinity, &c. Together with a more Necessary Vindication of that Sacred, and Prime Article of the Christian Faith from his New Notions, and False Explications of it. Humbly offered to His Admirers, and to Himself the Chief of them*（イングランド教会神学者、『シャーロック博士の書物、神聖にして永久に聖なる三位一体弁護云々の批判。この批判以上に必要な、その神聖にして第一のキリスト教信仰箇条に対する、彼の

281) *Journals of the House of Commons*, Vol. II, 12 Dec. 1693, p. 28. *Journals of the House of Lords*, Vol. XV, 3 Jan. 1694, p. 332.

新しい概念と間違った説明からの弁護を合わせ付す。彼の賛美者とそのかしらである彼自身にうやうやしく捧げる。』), London, Randal Taylor, 1693. を出版して、この「極めて正統でない書物の著者」シャーロックを要旨次のように厳しく批判した[282)]。

序では、シャーロックの著書 *A Discourse Concerning the Knowledge of Jesus Christ, and Our Union and Communion with him, &c.,* London, Walter Kettilby, 1674. 及び *A Vindication of the Doctrine of the Holy and Ever-Blessed Trinity &c.,* 1690. を「極めて正統でない Heterodox 書物」と呼んで、次のように批判している。

後者は、「三位一体の三つの Persons は、三つの別々の、無限の心、霊であると認める」三神論を主張すると同時に、これとは異なる考え、即ち、キリスト教会全体を「馬鹿、異端」と呼んでいる。「それぞれの Person の区別は自己意識にのみあり、その統一は相互意識にのみある」と主張して、アリウス派と同じく、「実体 Substance」、「実在 Hypostasis」という言葉を神あるいは神の Person について言うことに反対している。「真理は、真っ向からの反対よりも、裏切り、虚偽の弁護によってより揺さぶられる」。教会総会議 General Council が信仰について定めた考え、言葉遣いに反する考え、言葉遣いを公にし、伝える者に対しては、司教その他の聖職者の場合、聖職剝奪、修道士、俗人の場合、呪いの宣告を行なうべきである[283)]。

前者は、自然理性は、神の慈愛（赦しの恵み）の知識を啓示なしに神の摂理の作品から得ることができる（使徒行伝 14：17. 参照）と主張している。また、神の慈愛は、罪に対する復讐心が満足されて始めて働く（これは John Owen の考えからの当然の帰結だとシャーロックは主張しているけれども）などと書いて、神の正義、キリストによる贖いなどの神秘を冒瀆している[284)]。

本論では、シャーロック『三位一体と受肉の教え弁護』を批判して、要旨次のように論じている。

Ⅰ. 神秘 Mystery は、ギリシア語の *μυέω* 聖なる儀式、教えに入れる、あるいは *μύω* 閉じるに由来し、特に、宗教に関わって「隠されているもの」を意味している。キリスト教会の教父たちは、この言葉を「神が啓示された真理で、自然理性の力によっては見出し、また［完全に］理解することができないもの」という意味で使った。「例えば、三位一体、受肉、キリストと教会の神秘的統合、からだの復活など」は、神秘と呼ばれた[285)]。

282) 使用したテキストは、改訂第 2 版, 1693.
283) South, Preface, pp. II-VII.
284) South, Preface, pp. IX-XVII.
285) South, Ⅰ, pp. 1-6. XII, p. 375.

完全に理解していないものについて言われたことが矛盾である、あるいは、矛盾でないと言うことは、空虚、傲慢である（Sherlock, p. 4.）。――そうであれば、神についてのどんな命題も、否、この世のものについてのどんな命題も、矛盾であるとは言えなくなる。しかし、完全でなくても真実の知識はある。さまざまなものについて本質を知ることはできないけれども、その性質、働きなどを知ることはできる。シャーロックがこのことを認めているところもある[286]。

三位一体は、シャーロックの新しい説明によって明確に理解できる（Sherlock, p. 58. pp. 65-66. p. 68. p. 85.）。――そうであれば、三位一体は神秘ではないことになる。聖書には、福音の神秘の十分な理解は難しいと書かれている（コリント前書13：12. ペトロ前書1：12.）。また、三位一体を十分に知っているということは、それに対する畏怖を欠いている。シャーロックの説明で三位一体の難解なところのすべてが解決されるとは言えない[287]。

II．普遍教会は、1200年以上前に三位一体の観念を持っており、それを今日まで持ち続けている。シャーロックは、神学者が三位一体に関わってこれまでに使ってきた言葉Essence（あるものをそのものにしているもの），Substance（他のものの中に含まれずに存在しているもの），Nature, Subsistenceなどを難解、不条理の原因であると批判して（Sherlock, pp. 68-70.）、新しい言葉Truth, Wisdom, Goodness, Power, Mind, Spiritを使っている[288]。

1．シャーロックは、物質に関わる観念しかない「実体」「本質」「存在」などの言葉を神の三位一体に関わって使うことは誤りである、と言う（Sherlock, pp. 68-69.）。――実体は、物質とは関わりなく存在しうる。物質創造以前に神の実体はあった。Hobbsは実体と物質とを同一視したけれども、そう考える神学者はいない。また、シャーロックのこの考えに従うならば、物質のイメージを持つ「生む」「父」「子」なども神については言うことができないことになる。しかし、理性は、それらが持つ物質的なもの［有限なもの］を切り離して、非物質的なもの［無限のもの］に当てはまるものを取り出す力を持っている（ロマ書1：20.）[289]。

2．シャーロックが言う「真理」「知恵」「慈愛」なども、人間の言葉、行為の観察から得られる観念であるから、神について使われる時、「実体」「本質」と同じことが言える[290]。

286）South, I, pp. 7-16. p. 27. IX, pp. 294-296. Cf. Sherlock, p. 7.
287）South, I, pp. 17-26. XII, p. 375.
288）South, I, p. 24. II, pp. 28-36. XII, pp. 375-376.
289）South, II, pp. 37-46. p. 49.
290）South, II, pp. 47-49.

3．「実体」「本質」「本性」「存在」などの言葉の方が、「真理」「知恵」「慈愛」などよりも、神を表わすのにふさわしい。神は自分の本性について、まず「わたしはあるという者だ。」（出エジプト記 3：14.）と言われた。「実体」などは神の本体を表わす言葉であるが、「真理」などは本体に付属している特質を表わす言葉である[291]。

4．神と神の Persons の正しい理解が困難であるのは、シャーロックが言っている「言葉」とは別の原因、即ち、i．神の霊性（霊は、人間が直接知覚できないものである）。ii．神の本性は無限であること。iii．感覚の観察に訴える、同種の実例が全くないこと。による[292]。

「無限 Infinite」は、否定語にすぎず、現実の何かを表わしてはいない（Sherlock, pp. 77-79.）。――「無限」は、現実の、実在する完全（限定されない、という意味を含むけれども）を意味する[293]。

シャーロックの以上の考えは、正統の教会、イングランド教会の信仰箇条［39 箇条］の第一、祈禱書にあるアタナシウス信条、ニケア信条、頌栄にある言葉を、人を誤らせるものであるから排除すべきであると主張する侮辱、傲慢である[294]。

III．シャーロックは、三位一体の説明のために「自己意識」（心あるいは霊が自分の考え、推論、感情を知っていること）と「相互意識」（二つ以上の心あるいは霊が、各々が自分について知っていることを互いに知っていること）という彼独自の言葉を使って、「自己意識は人格の構成原理、形相根拠であって」、「一つの Person を作る」、「相互意識は、Persons の統一ではなくて……、Persons における本性の統一 Unity を作る」、と言う[295]。

1．「自己意識」に対する反論。

「有限の、即ち、創造された霊」においては、「自己意識」は Person、人格 Personality を作らない。何故か。i．人格がまずあって、その上でその人格の行為、更にその行為に関する自己意識がある。ii．キリストの人間本性（自己意識を持つ）は、三位一体におけるキリストの Person ではない。自己意識が Person を作るのであれば、キリストには人間と神との二つの Persons があるという Nestorius と同じ考えになる。iii．人間の魂は自己意識を持つけれども、Person ではない。魂とからだとの結合が一つの Person を作る[296]。

「三位一体の三位格」においては、「自己意識」や「相互意識」は人格を作らない。i．

291）South, II, pp. 49-51.
292）South, II, pp. 54-56.
293）South, II, pp. 57-59.
294）South, II, pp. 61-63.
295）South, III, pp. 68-70. Cf. South, XII, p. 376.
296）South, III, pp. 70-84. Cf. South, IX, pp. 320-321.

自己意識はPersonの行ないの一つである。PersonはPersonの行ないに先立つから、Personの行ないはPersonの人格を作らない。相互意識についても同じことが言える。ii．自己意識は「絶対的」「非関係」である（自己自身の内にのみある）から「関係的」である三位一体のPersonsの人格を作らない。iii．自己意識が神の三Personsの人格を作るのであれば、神の中に300, 3000のPersonsがありうることになる。iv．そうであれば、また、三つの自己満足（愛と忠誠による）は三つの人格を作ることになる[297]。

2．「相互意識」に対する反論。

i．相互意識の行ないは、知識の行ないである。しかし、知識の行ないは、存在あるいは存在の統一を前提にしているから、三位一体のPersonsの本性の統一を作らない。ii．三位一体のPersonsにおける本性の統一は、そのPersonsの相互意識の原因、根拠であるから、その逆はありえない。iii．相互意識（これは知識の統合Union, 即ち、交わりCommunion）は、本性、本質の統一、続いて各Personの自己意識を前提にしている。iv．各Personにおける「神の全知」で十分説明できることに、「自己意識」「相互意識」という新しい観念を付け加えることは余分であり、不必要である。

従って、「自己意識」「相互意識」は、神の本性、位格に関して何一つ以前よりも明確にしてはいない[298]。

IV．「神の三つのPersonsは、三つの別々の、無限の心あるいは霊である」（Sherlock, p. 50. p. 66. pp. 102-104. p. 119.）というシャーロックの主張に対する反論[299]。

1．「三つの別々の、無限の心あるいは霊は、三つの別々の神である。しかし、聖三位一体の三つの*Persons*は、三つの別々の神ではない。」「無限の心あるいは霊」と「神」とは同じものである。「三つの無限の心あるいは霊は、三つの絶対、単一の存在あるいは本質である……。しかし、神の*Persons*は三つの関係存在Relatives（三つの別々の関係の下にある、一つの単一の存在あるいは本質）であり、従って、……それぞれに独自な特定の様式あるいは関係によってだけ区別される……。」

2．「三つの別々の心あるいは霊は三つの別々の実体である。しかし、聖三位一体における三つの*Persons*は三つの別々の実体ではない。」

3．父、子、聖霊は、同じ一つの、無限の心あるいは霊である。

4．神のPersonsのそれぞれについて言われている特質［無限の心あるいは霊］は、神

297) South, IV, pp. 90-105. Cf. South, VIII, p. 282. XII, p. 376.
298) South, IV, pp. 106-115. Cf. South, VII, p. 203. pp. 206-207. IX, p. 296. XII, p. 376.
299) South, V, pp. 117-118.

のすべての Persons について言える特質であって、Person による区別のない、一つのものである[300]。

異教徒の哲学者も、自然理性に基づいて「神は一つの無限の心あるいは霊である」と考えていた。聖書にはシャーロックの上述の主張はない。また、自然理性によって確実に得られる真理は、真理であるから、啓示による真理と矛盾することはありえない。

シャーロックが自分のこの考えに同意しない者を「無意味、異端」(Sherlock, p. 66. Cf. Sherlock, p. 78.) と批難しているのは、彼の傲慢、独断である[301]。

シャーロックのこの考えこそ「極めて正統でない Heterodox 危険な考え」である[302]。

V. シャーロックは、自分の考え――1.「聖三位一体における三つの *Persons* は、三つの別々の、無限の心あるいは霊である。」 2.「自己意識は、人格の形相根拠 *Formal Reason* である。」 3. 神の三つの Persons は、別々の自己意識によって区別される一方で、三者は共通な相互意識によって、同じ一つの本性に統合される。4. 三位一体は、この説明によって「非常に明白な、やさしい、わかりやすい観念」である。――は、ギリシア、ラテンの教父やスコラ神学者の教えと一致している、と言う (Sherlock, p. 101.)[303]。――一致していない。教父たちは、シャーロックのこのような言葉、考えが三位一体の説明に適切であるとは考えておらず、シャーロックの考えを支持してはいない。教父たちは、神の Persons の統一は、その本性、本質、実体の統一にあると考えていた。4 に関しては、教父たちは、三位一体は人間の理解を越えており、言葉で言い表わすことのできない神秘であると考えていた。シャーロックも別のところでは、「自然の中に例のない偉大な神秘」(Sherlock, p. 106.)、「それを表わす適切な言葉がない」(Sherlock, p. 139.) と言っている。それでは、三位一体は「やさしい、わかりやすい観念」であるとは言えない[304]。

VI. 普遍 Catholick 教会[305] (正統の教会[306]) が三位一体に関して長年にわたって持ち続けてきた考えはこうである。

唯一つの神が居られる。そこでは神の三つの別々の存在様相 Modes of Subsistence（あるいは関係 Relations）により、三つの Persons（ヘブライ書 1：3. による言葉）父、子、聖霊が区別されてある。各 Person は、自分の中に存在である神、分けることのできない神

300) South, V, pp. 119-130. Cf. South, VII, pp. 170-171. XII, p. 377.
301) South, V, pp. 131-143.
302) South, VI, p. 163. Cf. South, V, p. 143. VIII, p. 239. XII, p. 374.
303) South, VI, pp. 144-145. Cf. South, VII, p. 170. pp. 229-230.
304) South, VI, pp. 148-168. VII, pp. 169-237. Cf. South, XII, p. 377.
305) South, VIII, p. 246. p. 247. p. 280. p. 281. p. 283.
306) South, VIII, p. 283.

の本性全体を含んでいる。神の三 Persons の関係を作る「神の内的行ない」は、1．父が子に神の本性を伝える Generation, 2．子が父から神の本性を受けとる Filiation, 3．父と子が聖霊を生み出す Spiration, 4．聖霊が父と子から神の本性を受けとる Procession である。この四つの行ないの内実は、人間の理性には理解できない神秘である[307]。

この考えを支持している言葉として、サウスは、ギリシアの教父、教会会議(Chalcedon [451], 第 2 Constantinople 553, 第 3 Constantinople 681, Quini - Sext [Trullo 692], Florence [1439]) 教令、ラテンの教父、スコラ神学者、近代の神学者、信仰告白（アウグスブルク、ヴィッテンベルク、ガリア［フランス改革派教会］、ベルギー）からの引用を挙げて、そこには「自己意識」「相互意識」という言葉やそれに基づく説明はないことを指摘している[308]。

この考えに対するシャーロックの反対論について。

1．存在様相は、非本質的特質 Accidents と同じく、神の中にはない（Sherlock, p. 47. p. 84.)。従って、それは神の Persons を作りあるいは区別しない。——存在様相は、非本質的特質とは別のものである。存在様相が神の中にないならば、神の中に Persons はありえない。

2．神の三つの存在様相は、一つの神の三つの名とほとんど違わない。これはサベリウス Sabellius の異端である（Sherlock, p. 83.)。——存在様相と名とは大いに違うものである。前者はそのものの本性に基づいているけれども、後者は名を付ける者の意志に基づいている。「ほとんど違わない」は、違いがあるということであり、この違いは三 Persons を区別するのに十分である。

3．神の三つの Persons は三つの存在様相ではない。Persons のそれぞれは現実の Person である(Sherlock, pp. 83-84.)。——Persons は存在様相ではない。それぞれの Person は神の本性、神であり、それは存在様相によって区別される。「父は自分の本性を、自分の中にあるものとは別の存在様相の下で、他者にコミュニケートする。このように独自な仕方でのこのコミュニケーションは、子を［永遠に］生むと呼ばれるにふさわしいものである。」[309]

この後サウスは、哲学、神学におけるシャーロックの主張の矛盾[310]、綴り、用語、文法

307) South, VIII, pp. 239-247. p. 283.
308) South, VIII, pp. 252-283.
309) South, VIII, pp. 283-293.
310) South, IX, pp. 294-328.

の誤り[311]、シャーロックの論述態度[312] を批判している。論述態度に関しては、論争相手に対する傲慢無礼――ここでは、William と Mary に対する臣従宣誓を強く拒否していながら、後に臣従宣誓したシャーロックをハザエル（列王記下 8：7-15.）の「心変り」になぞらえて批判した相手［Thomas Brown, *The Case of Allegiance to a King in Possession*, [London], 1690.］に対する「はなはだしく憎悪、恨みに満ちた」批難[313] を「不誠実、野蛮、反キリスト教的」と批判している[314]――、教父やソッツィーニ派よりも自分はすぐれているとする自賛、自分に反対する者、異なる考えの者に対する軽蔑を批判している。

結びの章でサウスは、他人の信仰のつまづきとなるシャーロックのこのような考えは、聖職者総会議 Convocation によって批難されるべきであることを付け加えている[315]。

シャーロックは、(anon.), *A Defence of Dr. Sherlock's Notion of A Trinity in Unity, In Answer to the Animadversions upon his Vindication of the Doctrine of the Holy and ever Blessed Trinity. With a Post-Script Relating to the Calm Discourse of a Trinity in the Godhead. In a Letter to a Friend*, London, W. Rogers, 1694. でサウスの考えをサベリウス主義 Sabellianism と批判して自説を弁護した。サウスは、(anon.) a Divine of the Church of England, *Tritheism Charged upon Dr Sherlock's New Notion*

---

311) South, X, pp. 329-345. pp. 350-355.

312) South, XI, pp. 356-373.

313) William Sherlock, *The Case of the Allegiance Due to Soveraign Powers, Stated and Resolved, According to Scripture and Reason, and the Principles of the Church of England, with A more particular Respect to the Oath, lately enjoyned, of Allegiance to Their Present Majesties, K. William and Q. Mary*, London, W. Rogers, 1691.

シャーロックは本書で概要次のように論じて、William と Mary に対する臣従宣誓を拒否していた自分が、考えを変えて臣従宣誓を行なったことの弁明をした。

Bishop Overall's Convocation Book, MDCVI, concerning the Government of God's Catholick Church and the Kingdoms of the Whole World, Walter Kettilby, 1690. (John Overall (1560-1619) は、1614 年 Coventry and Lichfield 主教、1618 年 Norwich 主教) に収められている、大主教 Bancroft の下での 1603-1610 年の Convocation 制定法 28 条には、統治の権威が合法の統治者から不正や暴力によって簒奪された場合でも、新しく打ち立てられた統治は、完全に確立した時には神の権威によるものであるから、それに従うべきである、とある。これは「イングランド教会の教え」であり、理性と聖書（ロマ書 13：1-2.）の示すところである。また、「この国の法律は、［合法の権利がない場合でも］事実上の国王に対する忠誠を認め、要求している」というのが、この国のすぐれた法律家 Coke, Hales, Bridgman らの考えである。従って、神（の摂理）によって王位につけられた国王、即ち、現実に王位にある国王に対しては、彼に王位につく合法の権利があるかないかに関わりなく――神は人間の法には縛られず、神の法は人間の法に優先する――、臣民は忠誠の誓いを（要求されれば）立て、従うべきである。但し、「われわれは、法に反して、即ち、国王が不法な手段で法律、自由、合法の国教を覆す時に、［人間の法に従い、簒奪に加担すべきではないけれども］国王を守る義務を持ってはいない［「最近の革命」を見よ］」。しかしこれは、簒奪された国王が復位を試みることを禁ずるものではない。また、残余議会、護国卿、安全委員会の簒奪に反対した人々は間違っていたわけではない。この簒奪者たちの統治はしっかりと確立していなかったからである。この考えはホッブズ主義 Hobbism と同じではない。ホッブズは、力が支配権を与えると言っている。私は、統治はこの世の主、神が与える権利に基づいている、力は神が権利を与えたことの印にすぎないと言う。［シャーロックは、統治者の権利を全能の神の意志に基づかせて、法による正当性を全く考えていない点では、ホッブズとは違うけれども、自分が生き続けたいという欲求に基づく行為を正当として、それ故に事実上の統治者への服従を正当としている点では、ホッブズと同じ考えである。］

サウスは、「王位を奪われた国王を復位させることができる手は、どんなことでも書くことができる」(South, X, p. 350.) と書いている。

314) South, XI, pp. 357-358.

315) South, XII, p. 377.

of the Trinity. And The Charge made good, in an Answer to the Defense of the said Notion against The Animadversions upon Dr. Sherlock's Book, Entituled, A Vindication of the Doctrine of the Holy and ever Blessed Trinity, &c., London, John Whitlock, 1695. でこれに反論して、シャーロックの考えを三神論と批判した。他の者も二派に分れてこの論争に参加し、ユニテリアンもこの論争を機会に、三位一体論を批判し、唯一神論を展開した。

サウスの考えは、信仰、寛容、政治に関してはロックの考えとは大きく違っていたけれども、認識論においては、神及び神に創造された世界に対する人間の理解の不完全、完全ではない知識の存在、理性と啓示・神秘の両立を認め、存在様相の基には存在があり、存在様相と名とは違うと考えるなど、両者に共通する考えが多い。

サウスは後に、遅くとも Christ Church 以来の友人であるロックから、スティリングフリートに対するロックの返答の書物を贈られた御礼の書簡の中で、これらの書物、更には『人間知性論』におけるロックの考え、議論を高く評価し、スティリングフリートの理解が粗く、ずさんであることを痛烈に批判して、次のように書いている。

『ウスター主教への書簡』*LBW* に対する御礼の書簡（1697年3月25日付）では、「思慮分別のある読者であれば誰でも、あなたの方が、論争相手が彼の議論でやっているよりも、あるいは、ひょっとしたら彼の力でできるよりも、ずっと注意深く、回答はより的確、明確であると認めるにちがいありません。」[316]『返答』*RBW* に対する御礼の書簡（1697年9月22日付）では、「（創造されたものものの）共通の本性が、それを基に名付けられたそれぞれの個体の中に現実に存在している」［*DDT*, pp. 253-254. Cf. *LBW*, pp. 72-74.］と考えるスティリングフリートを批判して、「共通の人間性」のようなものは現実には存在せず、「心がそれぞれの特定のもの、個体の中に認める一致を基に作り、取り出した観念にすぎない」、更に、「［「非常に大きな価値と非常に独自な個性ある作品」『人間知性論』が「われわれの母国語という狭い範囲の中に閉じこめられる」ことなく］ラテン語に翻訳されて、この世の人々がこのように包括的な主題の恩恵を包括的な言語で受け取ることができるようにと心から願っています。」[317]『返答II』*RBW2* に対する御礼の書簡（1699年6月18日付）では、「あなたの思考、推論の綿密さ、すばらしい聡明さ、厳密さは、スティリングフリートのようなずさんな書き手を、あなたのような論争者には非常に不釣合な相手にして

316) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 6, Letter No. 2229.
317) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 6, Letter No. 2314.

しまう」、だから、「[スティリングフリートは]自分に絶対にできないことを期待される前に死んだことで、せざるを得ないことを美徳としたのだと思います。」とりわけ、「神の全能の力によって、神が適切と考えられていたならば、物質が考える力を付け加えられていることがありうるということに関する議論［*RBW2*, pp. 461-471.］のところで、あなたは彼を普通を越える仕方で窮地に追い詰めている、と私には思われます。」「あなたは[初版] 420-430 頁［*RBW2*, pp. 475-483.］でスティリングフリートに対して、彼は神の証言の信頼性をそれに先立つ理性の証拠に（少なくとも大きく）基づかせているということを明白に証明しています。」更に、「[『返答II』は］あなたが書いた中で最も厳密な書物の一つであり、『人間知性論』を措けば、並ぶものがないと言ってよい」、続いて改めて『人間知性論』のラテン語訳を「理性に基づく学問とあなた自身の名声のために極めて役に立つ」として勧めている[318]。

更に、1704 年 7 月 18 日付サウスのロック宛書簡では、Sherlock, *A Discourse concerning the Happiness of Good Men, and the Punishment of the Wicked in the Next World*, 1704. に収められた 'A Digression concerning Connate Ideas, or Inbred Knowledge' におけるロック『人間知性論』批判に言及して、「非常に浅薄な書き手」シャーロックがロックのとりわけ生まれつきの観念否定を批判して、ロックが無神論へと向かう強い傾向を持っていると主張していることへの反論を要請している[319]。

シャーロックのこのロック批判は、1697 年の初め頃に彼が説教の中で述べた議論と同じものである。ロックは、この説教でのロック批判に関して、ウィリアム・モリニュ William Molyneux 宛書簡（1697 年 2 月 22 日付）で、「御存知のようにシャーロック博士というなかなかに名のある方が、生まれつきの観念はないという私の説に対する反論を法学院（テンプル）の説教壇から公然と述べられて、私が聞いたところでは、この説は無神論にも等しいと批難された」と書いている[320]。

1704 年には、サウスよりも早くにアンソニ・コリンズ Anthony Collins がロック宛書簡（1704 年 6 月 13 日付）で、「シャーロック博士は、2，3 日のうちに出版される書物の中で、[生まれつきの観念はないという『人間知性論』の考えを] 彼が以前に批判した説教の一部を印刷しています」と書くとともに、シャーロックの批判の一部――人間の心が神の心をかたどって作られたのであれば、創造以前に神の心にあった物々の観念は人間の心に

318) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 6, Letter No. 2597. Cf. *Do.*, Letter No. 2645 (1699. 12. 6).
319) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 8, Letter No. 3591.
320) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 6, Letter No. 2202.

もある、など――を伝えている[321]。ロックは、アンソニ・コリンズ宛返書（1704年6月19日付）の中で「私は、私の中にある考える力を心 *mind* と呼んでいますが、しかし、その名の故にそれを、正しい明確な概念がないために心 *Mind* ともあるいは永遠の心とも呼ばれている無限の、理解不可能な存在に何らかの点でなぞらえるあるいはその存在と同じものとすることはできません。」と書いている[322]。しかし、ロックはシャーロックに対する反論は書かなかった。

15. スティーヴン・ナイ（匿名）『三位一体の説明の考察』1693.

スティーヴン・ナイは、Stephen Nye (anon.), *Considerations on the Explications of the Doctrine of the Trinity, By Dr. Wallis, Dr. Sherlock, Dr. S-th, Dr. Cudworth, and Mr. Hooker; as also on the Account given by those that say, the Trinity is an Unconceivable and Inexplicable Mystery. Written to a Person of Quality*（『ウオリス博士、シャーロック博士、サウス博士、カドワース博士、フッカー氏による三位一体の教えの説明、また、三位一体は考えることができず、説明することができない神秘であると言う人々の説明の考察。さる高貴の方に宛てて書かれた。』), 1693.（*N4* と略記する）で、聖書は「ただ一つの神の礼拝と信仰を打ち立てようとしている」[323]と主張し、三つの全能の Persons 即ち神がいるという三位一体論者の考えを六つの型に分けて提示し、批判した。

1. Wallis 「神の Persons は、被造物に対する神の三つの様相、関係にすぎない」――キケロ流の三位一体論、「巧妙なサベリウス主義」、ユニテリアンと変らない考え[324]。2. Sherlock 三 Persons の相互意識により、神は一つとなる――デカルト流三位一体論、三神論[325]。3. Cudworth 三 Persons は別々の実体で共に永遠、共通の本性、本質をもつが、対等ではなく、父が他の二者の源、原因であり、二者の頭である、第二、第三の Persons は、権威、力などにおいて第一の Person に劣り、万能の第一の Person の下で同じ行為を共に行なう（これが本当の三位一体論であり、スコラ哲学者らの考えは名目の三位一体論である）――プラトン流三位一体論、穏健アリウス派[326]。4. S-th 三 Persons の実体は一つ、

321) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 8, Letter No. 3558.
322) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 8, Letter No. 3565.
323) *N4*, p. 3.
324) *N4*, pp. 7-10. p. 32.
325) *N4*, pp. 10-13. p. 32.
326) *N4*, p. 11. pp. 13-19. p. 25. p. 32.

三 Persons は存在ではなく神の三つの存在様相――アリストテレス流三位一体論、Peter Lombard に始まるスコラ哲学者の考え、第 4 ラテラノ公会議（1215）により承認された、教会正統派の考え（さまざまな属性の三位一体を考えるのは、この型に含まれる）、ソッツィーニ派に近い[327]。5．Hooker 「神の実体は、無から生ずるというこの属性を伴うと、父の Person を作る。数の点で全く同じ実体が父から生ずるというこの属性を伴うと、子の Person を作る。同じ実体にこの二者から生ずるという属性が付け加わると、聖霊の Person を作る。」――表現が不正確であり、また、矛盾を含んでいる。これらの属性は、Person を作る属性ではなくて、Person を父、子、聖霊とする（三者の関係を作る）属性である（また、父の属性は、能動的に生み出す属性である）。同じ一つの実体が「無から生ずる」とともに「父から生ずる」というのは矛盾。父が子の実体を生んだのであれば、父は自分の実体を生んだことになる。「子を生んだ」ということは、「無から生ずる」（生まれるということがない）という父の実体を破壊する[328]。6．一般民衆 the Mobile の三位一体 「三位一体は説明できない神秘」という神秘的三位一体、一般民衆は、聖書の改竄された写本や間違った翻訳を基にして、三位一体は聖書の教えである、しかし、人間には理解できない、が信ずることが（自然の中の多くのことを理解できないけれども信じているように）必要な神秘である、と言われている。――「サマリヤ人の信仰」、三位一体は明確な矛盾であって、神秘ではない（不条理あるいは矛盾することは、神秘ではない（South, p. 3.））、実体変化［教皇派］や両体共在 Consubstantiation［ルター派］を擁護するのと同じ神秘擁護の議論を認めることはできない。自然の神秘を認めるのは、それの疑いえない証拠を見るからである[329]。

この後でナイは、Fulwood, Edwards のソッツィーニ主義批判に対して、不誠実な言いがかりであるし、神に偶然の出来事の予知や本質、Person での遍在を否定する考えは三位一体論者にもある、と反論し、Baffet の『ユニテリアン略史』批判に対して、無知、誤解に基づくものである、と主張した[330]。

327) *N4*, p. 11. p. 13. pp. 19-26. p. 32.
328) *N4*, pp. 26-29. p. 32.
329) *N4*, pp. 29-32.
330) *N4*, pp. 32-33.

16. ジョン・ハウ『三位一体の可能性』1694.

国教反対派の聖職者ジョン・ハウ John Howe (1630-1705. Loughborough, Leicestershire に生まれる。1647年 Christ's College, Cambridge に特待免費生 sizar として入学、Cudworth, More らと交わった。1648年 BA を得て、Oxford に移り、Thomas Goodwin 主宰の集会のメンバーであった。1650年 BA, Magdalen の chaplain, 1652年 MA 取得、Magdalen の fellow (-1655), Winwick, Lancashire の聖職者とされた。1654年頃 Great Torrington, Devonshire の終身 curate。1656年 Cromwell の私的 chaplain, Cromwell 死後 Richard Cromwell の chaplain (1659年5月の Richard 廃位まで)。1660年説教の中での暴動教唆の廉で裁判にかけられたが、証拠がなく告発は取り下げられた。しかし、1662年 Uniformity Act により Torrington から追放された。1666年 Five Miles Act により規定された宣誓を行なって、行動の自由を得た。1670年 Dublin に行き、John, second viscouut Messereene の私的 chaplain となる。1675年 Haberdashers' Hall, Cheapside での長老派集会の牧師の一人として、London に呼び戻された。1677年に出版した *The Reconcileableness of God's Prescience* をきっかけに、預定説と教会包容をめぐる論争が起こる。1685年 Philip, fourth baron Wharton とオランダに行き、Utrecht に滞在。1687年5月ロンドンに帰り、名誉革命時には、国教反対派聖職者の先頭に立って William を歓迎した。Toleration Act が成立すると、国教徒と国教反対者との相互寛容を呼びかけ、とりわけ長老派と会衆派 Congregationalists の融合に努力した。しかし、Tobias Crisp, *Christ Alone Exalted* 再出版が引き起こした論争の結果、この融合は失敗に終った(後述)。1700年には、Corporation and Test Acts の下で国教反対者が官職に就くためにイングランド教会の儀式に従いサクラメントを受ける「その場限りの国教遵奉 Occasional Conformity」を支持して、Defoe との論争が始まった。) は、匿名で (anon.), *A Calm and Sober Enquiry Concerning The Possibility of A Trinity in the Godhead: In A Letter to a Person of Worth. Occasioned by the lately Published Considerations on the Explications of the Doctrine of the Trinity: By Dr. Wallis, Dr. Sherlock, Dr. S-th, Dr. Cudworth, &c. Together with Certain Letters (hitherto unpublished) formerly Written to the Reverend Dr. Wallis on the same Subject* (『神における三位一体の可能性に関する平静、冷静な探究。人格すぐれたある方への書簡。最近出版されたウォリス博士、シャーロック博士、サウス博士、カドワース博士らの三位一体の教えの説明に関する考察をきっかけとして書か

れた。同じ主題について尊師ウオリス博士に対し以前に書いた（これまでに出版していない）幾つかの書簡を付す。』), London, Tho. Parkhurst, 1694. を出版して、神において父と子と聖霊は互いに区別できるものであって、しかも、そのそれぞれが神であり、「唯一の神だけがおられる」という真理と調和するということは可能である[331] と論じ、表題にある Stephen Nye (anon.), *Considerations on the Explications of the Doctrine of the Trinity, By Dr. Wallis, Dr. Sherlock, Dr. S-th, Dr. Cudworth, and Mr. Hooker*, 1693.（上述）の「それは不可能である」、「不条理、矛盾である」(*N4*, pp. 29-30.) という主張に反論した[332]。あわせてその議論の中で、Sherlock の「相互意識」論を批判した。

ハウの議論の要旨は、次の通りである。

前提 1.「父、子、聖霊は、同じ点で三つであり、また、唯一である」と言うのではない。「神という点では唯一つで、他の点では三つである」ということである。前提 2. このことは「可能である」と言っているのであって、「絶対確実である」と言っているのではない[333]。

神の存在は必然である。他の物、即ち、創造されたものの存在は偶然、即ち、神の御心による（ヨハネ黙示録 4：11.)。(I) 神は［限りなく、また、あらゆる点で］完全である。(II)[334]

神の明確な言葉は、神の中には三者があり、それらは互いに区別されるものであるということを示している。(III) 神の本性について人間は多くを知らないにもかかわらず、神に三者の区別はありえないと言うことは、傲慢である。この三者の区別は、同じく聖書に言われており理性によって論証できる神の統一 Unity, 単一 Simplicity と矛盾しない。(IV Cf. XI) 人間の中にも複数の別々の本性（例えば、心とからだ）があって、それが結び合わさって「人間の本性」、「一人の人間」を作っている。(V) このことが人間において可能であれば、神においても同じことは可能である。(VI VIII－IX XV－XVII)［従って］三者の区別がありながら一者であるような統合 Union は、本質的に、それ自体として不可能ではない。(VII) 受肉における人間の本性と神の本性の統合も、この点では同じことである。(X)[335]

神についての、啓示されていない、また、[理性によって]論証できないことをせんさく

331) Howe, pp. 1-2. Cf. Howe, pp. 7-8.
332) Howe, pp. 2-4.
333) Howe, pp. 6-7.
334) Howe, pp. 8-10.
335) Howe, pp. 13-27.

しすぎないよう注意すべきである。(XI Cf. IV) 神においては、力、知恵、慈愛は同時に存在しており、それらは相互に浸透し合い、被造物における以上により近しい、より完全な統合によって本質的に結び合わされている、ということには何の矛盾も、不条理もない。(XII) しかし、これは、先に存在していた構成要素が結び合わされて神が作られたという、神における合成を言っているのではない。むしろこれは、神の本質は人間には理解できないことを示している。(XIII)[336]

これはSherlockと同じ考え（三神論）(Cf. Sherlock, p. 69.) ではないか、と言う人があるかもしれない。しかし、これは、聖書に言われている父、子、聖霊の区別を主張しているだけである。聖書に言われていないことを主張しているのではない。(XIV) 聖書には、神には父、子、聖霊の三者の区別があり、この三者は一つである(ヨハネ第一書5：7. ヨハネ伝10：30.)と言われている。区別がありながら統合があるということは、人間において可能であるから、神においても可能である。(XV XVI Cf. V-VI XVII) この「自然の、永遠の統合」を無視して、「せいぜいその結果にすぎない相互意識」を主張するのは[Sherlock]、神においてはそれら区別ある三者が統合された一者として永遠に存在しているということを見落している。三者は区別がありながら、必然の統合により一つであり、一つの神の中で三者は相互にコミュニケートしている。(XVII) 父、子、聖霊には、(時のではなく、本性の)順序がある。父が第一、子は父から、聖霊は父と子から出る。(XVIII)[337]

「一個の、必然的に存在する、霊の者だけが神である」、三つの別々の者は「三つの別々の神」である、と言われるかもしれない。――「一個の、必然的に存在する、霊の者」は、父、子、聖霊を含んでおり、神としては同じ一つの本性を持っている。(XIX) また、「神は父、子、聖霊を含み、更にこの三者に共通な神を含んでいる」と言っているのでもない。父、子、聖霊が結び合わさったものが神である。(XX) 「[公正、調和、相互満足、喜びを備えて] そのように完全に和合しあう父、子、霊の間に [そのような統合から] 生ずる最も心地よい交わり *delicious society*」、「神の至福 *Divine Bliss*」をわれわれは考えることができる。(XXI XXII)[338]

聖書には、三位一体が多くの個所(創世記1：26. 箴言8：22-29. イザヤ書9：6. ヨハネ伝1：1-14. 3：31. 10：30. ロマ書9：5. [マタイ伝28：19.] ヨハネ第一書5：7. など)に明確に書かれている。(XXIII) ソッツィーニ派が現われるまで1500年間、キリスト教会

336) Howe, pp. 28-38.
337) Howe, pp. 38-49.
338) Howe, pp. 50-59.

の人々が聖書によって欺されつづけてきたということはありえない。(XXIV) われわれが基にしている聖書写本が、また、その翻訳、説明が間違っていると、証拠もなしに、自分の考えに反するが故に主張する者は、非常に僭越である。(XXV)[339]

父が神であり、子、聖霊が神であるということは不可能であると主張する者［ソッツィーニ派］は、傲慢にも神の本性についてすべてを知ることができると考えている。(XXVI) 人間の心が無限を理解することは不可能である。無限については、その人間の心の限界の中で［聖書の明確な言葉の中に、あるいは、事実の中に］見出すことができる観念でわれわれは満足すべきである。スコラ哲学者が探究した Person, 実体 Suppositum などという観念に関わる必要はない。(XXVII Cf. XXIX Letter I p. 98.) しかし、神の中の三つの Persons の様相の modal 区別に不条理、矛盾はない。この考えに従えば各 Person は別々の本質を持つはずであるということは、被造物については真実であるけれども、神については必ずしも真実ではない。(XXVIII) 人間が理解できないことについて、自分の理解に従わないからといって他の人間を批難するのは、おかしい、こっけいなことである。(XXIX)[340]

後書には、Wallis 宛匿名三書簡（1691 年）が印刷されている。

第一書簡には、大要次のことが書かれている。

1．唯一つの神がおられる。

2．父、子、聖霊は、聖書に言われている別々の属性に応じて、十分に区別される。

3．person という言葉は、神について、人間についてと同じように、「知性ある実体 intelligent hypostasis」という意味で言うことができる。

4．即ち、神の中には三つの別々の「知性ある実体」がそれぞれ別々の独自な本性を持つものとして存在する、と言える。言い換えれば、神には「三つの *Persons* の［三つの別々のもの、実体、霊でありながらの］自然の結合」がある[341]。従って、「神の *Persons* は、現実に別々の三つの存在である」(Sherlock) は、「三つの別々の本質 Essences がある」ということになる（Wallis 第七書簡）としても、それ故に三神論になるとは言えない[342]。

5．hypostasis には、Wallis がヘブライ書 1：3. に関して言っている person (*W1*, p. 3.) を越える意味がある[343]。

339) Howe, pp. 59-67.
340) Howe, pp. 68-78.
341) Howe, p. 121. Cf. Howe, pp. 112-118.
342) Howe, pp. 110-111.
343) Howe, pp. 125-126. Cf. Howe, pp. 101-103.

第二、三書簡（1691年12月）は、Wallisの第八書簡草稿が、私の第一書簡（上述）の意図はSherlockの上述の表現の弁護である、と言っているのは誤解である（私はSherlockの主張を批判している）（Letter II, III）として、自分の書簡への言及の削除を求めている（Letter III）[344]。

Sherlockは、(anon.), *A Defence of Dr. Sherlock's Notion of A Trinity in Unity*, 1694. の後書の中でHoweのこの書のSherlock批判に反論し、Howeは、(anon.), *A Letter to a Friend, Concerning a Postscript to the Defence of Dr. Sherlock's Notion of The Trinity in Unity, Relating to The Calm and Sober Enquiry upon the same Subject*, London, Tho. Parkhurst, 1694. でこれに反論した。

17. 匿名『名目、現実三位一体論者に関わる論説』1695.

スティーヴン・ナイは、上述のパンフレット*N4*に引き続き、(anon.), *Considerations on the Explications of the Doctrine of the Trinity. In a Letter to H.H.*（『三位一体の教えの説明の考察。H.H.宛書簡』), 1694.（*N5*と略記する）を出版して、カンタベリ大主教John Tillotson, ウスター主教Edward Stillingfleet, ソールズベリ主教Gilbert Burnet, グロウスター主教Edward Fowler, John Howe, Robert Southの三位一体に関わる説教、著作を検討し、批判した。

匿名ユニテリアンのパンフレット(anon.), *A Discourse Concerning the Nominal and Real Trinitarians*（『名目、現実三位一体論者に関わる論説』), 1695.（*NRT*と略記する）は、ナイ『三位一体の説明の考察』*N5*に従い三位一体論を名目と現実の三位一体論に分けて提示し、ユニテリアンは、考えの基本において自分たちと一致している名目三位一体論者の主張の中の誤りを正して、信仰の改革を更に推し進めようとしていると、次のように主張した。

三位一体論者は、三位一体に関して互いに対立しあっている。大多数の三位一体論者は、神とキリストのPersonとに関しては、ソッツィーニ派と同じ考えの名目三位一体論者で

344) Howe, pp. 128-134. Cf. Howe, pp. 88-89.

ある[345]。

［第四］ラテラノ公会議（1215）は、名目三位一体論の教えを定め、修道院長ヨアキム Joachim の現実三位一体論（三つの神 Persons が現実にいる）を「異端、狂気」と宣言した。この公会議は、1200 人の教父とさまざまな地域の代表者を集めて、まさに「普遍教会を代表する」公会議であった。従って、この公会議が定めた教えは、教会の基本的な考えである。その後の神学者も、この公会議の教えに従い、名目三位一体論である。名目三位一体論者は、神は、存在する実体としては一つの Person である、神の本質、実体は一つ、神の知性、力、意志も一つである、と考える点で共通の考えを持っている[346]。

名目三位一体論には、三つの Persons は何かについては幾つかの異なる考えがある。1．神は、その三つの外的行ない（創造、贖罪、聖化）に従い、古代ギリシア、ラテンの人々が使っていた形而上の意味で、例えば他者との関係において、一人の人間が王、夫、父であるように、三つの Persons である。しかし、現実は一者である。［Wallis『第三書簡』*W3*, pp. 41-42. pp. 62-63.］2．神の本源の心 Mind とそれの二つの内的行ない、「自らを知る」、「自らを愛する」働きが三つの Persons である。3．神の三つの属性（慈愛、知恵、力）が三つの Persons である。4．神は一つの実体、霊、存在であり、神には一つの知性、意志、力がある。この神の実体には、（生まれることがなく）生む to Beget, 生まれる to be Begotten, 出て来る to Proceed という三つの内的相互関係様相がある。これが神の三つの Persons, 父、子、聖霊である。（South, Hooker）　5．神の実体、本質、本性は一つ。従って、神の Person は一つ。父、子、聖霊は、被造物に対する神の働き（創造、キリストにおける働き、あらゆるものを作り出す力）に従ってつけられた神の三つの名にすぎない。（古代の Noetians 及び Sabellians.「同質」という言葉を考え出した第一ニケア公会議［325］の考えも同じ）[347]

これらの名目三位一体論者、教会の人々の考えは、内容即ち言おうとしていることの点では、ユニテリアンとほとんど同じ考えである。しかし、「一つの Person が三つの Persons である」などの言葉遣いに問題がある。従って、この考えが受肉、位格統合［イエス・キリストにおける神と人との統合］、贖罪などの説明に使われる時、コモン・センスに従えば訳がわからなくなる。そこで彼等はその教えを神秘と呼ぶことになる[348]。

他方、現実に三つの神がいるという三神論である現実三位一体論者は、二派に分れて互

345）*NRT*, p. 3.
346）*NRT*, pp. 4-7.
347）*NRT*, pp. 7-17.
348）*NRT*, pp. 18-19. Cf. *NRT*, pp. 31-32.

いに相手を批難しあっている。1．神の三つのPersonsは対等であり、共に永遠、全能、全知、遍在である。(Basil, Gregory Nyssen, 380年[第一コンスタンティノポリス公会議が381年に開かれた] 以後の教父、近代の現実三位一体論者のほとんど、Howe, Fowler, George Bull, J.B. [South批判者], Sherlock, Milbourn) 2の考えの人々から、全知、全能の者が三者存在するという三神論Tritheismであると批難されている。2．子と聖霊は、永遠であることを除けば、父に劣り、父に従属、依存している。(Arnobius, Justin Martyr, Origenら第一ニケア公会議以前の人々、Episcopius, Cudworth) 1の考えの人々から、父のみが本当の神であることになるなどと批判されている。名目三位一体論者は、この両者の対立を利用して、現実三位一体論はその両方の考えが共に成り立たないと主張している[349]。

これら現実三位一体論者の考えは、理性、人間共通の体験、物事の自然に反しており、聖書（そこでは、神は常に一つの神である）に反している。即ち、考えの内容自体が矛盾であり、言葉遣いが不適切であるだけの名目三位一体論者以上に大きな矛盾を含んでいる。それ故に彼等の教えは一層神秘と言われている[350]。

ユニテリアン（ソッツィーニ派とも呼ばれている）は、Luther, Calvin, イングランドではCranmerにより始められた宗教改革（それによって教皇派も改革された）が仕残した仕事（なお残っている信仰、道徳の腐敗の浄化）を完成させようとしている。教会即ち名目三位一体論者が言おうとしていることは正しいけれども、彼等が使っている言葉(「三位一体」、「受肉」、「位格統合」、「神はPersons」など)は、聖書に反しており、一般の人々を誤った信仰、つまり三神論の異端（[第四] ラテラノ公会議）に導く。教会は、このような言葉遣いを廃して、真の唯一神信仰に立ち帰るべきである[351]。

18．オックスフォード大学評議会ビンナム異端裁定1695.とウィリアム・シャーロック『オックスフォードの最近の裁定の権威と理由の吟味』1696.

1695年10月28日（St. Simon and Jude祭日）オックスフォード大学St. Mary'sの説教でシャーロックの三位一体に関する考えを述べたジョウゼフ・ビンナムJoseph Bing-

349) *NRT*, pp. 19-30.
350) *NRT*, pp. 31-36.
351) *NRT*, pp. 36-40.

ham (1668-1723. University College, Oxford に入学し、1688 年 BA, 1689 年 fellow。1695 年 fellow 辞任後 Headbourn-Worthy の rector, 1712 年 Havant の rector。主著 *Origines Ecclesiasticae or Antiquities of the Christian Church* (1708-1722)) に対し、大学評議会週会 hebdomadal council (1695 年 11 月 25 日) は、この説教の中の言葉「三位一体には、三つの無限の別々の心と実体がある。」及び「三位一体の中の三つの Persons は、三つの別々の、無限の心あるいは霊、また、三つの個別の実体である。」は、「誤り、不敬、異端であり、普遍教会の教え、とりわけ公に受け容れられているイングランド教会の教えと一致せず、これに反している」と批難した。シャーロックの考えを支持する人々は、これに抗議して、「オックスフォードの長たちが異端、不敬と非難したものこそ、まさに普遍教会の信仰であり、[評議会の]裁定は、ニケアの信仰、イングランド教会の信仰を異端と批難するものであった」と主張した。しかし、ビンナムは fellow を辞任し、大学を去らねばならなかった。Fellow 辞任直後 Dr. John Radcliffe は、彼を Headbourn-Worthy の rector に推薦した。

この裁定を自分に対する批難であると受けとめたシャーロックは、William Sherlock, *A Modest Examination of the Authority and Reasons of the Late Decree of the Vice-Chancellor of Oxford, and Some Heads of Colleges and Halls; Concerning The Heresy of Three Distinct Infinite Minds in the Holy and Ever-blessed Trinity* (『オックスフォードの副学長及びコリッジ、ホールの何人かの長の、神聖にして永久に聖なる三位一体における三つの別々の無限の心の異端に関する、最近の裁定の権威と理由の穏健な吟味』), London, W. Rogers, 1696. (Sherlock *ME* と略記する) で概略次のようにこの裁定を批判し、三位一体に関する自説を弁護した。

1．この裁定の権威について

オックスフォード大学のコリッジ、ホールの何人かの長の裁定は、オックスフォード大学の正式の裁定ではない。また、大学規則に従えば、イングランド教会の教えに反する説教をした者に対しては、その説教者を召喚して、公の場での前言撤回を要求するか、大学内での説教を禁止するかすることになっているけれども、今回このようなことはされていない。

異端の宣告は、イングランド全体の聖職者会議 National Synod に委ねられるべきものである。1 Eliz., c. 1. は、異端の決定、裁定は、「これまでに正典聖書の権威により、あ

るいは、最初の四つの総会議により、あるいは、上述正典聖書の明確、明白な言葉により異端宣告をしたそれ以外の総会議により、異端であると決定、命令、裁定されたことのあるもの、あるいは、今後この王国議会の高等法院 High Court により、公会議 Convocation における聖職者の同意を得て、異端であると命令、裁定、決定されるもの」に限られる、とある[352]。

II．この裁定の理由について

異端と言われている「三つの別々の、無限の心」、「三つの実体」は、「三つの無限の、知性ある Persons」、「三つの無限の、実体である Persons」と同じことであり、後者は普遍教会の正統の信仰である。この三つの心あるいは Persons は完全に切り離された、独立したものであると［アリウス派の如く］言うのは、「誤り、不敬、異端」であるけれども、そういう意味ではない「正統の意味の言葉」を不敬、異端と批難するのは、党派心のなせる業である[353]。

この言葉は聖書にはないけれども、聖書にある正統の信仰を守るために、正統の意味で使われている。それは、ニケア公会議で Homoousion という言葉がアリウス派の異端から普遍教会の信仰を守るために使われたのと同じように、現代において「現実の、実体の三位一体という普遍教会の信仰を［新しい名（ソッツィーニ派）で現われたサベリウス主義から[354]］守るために」使われている[355]。

1．「この言葉は誤りである。」――父、子、聖霊は、それぞれに「独自の、無限の心」であるけれども、「三つの別々の無限の心ではなくて、一つの無限の心、霊、実体である」と言われるかもしれない。「これは、［神の］同質 *Homoousion*, Consubstantiality という意味では、非常に真実、正統である」。しかし、「Persons についてこのことを言うならば、［一つの Person しかないことになり］粗野なサベリウス主義である」。

聖書では、父、子、聖霊は別々の者として書かれている。教父たちもこれに基づいて、「神の統一［神、神の本性は三 Persons において一つである[356]］の中での Persons の現実の、実体としての区別」を証明して、神に一つの実体しか認めないサベリウス主義に対抗した[357]。

352) Sherlock *ME*, pp. 5-7.
353) Sherlock *ME*, pp. 9-11.
354) Sherlock *ME*, p. 16. p. 46.
355) Sherlock *ME*, pp. 11-13.
356) Sherlock *ME*, pp. 29-30.
357) Sherlock *ME*, pp. 14-19.

2．「この言葉は不敬である。」――この考えは、「父、子、聖霊を最も謙虚、献身的な崇敬の心で礼拝させる」。この三者の内に現実の、実体としての区別があると考えずに、三者は一つの実体の「名前、様相、何かあるもの」にすぎないと考えている時に、この三者をそれぞれに神として礼拝することはできない[358]。

3．「この言葉は異端である。」――この考えは、古来普遍教会の教えであって、異端ではない。告発者は、「三神論の異端」であると言う。しかし、「三神論」は、多神論である異教徒や異端者がキリスト教徒に向けた批難であった。Noetus, Sabellius, Arius はこの批難をのがれようとして異端となり、普遍教会から異端であると批難されたのである[359]。

4．「この言葉は、普遍教会の教えと一致せず、これに反している。」――普遍教会の教えは、ずっとこれと同じであった。初期の普遍教会の教父たちは皆、「三位一体における三つの実体の Persons を主張して、一つの実体の Person しか認めない、三つの名前はそれの別個の現れに対応したものと考える、サベリウスの異端に対抗した。」一方、「アリウスに対抗して、神の一つの実体［子、聖霊は父と同質］を主張した。」[360]

5．「とりわけ公に受け容れられているイングランド教会の教えに反している。」――ニケアの信仰は、「現実の、実体の三位一体」を主張している。コリッジの長たちは、アタナシウス信条の「父は全能、子は全能、聖霊は全能である。しかし、それらは三つの全能ではない、一つの全能である。云々」を考えているのかもしれないが、アタナシウス信条は、「三つの心、三つの実体」と言ってはならない、とは言っておらず、むしろこのことを認めている。「同じ神の本性は、父から子にコミュニケートされ、父と子から聖霊にコミュニケートされて、分けることのできない一つの全体として」しかし、現実に存在している三つの心、実体の中に別々にある[361]。

こうして「彼等［コリッジの長たち］は、イングランド教会の信仰である普遍教会の本当の信仰、ニケアの信仰そのものを異端であると批難したのである。」[362]

カンタベリ大主教 Tenison は、自分が作成した大主教、主教宛の指示がそれぞれの主教区で公示され、実行されるよう国王が命ずることを William 3 世に要請し、Tenison 作成の次の国王命令が 1696 年 2 月 3 日に出された。

358) Sherlock *ME*, pp. 19-22.
359) Sherlock *ME*, pp. 24-26.
360) Sherlock *ME*, pp. 30-33.
361) Sherlock *ME*, pp. 44-46.
362) Sherlock *ME*, p. 46.

説教をする者は、三位一体に関して、聖書に含まれており、三つの信条と39箇条に一致するもの以外の教えを述べてはならない。この教えを説明する時には、新しい言葉をすべて注意深く避けて、教会で普通に使われてきた説明の仕方に限ること。説教をする者同士の公の場での対立、とりわけいかなる人に対してであれ烈しい批難、口汚い言葉を禁止している教会法53条を注意深く守ること。これらの命令は、著作者にも適用される。また、聖職者以外でも、三位一体に関わる教会の信仰に反することを話し、論ずる者、三位一体に反対する書物、パンフレットを書き、出版し、あるいは配布する者にも適用される。聖職者は、自分の権威その他あらゆる手段を使って、このような常軌を逸する行ないを抑え、やめさせるよう努めること[363]。

19. ジョン・スミス『ソッツィーニ派論争に終止符を打とうとする』1695.

時計師ジョン・スミス John Smith は、John Smith, *A Designed End to the Socinian Controversy: Or, a Rational and Plain Discourse to Prove, That no other Person but the Father of Christ is God most High*（『ソッツィーニ派論争に終止符を打とうとする。キリストの父だけがいと高き神であることを証明する、理性にかない、明白な論説』), London, 1695. は、父なる神が唯一の神であり、キリストは人間であると、聖書と理性を基に論じ、このような明確な議論が示されても三位一体の神に固執する者は救われない、と概要次の通り主張した。このパンフレットは押収され、著者は逮捕された（詳細不明)。

「他のすべてのものの本源の最初の原因である一つの永遠の心、本質、霊の力」である神がおられることは、それに存在を与える他のものがありえず、また無からは何も生じないことから明らかである。神は無限であり、神の本質はこの世を越えて無限である。従って、神はその本性、本質において一つであり、Person においても一つである。神の本性に幾つかの Persons があるならば、そのそれぞれが無限、全能、最高知でなければならない。これは不可能なことである。神であるこの唯一の Person はイエス・キリストの父であることは、聖書に明確に書かれている[364]。

多くの宣誓告白したキリスト者が、神には複数の Persons があり、神の子イエス・キリ

363) Joshua Toulmin, *An Historical View of the State of the Protestant Dissenters in England* (1814) in Victor Nuovo (ed.), *John Locke and Christianity Contemporary Responses to The Reasonableness of Christianity*, Thoemmes Press, 1997, pp. 117-118.
364) Smith, pp. 5-10.

ストも神である、と信じている。しかし、神の子が神であるということは、コモン・センスに反している。キリストは神ではないことは、聖書に次のように書かれていることから明らかである。1．キリストの上に神がいることをキリストも使徒も認めている。2．キリストが行なったことは、神から受けた力によってである。彼が言ったことは、神が言うようにと命じたことである。3．神とキリストは明確に別々の Person である。また、聖書には、キリストは人間であることが明確に書かれている。キリストについての最初の頃の告白は、「キリストは神の子、この世の救い主である」ということである（ヨハネ伝3：2. 11：27. マタイ伝14：33. 16：16. 使徒行伝8：37. 18：5. ヨハネ第一書4：14.）。そこには「三位一体」、「神-人」、「位格統合」などの言葉はない。キリスト者に救いを与える信仰は、「イエスは神の子である」（ヨハネ伝20：31. ヨハネ第一書4：15. 5：5.）、「神はイエスを死者の中からよみがえらされた」（ロマ書10：9.）ということである。イエス・キリストは、「神と人との間の仲介者」（テモテ前書2：5.）、「全世界の罪を償うもの」（ヨハネ第一書2：2.）、「神は御子によって万物を御自分と和解させられました」（コロサイ書1：20.）、「［イエス・キリストの］ほかのだれによっても救いは得られません」（使徒行伝4：12.）、「［キリストは御自身の血によって贖いを成しとげられた後］今やわたしたちのために神の御前に現れてくださった」（ヘブライ書9：24.）、「［イエスは最後の日に］生きている者と死んだ者との審判者」（使徒行伝10：42.）ということが聖書の教える、キリストについての基礎の信仰である[365]。

イエスは人間である。しかし、人間の中で最もとびぬけてすぐれた（「死と悪魔を完全に征服した」）者であり、天使以上の（「今神の右に座っており、最後の日に人間を裁く」）地位を神によって与えられた。キリストを神とあがめることは、事実に反する栄光をキリストに与え、神の威信を損なうことである。最後の日にこのような事実に反するあがめの故に報いが与えられるということはない。「キリストを正真正銘の救い主、即ち神の子と認め、その福音をゆるぎなく信じ、またそれに従う者だけがキリストを本当にあがめている。」[366]

ユニテリアンのこの考えに対する主要な反対論に対する回答。

1．キリストは神と呼ばれている。――それは、「当時の言葉遣いで、神の Person の代理者、あるいは、神の名において神の権威によって行なう者は神と呼ばれていた」からである[367]。

365）Smith, pp. 11-20.
366）Smith, pp. 20-23.
367）Smith, pp. 24-25.

2．神と人との間の仲立は、神であると同時に人である者でしかありえない。――必ずしもそうは言えない。「完全に正しい人間」であるキリストは、神と罪人との間を執り成すことができる（テモテ前書2：5.）[368]。

3．「わたしと父とは一つである」（ヨハネ伝10：30.）、「[証しする] 三者は一つです」（ヨハネ第一書5：7.）――これらは「一つの神」という意味ではなくて、「心が一つ」、「言うことが同じ」という意味である（ヨハネ伝17：11.21. 使徒行伝4：32.）[369]。

4．「神と等しい者」（フィリピ書2：6.）――ある特定の点で等しい、という意味である（ヨハネ伝14：28. 17：2.）[370]。

5．「世界の創造者」（ヘブライ書1：2. ヨハネ伝1：3.）――文字通りの意味ではなく、比喩あるいは象徴として言われている。聖書の中の意味不明の、難解な個所について、聖書の中の明確な部分や人間知性の確実な証拠と矛盾する意味は正しい意味ではありえない。このような場合、この言葉の意味はわからない、と言う方が安全である[371]。

6．聖書にキリストについて書かれていることは、キリストの人間としての本性を述べているのであって、神としての本性を述べているのではない。――もしもキリストが人間であると同時に神であって、二つの本性を持っているのであれば、そのような Person は死ぬことはありえないし、また、全知、全能であるはずである[372]。

7．「イエスは神によって生まれた子である」――「神の力の子であるだけで、神の Person の子ではない」（ルカ伝1：35.）[373]。

8．キリストが行なった奇蹟は神業である――人間も、神から力を与えられれば、奇蹟を行なうことができることは、モーセや使徒にも例がある（マタイ伝28：18. 使徒行伝2：22. ヨハネ伝3：2. 5：36.）[374]。

9．神の本性を人間は理解できない。――しかし、神は無限、全知、全能、神は人間ではない、死なない、自分の上に神はいない、他の者から力を受けることはない、ということは確実である。従って、そうではないイエスが神でないことは確実である。また、神が三つの Persons から成り立っているのであれば、そのどれもがそれぞれに神であることはありえない、ということも確実である[375]。

---

368) Smith, pp. 25-26.
369) Smith, pp. 26-27.
370) Smith, pp. 27-28.
371) Smith, pp. 28-29. Cf. Smith, p. 38. pp. 46-48. pp. 50-51. p. 62.
372) Smith, pp. 29-30.
373) Smith, pp. 30-32.
374) Smith, pp. 32-33.
375) Smith, pp. 33-35.

10. キリストは天から来た、父のところから来た、元いたところに昇った、などと聖書に書かれている。――キリストは福音を述べ伝えるために地上に遣わされる前に、この地上から天の父のもとに引き上げられ、神の心と意志を教えられ、権威と力を与えられた、と聖書に書かれている（ダニエル書 7：13-14. ヨハネ伝 3：13. 12：49.）[376]。

11. キリストは永遠である、と言われている。――神が父であれば、子が存在していない時があった。従って、これらの聖書の個所は比喩と理解すべきである（ペトロ前書 1：20. 参照）[377]。

12. キリストが神でないならば、キリストが罪人のために行なった贖いは、神の無限の正義を満足させるに必要であった無限の価値を持っていなかった、と言える。――聖書にこのような教えはない。聖書には、「一人の正しい行ないによって、無償のたまものがすべての人間に与えられて、命が義とされた［神は恵みと慈悲の新しい誓約を人間との間で立てられた］のです」（ロマ書 5：18.）と書かれている。「［義認は］キリストによって神に与えられた等価のものの結果ではなくて、キリストが父の命令に従って行なった正しい行ない、従順の結果であった。」等価のものが渡されていたのであれば、「無償の恵みによって救われる」のではない。聖書には「等価のもの」という言葉はない。「代価を払って買い取られた」（コリント前書 6：20.）、「多くの人の身代金として自分の命を献げる」（マタイ伝 20：28.）は、比喩として言われているのであって、人間の解放の場合であればそうであるような仕方で自由にされた、という意味である。

神の正義は、アダムが罪故に死んだのと同じく、すべての人間の死によって満足させられている。ある人々は、われわれは死ぬと共に地獄に落とされた、キリストは信ずる者を地獄から解放された、と言う。しかし、キリストが信ずる者を罰の一部から解放し、もう一つの罰はそのままにしておかれている、というのはおかしい。地獄は、第二の誓約を破った者に当然に与えられる罰である。キリストはこの罰からわれわれを解放したのではない。キリストによって新しい「恵みの誓約」がわれわれにもたらされて、われわれは「その約束を信じ、その教えに従うよう誠実に努め、罪を悔い改める」ならば、「生命と赦し」が与えられる。しかし、この誓約に従わないままで死に至る罪人のために、キリストは贖いをされてはいない[378]。

13.「イエスの御名を呼び求める」（使徒行伝 9：14. 22：16.）とある。――これは、キ

376) Smith, pp. 35-37.
377) Smith, pp. 37-38.
378) Smith, pp. 39-42. Cf. Smith, pp. 56-58.

リストを神として礼拝するということではない。聖書には、「キリストの御名によって父に願いなさい」(ヨハネ伝16：23.24.26.)、「父に祈りなさい」(マタイ伝6：9. ヨハネ伝4：23.フィリピ書4：6. エフェソ書3：14.)、「イエスによって、父である神に感謝しなさい」(コロサイ書3：17. エフェソ書5：20.)、「[イエスは罪人の弁護者として] わたしたちのために神の御前に現れてくださった」(ヘブライ書9：24. ヨハネ第一書2：1. ロマ書3：34. テモテ前書2：5. ヘブライ書8：6.)とある。キリストを神として礼拝するということは、神と人との間の仲立を取り去り、キリストが神の子であること、父が神であることを否定することである[379]。

14. ユニテリアンの教えは、最近現れた新しい考えである。——それは、聖書の多くの個所に明確に書かれている。しかし、[ユニテリアン反対者の]教えがずっと前からあったということは、その教えを真理とするものではない。理性と聖書に基づくものが真理である[380]。

15. 聖書の多くは神秘であり、われわれは聖書にあることは理解できないことであっても、信じなければならない。——聖書に明確に書かれていることは、どうしてそういうことが生ずるのかがわれわれの知性の及ばないことであっても、信ずるべきである。しかし、だから不可能なこと、矛盾を信じなければならない、ということにはならない。聖書に書かれている明白な真理、あるいは理性の自明の原理と矛盾する意味不明の神秘を信ずる必要はない。聖書にある意味不明の文章は、何らかの目的があって神は言われたのであるけれども、人間の知性には今はそれがわからないのである。救いに関わるキリストの福音は、どんな人間にも分かるものである[381]。

16. 理解できないことであっても信ずることによって救われる。——神の約束、脅しの信仰こそは、人間が誘惑、この世の欲に抗して神の教えに従うようにさせるものである。しかし、だから間違ったことでも信じなければならない、ということにはならない。間違いを信ずることは、悪魔の奴隷となることであり、避けるべきことである。自然の光と神の啓示とは共に神の法であり、真理と誤りとを区別する試金石である[382]。

17. 神は、人間のこの世及び来世の幸福のために、自分及び他人に対する不正、害のない聖なる生活を命じられている(ヨハネ第一書2：16. テトス書2：12. ミカ書6：8.)。信仰の役立ちは、このような従順、実際の行ない(これこそ「宗教の魂、命」)を命じ、行な

379) Smith, pp. 42-45.
380) Smith, pp. 45-46. Cf. Smith, p. 29. pp. 47-48. pp. 50-51. p. 62.
381) Smith, pp. 46-49. Cf. Smith, p. 29. pp. 50-51. p. 62.
382) Smith, pp. 49-51.

わせることにある。従って、三位一体のような、理解できない観念に同意しない者でも、神の教えに従い生きることができるから、神に呪われ、地獄に落ちることはありえない[383]。

18. ユニテリアンの考えに従えば、これまでに三位一体を信じて、死んだ敬虔で正しい人々を救いから除外することになる。――そういうことはない。未来の幸福は小さいものにはなるけれども、救いに必要な基礎を信ずる者は救われる（コリント前書 3：15.）。しかし、「とりわけよく諭されても［聖書と理性の議論を拒否して］三位一体に固執することは、非常に軽率、危険である［救いをもたらさない］。」[384]

19. 神であるキリストの、神の正義の要求にかなういけにえによって、贖いはなされた。――「死んでゆくイエスの血によって、わたしたちは、あらゆる罪から清められます。」（ヨハネ第一書 1：7.）イエスが神の霊に満たされていたことに間違いはない。しかし、それはイエスが神であったということではない。イエスは神の霊の力によってあらゆる誘惑をのりこえ、死に至るまで神に従順であった、このイエスの聖なる生き方が彼の捧げたいけにえを神に受け容れさせ、贖いとされたのである。十字架の上で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」［マタイ伝 27：46.］と叫んだ人が神であることはありえない[385]。

反対論への回答の一般原則は、多数の、明確な証拠によって真実である宗教の原則は、少数あるいは意味不明の証拠によって間違いとはなりえない、ということである[386]。

聖霊は、独立して存在する Person ではなく、「神の、目に見えない力」である[387]。

私は本書で、神の栄光と教会の平和がしっかりと立つことができる真理の基礎を述べようとした。しかし、私は、私の主と同じく、わずかの人々にしか信じられないと思われる。人間は、今でも「神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好む」（ヨハネ伝 12：43.）、「イエス・キリストのことではなく、自分のことを追い求めている。」（フィリピ書 2：21.）からである[388]。

スティリングフリートとロックとの間の『人間知性論』に関わる論争（1697-1699）については、妹尾剛光『ロック-スティリングフリート論争』関西大学経済・政治研究所, 1999. を参照。

383) Smith, pp. 51-54.
384) Smith, pp. 54-56.
385) Smith, pp. 56-58. Cf. Smith, pp. 39-42.
386) Smith, pp. 58-60.
387) Smith, pp. 60-62.
388) Smith, pp. 62-63.

付．オックスフォード大学における『人間知性論』読書禁止策動　1703.

1703年11月頃オックスフォード大学では、コリッジの長によるロックの『人間知性論』、ル・クレール Le Clerc の『物理学』、『論理学』読書禁止の動きがあった。

ロックは、この動きをアンソニ・コリンズ Anthony Collins のロック宛書簡（1704年2月22日付）に同封されたオックスフォード市裁判所判事ウィリアム・ライト William Wright のジェイムズ・ティレル James Tyrrell 宛書簡（1704年2月19日付）によって初めて知った[389]。

ロックは直ちにコリンズ宛書簡（1704年2月24日付）で、事の詳細を正確に、できるだけ他人に知られないようにして、調べるようライトに頼んでほしいと依頼するとともに、事の全貌が明らかになるまではこの事を誰にも言わないように求めた[390]。ロックは、1704年2月28日付コリンズ宛書簡でも、ライトに対する詳細調査の依頼を忘れないように、と書いている[391]。

一方、ティレルは、2月28日付ロック宛書簡でこの件に触れて、自分が知りえた限りでは、ライトの書簡にあったコリッジ長による読書禁止の指示が実際にあったと言っている人はいないし、そういうことがあったとしても、それは大学全体の中では少数の者の策動にすぎない、と書いている[392]。

ライトは結局この件についての詳細を探り出すことはできなかった[393]。

ロックは、コリンズ宛書簡（1704年3月13日付）で、「あの立派な長たちがまだ、完全に誤りのないところまで成長していないということがわかります。」[394] と書いている。

この読書禁止の動きについての最も詳細な報告は、ティレルがロック宛書簡（1704年4月17日付？）で次のように書いている。

1703年11月初め頃、オックスフォードのコリッジ長の会合で、John Mill [St Edmund Hall]が、大学で論理学の訓練が大いに減退しているのは新しい哲学の影響によるとして、告示を出して指導教員がロックの『人間知性論』と Le Clerc の書物［物理学、論理学］を生徒に読むことを禁止することを提案し、Roger Mander [Balliol]は賛成したが、Thomas

389) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 8, Letter No. 3467. Cranston, p. 466.
390) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 8, Letter No. 3470.
391) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 8, Letter No. 3474.
392) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 8, Letter No. 3477.
393) Cranston, p. 468.
394) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 8, Letter No. 3488.

Dunster [Wadham] は、『人間知性論』を擁護するとともに、告示による読書禁止は、外部の人々には、大学はアリストテレス以外のすべての哲学を読むことを禁止しようとしていると受け取られて騒がれるし、また、禁止すれば若者はその書物を買って読もうとしやすいから、善よりも多くの害をなすとして、反対した。改めての会合では、Jonathan Edwards [Jesus] の提案に従い、告示はせずに、コリッジ長がそれぞれの指導教員にこれらの書物を生徒に読まないようにと個人的に指示することを決議した。しかし、現実にこの決議が実行に移されたということを自分は聞いていないし、高教会派の人々の中にも、『人間知性論』に賛成し、生徒にそれを読むことを勧めている人々、例えば Henry Sacheverell, William Percival がいる[395]。

II. 義認論争

『キリスト教の合理性』の主題については、ロックは『キリスト教の合理性』の中で「この今の論考の主題である「義認」」[396] と書き、『キリスト教の合理性の第二弁護』「読者への序」の中では、『キリスト教の合理性』執筆、出版の経緯について、「[『キリスト教の合理性』が] 出版された年の初めに、国教反対者の何人かの間であのようにやかましく、熱烈に行なわれた論争がある日たまたま私の心にとまり、次第に私は義認の問題をこれまでよりも厳密に、より徹底して探究することになりました。聖書は、信仰が義とする、と率直、明快でした。そこで次の問題は、義とするのはどんな信仰か、人間が信ずればその人間を正しいとしてくれるものは何か、ということでした。これを見つけ出すために正しい道は、聖書を探ることである、と私は考え、そこで私は、新約聖書を読むことに真剣に取り組みました。それはただこの目的のためでした。その結果生み出されたものを、あなた[Bold] と世間の人々は見られたのです。……［こうして聖書を検討した結果、この教えが理性に適い、明白であることを（神学の諸体系は、私が聖書に明確に見出したことについては何も言っていませんでしたけれども）、私の心は確信しました。］……私の［この］確信を強めたのは、私がそれに導かれて、救い主がこの教えを広められたすべての情況の中でのそ

395) *The Correspondence of John Locke*, Vol. 8, Letter No. 3511. Cf. *Do.*, Letter No. 3477.
396) *R*, p. 158.

の振舞の驚くべき、神業の知恵を、また、そのような立法者がこの世の道徳を改革するために、神から遣わされる必然性を見出したということでした。」[397] 私が見出した聖書の教えは、啓示の必要はない、あるいは、啓示は不条理なことの信仰を要求している、と考える理神論者に対して特に、彼等はキリスト教を誤解しているということを明確にして、役に立つと思い、私はこれを出版することにした[398]、と書いている。

『キリスト教の合理性』執筆のきっかけとなったとロックが言っているイングランドでの義認論争は、1640-50年代のRichard Baxterら穏健カルヴァン派（長老派）と厳格カルヴァン派（Congregationalistsや Particular Baptists）との対立に始まった。

1690年トバイアス・クリスプ Tobias Crisp(1600-1643. 裕福なロンドン商人の子。Eton, Christ's College, Cambridgeで教育を受け、1624年BA, 1626年Balliol College, OxfordでMAを取得。同年Newington Buttsのrectorとされたが、翌年聖物売買の廉で罷免され、Brinkworth, Wiltshireのvicarとなった。市民革命では議会派を支持、1642年王党派軍隊がWiltshireに集結した時、ロンドンに移り住んだ。）の説教集 *Christ Alone Exalted: Being the Compleat Works of Tobias Crisp, D.D. Containing XLII. Sermons, On several Select Texts of Scriptures: Which were formerly Printed in Three small Volumes, by That late Eminent and faithful Dispenser of God's Word: Who was sometime Minister at Brinkworth in Wiltshire; and afterward many of the Sermons were preached in and about London. To which is now added, Ten Sermons, whereof Eight were never before Printed, Faithfully transcribed from his own Notes: Which is all that ever will be Printed of the said Doctor's*, London, William Marshal, 1690.（これまでに4回に分れて出版された44の説教に息子Samuelが8つの説教を新しく付け加えた、52の説教集。本書冒頭でSamuel Crispによって新しく付け加えられた説教は確かにTobias Crispの説教であると確言する12人の証人の中に、John Howeの名がある。Baxterらの、本書は反律法主義の傾向があるとする批判を受けて、Howeは、本書が本物であるとの保証は、内容に対する賛同を意味していない、と弁明した。最初の説教集 *Christ Alone Exalted in fourteen Sermons* は、1643年彼の死後Robert Lancasterによって出版された。ウエストミンスター会議ではこの書物を異端として焼こうとする試みがあったけれども、焚書は行なわれなかった。）の出版をきっかけとして、この義認論争は、Baxterと親交のあった長老派Daniel Williams（c. 1643-1716）らとSamuel Crispらとの間で再燃

397) *2VR*, pp. 186-187.
398) *2VR*, pp. 188-189.

した。ロックが触れているのは、この論争である。

クリスプは、*Christ Alone Exalted*（『キリストのみ高し』）の中で、「人間は罪の力の下にあり、罪を行なうのみであって、どれだけ有徳な人間でも、そのような罪にまみれた自分の正しさによって救いに到ることはできない。しかし、神は、人間が犯した罪のすべてをその人間から取り除いて、キリストに移された（転嫁 Imputation された）。キリストは人間の罪のすべてを自分に引き受けて、罪人とされ、十字架の上での死によって罪の代償を支払われ、罪から解放された。このキリストの力によってのみ、キリストを受け容れ、信ずる者はすべて、極悪の人間であっても、無償、無条件で罪のない、義であるものとされて、神の怒りから解放される。しかし、神に熱心に仕えている者のすべてが神に従い、キリストを受け容れている者ではない。人間の性向、意志、行為、その他の人間の中の善に関わりなく、神がその意志によって選ばれた者だけが、いつか神を信じ、キリストを受け容れて、救いに到るのである。また、キリストの力によって人間には恵みが、即ち、自分の罪に目が開かれること、悔い改め、信仰、キリストが自分の内に住む霊の生活が与えられて、罪の力からも次第に解放される。しかし、罪の征服、生活の聖化は救いの条件ではない。救いは、全く神の慈悲、恵みによる。」と主張していた。

ダニエル・ウィリアムズは、Daniel Williams, *Gospel＝Truth Stated and Vindicated. Wherein some of Dr. Crisp's Opinions Are Considered; And the Opposite Truths Are Plainly Stated and Confirmed*, London, John Dunton, 1692（2 版, 1692. 3 版, 1698）. などの中で、「キリストは十字架の上でわれわれの罪の罰のすべてを負って死に、神の正義を完全に満足させられた。しかし、この時、われわれの罪がキリストに転嫁されて、キリストが罪人となったのではない。われわれは赦されても、完全な聖化が達成されるまでは罪人である。ただ、赦される時に、罪の呪いから解放される。キリストに対する信仰と悔い改め、よき業は、義とされ、救いを受けるに値する根源の正しさではないけれども、義とされ、救いを受けるに不可欠の条件である。信仰ある者の徳は、完全なものではないけれども、神はそれを喜ばれる。」と主張した。

多くのパンフレットが書かれ、両派は互いに相手を「反律法主義 Antinomianism」あるいは「アルミニウス派、更にはソッツィーニ派と言ってよいほど」であると批難した。論争、批難の応酬は、1694 年後半から 1695 年春にかけて頂点に達した。

1673 年以来長老派と独立派はロンドン商人を対象に Pinners' Hall で共同の講演会を開いていたが、1694 年 8 月 Williams はこの講演者の地位から追放された。John Howe ら三人が彼と共に退き、長老派の講演会は Salters' Hall で独立して開かれることになった（こ

れは、1788年まで続いた)。

1695年には、Williamsには道徳に反する行為があるという批難が加えられた。長老派の調査委員会が設立され、8週間かけて幼少の頃からのWilliamsの行為の調査が行なわれ、「Williamsは完全に潔白である」と結論され、1695年4月8日総会はその旨を宣言した。

この後Williamsは、国教会の権威ある聖職者、ウスター主教スティリングフリートとOxfordのJesus Collegeの長ジョナサン・エドワーズJonathan Edwards (1629-1712)に対し、「キリストの贖罪においてキリストとわれわれとの立場が入れかわり、キリストは罪を負い、われわれは正しい者になるというCrispの考えを誤りとするWilliamsの考えは間違っているか。また、*Gospel*=*Truth*の考えはソッツィーニ主義かどうか。」の裁定を求めた。Williamsの論争相手の一人Stephen Lobb (-1699) もスティリングフリートの裁定を求め、ジョナサン・エドワーズをWilliams批判者として引用した。スティリングフリートはWilliamsに対し、彼の考えは正統であり、ソッツィーニ主義ではない、と答えた。エドワーズも、同じ趣旨の回答をした (1697.10.28.)。

これらの論争において、穏健カルヴァン派は、論争相手に対するよりも、論争相手が自分達と結びつけたアルミニウス主義に対して、より共感し、寛容であった[399]。

Victor Nuovoは、更に、『キリスト教の合理性』は、信仰は個々の人間による聖書の誠実な理解に基づくか、あるいは、聖書の唯一の誤りない解釈者としてのカトリック教会を必要とするかについての、当時のプロテスタントとカトリックの神学者の間の論争を踏まえていたことを指摘している[400]。

ロックに『キリスト教の合理性』を書かせたのは、キリスト教信仰の内実を明らかにしたいという、より長い期間にわたる、より広いロックの思いであったと考えられるけれども、これらの論争は『キリスト教の合理性』執筆のきっかけとして働いたと言うことがで

399) Dewey D. Wallace, Jr., 'Socinianism, Justification by Faith, and the Sources of John Locke's The Reasonableness of Christianity', in Richard Ashcraft (ed.), *John Locke Critical Assessment*, Vol. II, Routledge, London and New York, 1991, pp. 165-167. n16.
Joshua Toulmin, *An Historical View of the State of the Protestant Dissenters in England, And of the Progress of Free Enquiry and Religious Liberty, From the Revolution to the Accession of Queen Anne*, London, 1814 in Victor Nuovo (ed.), *John Locke and Christianity Contemporary Responses to The Reasonableness of Christianity*, Thoemmes Press, 1997, pp. 111-137.
Daniel Williams, *An End to Discord: wherein is demonstrated, That no Doctrinal Controversy remains between the Presbyterian and Congregational Ministers, fit to justify longer Divisions. With a true Account of Socinianism As to the Satisfaction of Christ*, 1699 in Victor Nuovo (ed.), *Do.*, pp. 138-148.
400) Victor Nuovo, Introduction to *John Locke and Christianity Contemporary Responses to The Reasonableness of Christianity*, Thoemmes Press, 1997, pp. xix-xxi.

きる。

Dewey D. Wallace, Jr. は、『キリスト教の合理性』における義認に関する次の考えは、市民革命、国王空位期の Baxter ら穏健カルヴァン派あるいは反カルヴァン派、更には、彼等を受け継いだ王政復古期の国教会広教会派 Latitudinarians の義認に関する考えにもあって、これらの点においてロックに大きな独創性はないことを指摘している。

1．信仰は、十分な正しさに代るものとして神に受け容れられる（改革派神学が考えるように、キリストの正しさが信仰ある者の正しさと神に見なされて、キリストの正しさ故に信仰ある者が正しいとされるのではない）。

2．信仰とは、命題を正しいとして知性で受け容れることである（キリストの正しさは十分であるということを、心で信頼して受け容れるのではない）。

3．［従って］義認のためには、信仰に加えて、神の法に従うことが必要である。

4．恵みは、「信仰の法」を与える新しい誓約を立てるという形で、即ち、「人間の側の信仰と悔い改め」という条件付で、働く（選ばれた者には無条件で働くのとは異なる）。

5．聖霊は、信仰ある者が善き行ないをするのを助ける（聖霊は、信仰ある者の中に宿って、彼を聖化するのではない）。

6．キリスト教の道徳は、聖霊の賜物に基づく全く新しい道徳ではなくて、永遠の道徳法がより明確にされ、それに新しい誘因が与えられたものである。

7．キリスト教は理性と調和している[401]。

これらの論点の中で、1，3，4，6，7 はソッツィーニ主義にもある考えである。2 については、啓示によって与えられた命題に対する同意と神あるいはキリストに対する信頼とは矛盾せず、十分に両立しうる。ロックは、この二つは結び合わさっていると考えている。ソッツィーニ派もそう考えている。5 についても、聖霊による助けと聖化とは完全に矛盾するものではない。ソッツィーニ派はこの二つを結び合わさったものとしてとらえている。ロック『パウロ書簡　義訳と注』の考えも同じである[402]。従って、Wallace のこの議論は、ロックの宗教論が彼自身の聖書読解を基に形成されたものであること、また、それはソッツィーニ主義と大きく重なり合うものであることを否定することにはならない。

ロックと広教会派（その救済論は、他のどの派によりもアルミニウス派に近い）には、このような共通の考えがあると同時に、次の点で違いがある。即ち、広教会派は、教義で

401) Dewey D. Wallace, Jr., Do., pp. 168-174. p. 177. Cf. John Marshall, *John Locke Resistance, Religion and Responsibility*, Cambridge U.P., 1994, pp. 407-413.
402) 妹尾剛光「晩年のロック思想の展開　『知性の導き方』と『パウロ書簡　義訳と注』」関西大学『社会学部紀要』32 巻 3 号，2001，3．考察の 4，6 を参照。

は、原罪による人間の堕落、キリストの贖罪、三位一体を認めており、また、宗教寛容については、広教会派の大勢は、さまざまな教会の間の寛容ではなくて、さまざまな考え方の者を包容する唯一つの教会内部の寛容、礼拝の統一、更には、国教会体制、非本質的な事柄に対する為政者の権限を主張していた[403]。

—2002. 7 .10 受稿—

403) John Marshall, 'John Locke and latitudinarianism', in Richard Kroll, Richard Ashcraft, and Perez Zagorin (eds.), *Philosophy, Science, and Religion in England 1640-1700*, Cambridge U.P., 1992, pp. 265-271.
なお、この二つの論争の概説は、Joshua Toulmin, *An Historical View of the State of the Protestant Dissenters in England* (1814) in Victor Nuovo (ed.), *John Locke and Christianity Contemporary Responses to The Reasonableness of Christianity*, Thoemmes Press, 1997, pp. 111-137. にある。